

ISBN 978-4-900986-13-8

名古屋大学メモリー



# 名古屋大学メモリー

創基から新制名古屋大学へと至る歴史資料解説図録

名古屋大学附属図書館医学部分館

# 名古屋大学メモリー

創基から新制名古屋大学へと至る歴史資料解説図録

蒲 生 英 博    編著  
高 橋 昭      監修

名古屋大学附属図書館医学部分館

2017

## 序 文

待望の冊子が刊行されることになりました。『名古屋大学メモリー』であります。

本冊子は名古屋大学附属図書館医学部分館や医学部史料室に収蔵されている古書や歴史的資料を纏め、解説を付したものです。

名古屋大学の前身となる名古屋藩立の仮医学校・仮病院が設立されたのは、明治4年（1871年）7月の廃藩置県の詔書が出された直前の同年5月でした。呱呱の声を上げた前身校・病院の発足は、日本史上最大の変革期である明治維新の渦中でした。以来、145年の歴史には危機存亡の波が何度もありました。第二次世界大戦では、終戦直前の昭和20年（1945年）3月の3度にわたる米軍の夜間盲爆の戦火により、本学は施設、設備とも灰燼に帰しました。1世紀以上にわたり収集された貴重な歴史的な図書や備品類は、一部疎開されましたが、疎開の途中や疎開先でも戦火を免れることができず、そのほとんどを失いました。

発足から第二次世界大戦まで苦難の道を歩んできた本学は、戦災を受けなかった大学に比し、古書や歴史的資料の所蔵が微々たるものであると思われておりました。平成7年（1995年）名古屋で開催された第24回日本医学会総会の「医学史展示」では、学外所蔵の多くの展示品を借用することによって開催に漕ぎ着けることができました。

今回、名古屋大学の創基から今日に至る歴史的資料の解説書を『名古屋大学メモリー』として発行されることになり、日本医学会総会医学史展示の際に経験した辛苦が蘇りました。しかし、本書の原稿を手にした時、それが払拭され、杞憂に過ぎないことを知りました。

名古屋大学医学部史料室（附属図書館医学部分館4階）は近年資料の収集や整備が進み、1995年当時とは格段に内容が充実されました。また、同図書館において2012年9月からシリーズとして開催されている「ミニ企画展」や、それに関連した講演会が回を重ね、資料の内容の吟味がより深くかつ詳細になされ、これらの蓄積が基盤となり、ここに『名古屋大学メモリー』として纏められることになりました。

本冊子は本学医学部図書館、同史料室所蔵の図書や講義録、絵葉書、写真などの歴史的資料の目録とその解説から成り立っています。図書では、中国医学の『傷寒論』（200年頃）、Vesalius の『人体解剖梗概』（1642年）、貝原益軒『養生訓』全4巻、杉田玄白著『解体新書』

（1774年）図1巻・本文4巻、緒方洪庵（訳）『扶氏経験遺訓』（1857年）などの古典的名著が含まれています。これらの世界的な名著が名古屋大学に所蔵されており、いつでも原物を手にとり、また読むことができることは、至上の幸いです。

『尾州徳川藩種痘所記録』など尾張地区に関係の深い図書や、名古屋大学の前身から発行された図書や資料が数多く含まれていることも大きな特色であります。

写真の中で、日本医学に大きな貢献を果たした長與専斎（内務省衛生局の創始者）、愛知医学校校長を務めたのち日本の政界や海外で活躍した後藤新平（鉄道院総裁、内務・外務大臣、東京市長などを歴任）の肖像写真や、来日時に名古屋に立ち寄ったドイツの細菌学者 Robert Koch を囲む当時の名古屋の医学者の記念写真などは歴史的に価値の高いものです。

講義録の中で特筆すべきものとして、明治初期の東京医学校～帝国大学医科大学のお雇い外人教師 von Baeltz や Schultze の講義録があります。これらは、川原 汎一等教諭（明治16年東京大学卒）の美しい直筆によるもので、整理された見事な講義録です。

採録されたすべての項目は、その内容の概要が的確に紹介され、また人名や物品名には振り仮名がつけられています。完備された索引とともにまことに利用者にとって親切な配慮です。これらは、編集者の図書館医学部分館 蒲生英博氏のご尽力によるものです。

戦災で、本学は重要な古書や歴史的資料のほとんどを失ったと思っておられる方にとっては、本冊子を手になされると、その認識を一変されるに違いありません。本書には、まだ採録されていない貴重な物品が多数あり、これらがより完璧に纏められる日の遠くないことを願っています。

本学の歩みのみでなく、日本の医学に関心を寄せられる人が、一人でも多く本冊子を有効に利用されることを祈念しております。

2017年1月

名古屋大学名誉教授 高 橋 昭

# 名古屋大学メモリー

## 目次

序文 高 橋 昭

「名古屋大学メモリー」について ..... i

1. 文書 ..... 1

2. 図書 ..... 11

3. 絵画・掛軸 ..... 57

4. 図・絵葉書 ..... 62

5. 写真 ..... 69

6. 医療器具 ..... 82

7. 講義録・ノート ..... 87

8. その他 ..... 97

人名索引 ..... 105

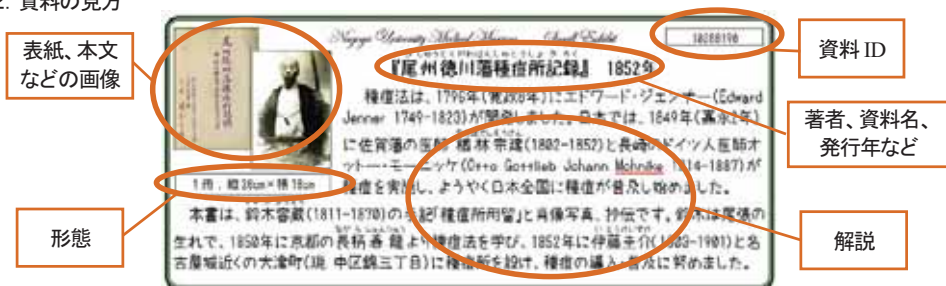
書名・事項索引 ..... 111



## 「名古屋大学メモリー」について

1. 名古屋大学附属図書館医学部分館は、医学部史料室(医学部分館4階)に所蔵している歴史資料を基に、2010年10月から「近代医学の黎明 デジタルアーカイブ」をインターネットで公開し、2012年9月からは、市民も気軽に観覧できるミニ企画展を継続開催しています。  
「名古屋大学メモリー」は、「近代医学の黎明 デジタルアーカイブ」とミニ企画展の成果を、解説図録としてまとめたもので、平成27年度第2回名古屋大学全学同窓会大学支援事業の助成を受けて発行します。

### 2. 資料の見方



### 3. 創基から新制名古屋大学へと至る歴史

- |              |  |
|--------------|--|
| 1871年(明治4年)  | 5月 仮病院(名古屋藩元評定所)・仮医学校(名古屋藩元町役所)開設  |
| 1872年(明治5年)  | 4月 義病院(名古屋藩元評定所)として経営  |
| 1873年(明治6年)  | 5月 仮病院(西本願寺別院)として経営、11月 医学講習場(西本願寺別院)設置  |
| 1875年(明治8年)  | 1月 愛知県病院と改称  |
| 1876年(明治9年)  | 4月 公立病院、公立医学講習場と改称、6月 公立医学所と改称   |
| 1877年(明治10年) | 7月 天王崎町(現 中区栄)に移転  |
| 1878年(明治11年) | 4月 公立医学校と改称  |
| 1881年(明治14年) | 10月 愛知病院、愛知医学校と改称  |
| 1901年(明治34年) | 8月 愛知県立医学校と改称  |
| 1903年(明治36年) | 7月 愛知県立医学専門学校として新発足  |
| 1908年(明治41年) | 4月 第八高等学校設置  |
| 1914年(大正3年)  | 3月 愛知県立医学専門学校、愛知病院が中区(現 昭和区)鶴舞町に新築、移転  |
| 1920年(大正9年)  | 7月 愛知医科大学設置、11月 名古屋高等商業学校設置  |
| 1931年(昭和6年)  | 5月 官立移管、名古屋医科大学となる   |
| 1939年(昭和14年) | 4月 名古屋帝国大学創設(医学部と理工学部の2学部)、5月 名古屋帝国大学臨時附属医学専門部設置   |
| 1944年(昭和19年) | 3月 名古屋経済専門学校と改称、4月 名古屋帝国大学附属医学専門部と改称   |
| 1945年(昭和20年) | 4月 岡崎高等師範学校設置  |
| 1947年(昭和22年) | 10月 名古屋大学(旧制)と改称、名古屋大学附属医学専門部と改称   |
| 1948年(昭和23年) | 9月 名古屋大学文学部、法経学部を設置  |
| 1949年(昭和24年) | 5月 名古屋大学(旧制)、附属医学専門部、第八高等学校、名古屋経済専門学校、岡崎高等師範学校を包括し、文、教育、法経、理、医、工の6学部及び環境医学研究所で新制名古屋大学として発足 |

4. 「名古屋大学メモリー」は、「近代医学の黎明 デジタルアーカイブ」及び「名古屋大学学術機関リポジトリ」で全文を公開しています。

近代医学の黎明 デジタルアーカイブ <http://www.med.nagoya-u.ac.jp/medlib/history/link.html>

名古屋大学学術機関リポジトリ <http://hdl.handle.net/2237/25058>

## 1. 文書

Nagoya University Medical Museum Small Exhibit

### 三村玄澄『往診予定之書』 1840年頃



1 枚：縦 17.3cm×横 31.5cm  
箱：縦 27.8cm×横 5.2cm×高さ 4.4cm

この書は、玄澄の自筆で、明日の九つ時(午後0時)に、供を揃えて、どこをどのように回り、往診するかを記したものです。

Nagoya University Medical Museum Small Exhibit

10288190

### 『尾州徳川藩種痘所記録』 1852年



1 冊：縦 26cm×横 18cm

本書は、鈴木容蔵(1811-1870)の手記「種痘所用留」に肖像写真、抄伝です。鈴木は尾張の生れで、1850年に京都の長柄春龍から種痘法を学び、1852年に伊藤圭介(1803-1901)と名古屋城近くの天津町(現 中区錦三丁目)に種痘所を設け、種痘の導入・普及に努めました。

Nagoya University Medical Museum Small Exhibit

11957234

### 『北越従軍銃創図録』 1868年



手稿本 23 丁(46 ページ)  
縦 13cm×横 17cm

戊辰戦争で旧幕府(北越)軍を追った官軍一従軍医 柏崎大病院頭取 赤川玄樸(1832-1903)による図録とされています。

イギリス(アイルランド)公使医員ウィリアム・ウィリス(William Willis 1837-1894)は官軍の依頼で従軍し、旧幕府(北越)軍を追い、銃創治療に不慣れた日本人医師を指導しながら、イギリス流の外科治療を戦傷者に施しました。その指導を受け治療に当たった筆者が、数10人の銃創治療の状況を図で記録したものです。

コロールハウム(クロロホルム)麻酔による手術を記載したわが国最初の記録とされています。

Nagoya University Medical Museum Small Exhibit

11902788

### ひきふだ そこうえんわりぐすり 引札『蘇香圓煉薬』 明治



1 枚：縦 25cm×横 34cm

引札は、江戸から、明治、大正時代にかけて、商品の売り出しや開店の披露などのために配布した広告チラシです。薬の引札では、薬の名前、挨拶文、薬の効能などの説明、商店主名などが書かれています。

これは、名古屋押切町五丁目の中島茂吉(飛驒屋茂吉)が売り出した蘇香圓という煉薬の、木版墨刷の引札です。

「のぼせ症と、たん、せき、よわみの妙薬」と書かれています。

Nagoya University Medical Museum Small Exhibit

11904622

### 『名古屋縣病院規則』 1871年



5 丁：縦 22.7cm×横 15.9cm

1871年(明治4年)、名古屋藩は元評定所に仮病院を開き、高崎藩の医師 張三石を招聘し、また元町方役所に仮医学校を設けて、張三石を教師、苅谷藩士 鈴木甲蔵を助教として、患者の診療と西洋医学を教育しました。これが名古屋大学の創基とされています。(仮病院の開設時期については、名古屋藩時代の5月説と名古屋県時代の8月説の二つの説があります。)

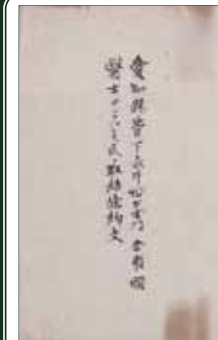
名古屋縣病院規則は、明治4年8月に制定されました。

「定価 寄宿病人 一日一人 銀 拾五銭」、「通い病人の定 診察料一切差出に不及事」、「薬種料 一日分 銀 三銭より五銭迄」などがあります。

Nagoya University Medical Museum Small Exhibit

11935852

### あいちけんかん ながい まつ えもん 愛知縣管下永井松右衛門



5 丁(7 ページ)  
縦 33cm×横 23cm

### がっしゅうこく い し ママ し とりむすびじょうやくぶん 合衆國醫士ヨンクハンス氏取結條約文 1873年

1873年(明治6年)5月、西本願寺別院に再興された病院は、佐賀県好生館病院教師を退任したばかりのドイツ系アメリカ人ヨングハンス(T. H. Junghans)を3年契約で教師に迎えました。名古屋大学最初のお雇い外国人教師です。生没年、フルネーム、出身学校、取得学位など不明で、写真もありません。

病院における診療、医学講習場での講義、解剖の公開等、ヨングハンスが果たした役割は大きく、1874年9月、本邦初といわれる皮膚移植手術を行って、世人は目を見張りました。

# ヨングハンス 植皮手術 (『大阪 錦 画新聞』23号) 1875年

1 枚 :  
縦 23.8cm  
× 横 17.1cm



1874年(明治7年)9月、ドイツ系アメリカ人ヨングハンス(T. H. Junghans 日本語表記は雍翰斯)は、愛知県病院において本邦初といわれる皮膚植皮手術を行いました。この手術は、『大阪錦画新聞』23号(1875年)で報じられ、世人は目を見張りました。

『愛知県公立病院及醫學校第一報告』(1880年)の病院沿革略誌は次のとおり伝えています。「本院に於いて洋教師「ヨングハンス」左脚火傷患者の瘻痕に植皮法を行う蓋し我邦此術を行う最も新奇とする所にして衆医員大いに其術の巧妙なるを歎賞せり抑々該患者は当県下愛知郡中根村農 伴野新左衛門なる者にして而して弟新蔵奮然義の為に左臂の皮膚の分割を乞い之を移植せし者なり其友愛の情掬すべく官亦之を嘉しない内務省に具申し金若干を賜うて褒賞せり」

# ローレンツ自筆のドイツ語格言 1880年

**Was Hännschen nicht lernt, Lernt Hanns nimmermehr.** Nangoja, 12. April 1880  
(ハンスが少年時代に学習しないことを、大人になってから学習することは最早ない)

[Hännschen は Hans に指小辞 chen が付いた愛称で、正式には Hännschen ヘンスヒェン]



1 枚 : 縦 11.4cm × 横 17.9cm

ローレンツ(Albrecht von Roretz 1846-1884)は、1876年(明治9年)5月にヨングハンスの後任として愛知県公立病院および公立医学講習場へ着任した外国人教師です。

この格言は、1880年4月に離任する時に、惜別の辞として残したものです。意識すると、「少年老い易く学成り難し」といったところでしょうか。

# 醫學卒業候事 1881年



1 枚 : 縦 39cm × 横 51cm

後藤新平(1857-1929)が愛知醫學学校長であった1881年(明治14年)10月の卒業証書で、1882年4月に愛知病院の診察医試補となった齋藤道四郎(1858-1930)に授与したものです。

上に桃、下に蛤があしらわれています。桃は疫病を駆逐し、蛤は火傷を治す効能がある、という古来の説と、欧米各国の説とともに参考にするという温故知新の考えから後藤が考案したデザインです。『愛知病院及愛知醫學学校第二報告』(1880年)には、「明治14年6月、本校卒業証書の雛形を創定しその鏤刻を大蔵省印刷局に嘱す」とあります。

# 大野海水浴法一斑 1892年頃

江戸時代に、愛知県知多半島の大野(千鳥ヶ浜)で、病氣治療のために「潮湯治」が行われていたことが『尾張名所図会』などにより知られています。



1 枚 : 縦 26cm × 横 35cm

後藤新平(1857-1929)(当時愛知病院長)は、海水浴の医学的な効果に注目し、近代的な海水浴の普及に努め、1881年(明治14年)、大野に海水浴場を開設し、1882年には、日本で最初の海水浴啓蒙書といわれる『海水功用論』を出版しました。

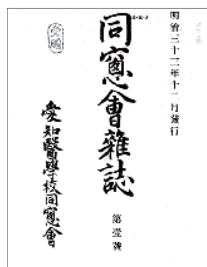
「大野海水浴法一斑」には、「当海水浴場ハ明治十四年夏内務省三等技師後藤新平君実地御検査有リ 同十五年夏内務省衛生局長長与専斎(1838-1902)君及後藤技師実地御検査相成大ニ称赞シ玉ヘリ」とあります。

# 『愛知醫學学校同窓會雑誌』第壹號 1900年

1900年(明治33年)10月28日に発足した愛知医学校同窓会の会報『愛知醫學学校同窓會雑誌』は、誌名の変遷を重ねました。

1933年(昭和8年)からは、講師・助手等の教官を編集者とする『鶴天学友会報』(第1-12号 1933年7月-1935年7月)と、自治への希望が強くなった学生部会が主体で発行する『名大』(第1-23号 1933年1月-1935年4月)の併行発行の時期を経て、1935年より『名大学友会報』として統一され、その後、『名帝大医学部学友会報』、『名大醫學部學友會報』、『名大醫學部學友時報』へと改称されました。

『名大醫學部學友會報』は1940年60号をもって一時休刊となりました。その後、『名大醫學部學友會雑誌』などの誌名で、1941年1月から1942年2月にかけて3回発行され、1946年11月以降は定期的に発行されています。

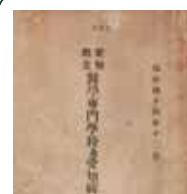


第1号:  
縦 22cm × 横 19cm

# 『愛知縣立醫學專門學校及愛知病院一覽』1912年

名古屋大学の前身校である公立医学校(1878-)は、愛知医学校(1881-)、愛知県立医学校(1901-)と改称し、1903年(明治36年)の専門学校令により、高等専門教育を行う愛知県立医学専門学校となりました。1914年3月には、天王崎町(現 名古屋市中区栄一丁目)から、現在の名古屋大学鶴舞キャンパスに移転しました。

本書には、沿革、専門学校令、諸規程、職員、生徒、卒業生、患者数一覧、敷地建物略図などが掲載されています。1911年12月に調査し、その後の1912年の草稿脱稿までの期間の事実を補ったものです。



340p : 縦 23cm × 横 16cm





Nagoya University Medical Museum Small Exhibit

しょうかくきせいどうめいかい きろく

# 昇格期成同盟会『記録』 1919年

1918年(大正7年)12月6日、官学以外に公・私立大学を認め、その目的・組織および監督を規定した大学令が公布されました。愛知県立医学専門学校では、官立医科大学昇格枠から漏れていることがわかり、校友会は、翌 1919年1月25日に昇格期成同盟会を結成し、山崎正董(1872-1950)校長を始め、教職員、生徒は全校をあげて請願運動を開始しました。

大学令に基づき、1920年3月、愛知県臨時県会は公立大学設置の件を可決し、同年7月に県立愛知医科大学が開校しました。

1冊：縦23cm×横16cm

Nagoya University Medical Museum Small Exhibit

あいち い かだいがくびょういん ないかびょうしやうにっし

# 『愛知医科大学病院 内科病症日誌』 1927年



愛知県立医学専門学校は、県会の承認を経て、1914年(大正3年)、鶴舞の地に新校舍・新病院が落成しました。1918年の大学令及び高等教育拡張計画による官立医大昇格を目指して、1920年7月に愛知県立の医科大学を実現させました。

1927年当時の附属医院長は、田村春吉(1883-1949)でした。

5枚：縦28cm×横40cm

Nagoya University Medical Museum Small Exhibit

なごや い かだいがくれいきしゅう どうしやだいによう

# 『名古屋医科大学例規集：謄写代用』 1931年頃

次の例規により構成されています。官制(官立医科大学官制、会計検査院法)、服務(文官懲戒令～官立大学長職務規程)、財務(会計規則～物品会計規則)、学事(大学令、学位令)、例規(名古屋医科大学規則～警備規程)



71p：縦22cm×横15cm

Nagoya University Medical Museum Small Exhibit

なごや い かだいがくふぞく いん ないかびょうしやうにっし

# 『名古屋医科大学附属醫院 内科病症日誌』 1932年



17枚：縦28cm×横40cm

県立愛知医科大学は、県費による補助が少ないため、経営を病院収入に依存せざるを得ませんでした。この状況を打開するためには、帝国大学への発展昇格が最善であり、官立医科大学への移管が次善の策でした。しかし、昭和恐慌期の財政下で、帝大昇格は覚束ないと判断から、官立移管が帝国議会で承認され、1931年(昭和6年)5月1日に、官立名古屋医科大学として発足しました。

1932年当時の附属医院長は、勝沼精藏(1886-1963)でした。

Nagoya University Medical Museum Small Exhibit

あいちけんしやうわじゅくどうがいによう

# 『愛知縣昭和塾堂概要』 1933年

11903907

愛知県昭和塾堂は、1926年(大正15年)、通常県会において建設予算12万円が決議され、1928年、名古屋市東区田代町字城山(現 千種区城山町)に竣工し、青年団その他各種団体の幹部養成、社会教育教化に開する必要な事業を行う教育施設として使用されました。

本館は鉄筋コンクリート造り2階建て、塔部は4階建て、別棟に木造の体育館がありました。

戦時中は東海軍司令部として使用されていました。1945年(昭和20年)3月の空襲により62%以上に及ぶ建物を焼失した名古屋帝国大学は、同年末、昭和塾堂を借用し、解剖、病理、生理、薬理、衛生の各教室を移転し、医学部及び専門部の第一、第二学年の授業を開始しました。

昭和塾堂は、現在、愛知学院大学大学院歯学部研究棟として使用されています。



[4], 62, [2]p :  
縦22cm×横15cm

Nagoya University Medical Museum Small Exhibit

こじまきよじ

# 小島喜代次編『MARUKO PRICE LIST』 1934年

11904607

洋薬品、和漢薬、他社の薬品の他、マルコ発売品の価格表です。

発行所のマルコ小島商店は、名古屋市東区京町(現 中区丸の内三丁目)にあった薬品会社で、マルコ製薬を経て、現在は、日医工株式会社となっています。

「拙者儀許可ヲ得テ…タルコ相違無之依業務上必テ要ノ際毒薬劇薬類ヲ購求候ニ付明治22年法律第10號薬品営業並薬品取扱規則ニ依リ證明候也 名古屋市東区京町二丁目壹番地」(證明書より)



12p：縦27cm×横20cm



## 愛国報國機「大學高専號」献納會『献納據金締切延期/件』 1934年

第二次世界大戦前、民間からの寄附金によって献納された陸軍航空機を愛国機といい、海軍航空機を報国機と呼びました。

1934年(昭和9年)2月25日、愛国報國機「大学高専号」献納会は、会長 鳩山一郎(1883-1959)文部大臣名で学生代表委員宛てに、献金據金の締切延期、飛行機献納期日の変更、第二次献納據金の募集などを依頼しました。

機体に「大学高専号」と入れた九〇式艦上戦闘機三型は、同年6月17日に献納されました。



4枚：縦18~20cm×横40~55cm

11850622

## 名古屋帝國大學醫學部附屬醫院『病院防空』 1943年



名古屋師団の小越前防衛主任参謀等の指導を得て、また田村春吉(1883-1949)医学部長、勝沼精藏(1886-1963)医院長、三輪誠(1889-1946)図書館長の教示に基づき、山元昌之(1904-1994)附属医院事務長がまとめ1943年4月24日に『部外秘』として発行しました。

1945年2月、渋谷元治(1876-1975)総長は空襲に対する処置をまとめました。「①医学教育の中枢ともいべき附属医院は空襲下名古屋市民の尤も重要な治療機関である。随ってこれは疎開することは不可能であった。②医学部も大別して基礎と臨床、また内科、外科、耳鼻科、眼科等の諸学科に分かれて居るが、これ等を別々に隔たった場所に置いては教育も研究も殆んど出来ない。そこで特殊の戦時研究施設と応急治療上必要なる薬品、器具等を比較的安全の場所に移す程度の疎開を行うこととした。」

25p :  
26cm

11850610

## 『総合大學設置ニ關スル縣會意見書』 1937年

1918年(大正7年)12月6日、官学以外に公・私立大学を認め、その目的・組織および監督を規定した大学令が公布されました。同月、愛知県通常県会において、総合大学設置に関する建議が政友会等から提出され、可決されました。

愛知県立医学専門学校(1903-1920)は、大学令に基づき、1920年に県立愛知医科大学(1920-1931)となり、1931年には国に移管されて官立名古屋医科大学(1931-1939)となりました。

1937年(昭和12年)12月14日、愛知県会で、総合大学建設方に関する件が満場一致で可決されました。文化の高揚、産業の開発に寄与する多数平和の戦士および満州、支那において活躍するための人材養成の必要性が強調されています。



[6]丁：26cm

## 『名古屋醫科大學附屬醫院 内科病症日誌』 1943年



17枚：縦27cm×横37cm

1943年(昭和18年)、戦争による物資の欠乏により、金属製品の供出が求められ、名古屋医科大学構内に設置されていた熊谷幸之輔(1857-1923)の銅像も、医学部長田村春吉(1883-1949)の告別の辞により供出しました。

1939年4月1日に、名古屋帝国大学が創設され、官立名古屋医科大学は名古屋帝国大学医学部に改組されましたが、1943年のこの病症日誌は名古屋医科大学の用紙が使われています。

1932年当時の附属医院長は、勝沼精藏(1886-1963)でした。

11848902

## 名古屋醫科大學配屬將校『國家總動員法』 1938年頃

国家総動員法は、1938年(昭和13年)4月1日に公布、5月5日から施行されました。日中戦争に際し、国防目的達成のため、国内の人的、物的資源を統制、運用することを目的とし、労務、資金、物資、物価、企業、運輸、貿易などについて統制の権限を政府に与えた法律です。これに基づき、国民徴用令、国民職業能力申告令、価格等統制令、生活必需物資統制令、新聞紙等掲載制限令その他の統制法規が作られ、1941年3月大幅な改正が行われて罰則なども強化されました。太平洋戦争に突入すると、その適用は拡大されて、国民生活を全面的に拘束しました。1946年4月1日に廃止されました。

この冊子は、名古屋医科大学配属将校から配付されたものです。

11p : 縦22cm  
×横15cm

11903331

## 厚生省『職業能力申告手帳』 1944年

10p :  
縦15cm×横11cm

1937年(昭和12年)に日中戦争が起こると、第1次近衛文相内閣は戦争協力体制をつくるために、国民精神総動員運動を起こしました。翌年、国があらゆる人や物を統制・運用する権限を持つ国家総動員法が成立し、この規定に基づき1939年に国民職業能力申告令が公布されました。国が必要な時に動員できるようにするため、氏名、生年月日、本籍、居住地、兵役関係、学歴、職業名、就業場所などを記載した『職業能力申告手帳』が交付されました。

当初、申告すべき者は、16歳から50歳未満の男子国民で、厚生大臣の指定する職業の従事者、指定する大学、専門学校、実業学校などで指定する学科を履修し卒業した者などでしたが、1941年の国民労務手帳法では、14歳から60歳未満、命令により定めた技術者、労務者へと拡大しました。

Nagoya University Medical Museum Small Exhibit 11850630

かつめせいぞう やまとまさゆき びょういんぼうくう せんせき せんくん  
**勝沼精蔵、山元昌之『病院防空 一戦跡と戦訓』 1945年**

名古屋帝国大学医学部附属医院の勝沼精蔵(1886-1963)医院長と山元昌之(1904-1994)事務長が、1945年(昭和20年)4月3日に秘として発行しました。

謄写版印刷で、紙縫い綴じです。内容は次のとおりです。

Ⅰ. 総説: 病院防空は一般防空業務の外に、病院のみの有する特異性に支配される。Ⅱ. 戦跡: 3月12日、19日、25日の3回にわたる空襲時の職員数、入院患者数等と、詳細な記録。

Ⅲ. 戦訓: 一般的な問題(水不足、防護当直員の相当数確保、物品疎開の早急・徹底的実施、食糧配給手配、鉱石ラジオ・自転車・木炭自動車の確保)、病院独特の問題(患者避難、医師・看護婦の一般防空業務担当後の傷者治療体制、収容患者の後送と食餌状況)

8丁:  
縦 24.2cm  
×横 18.0cm

Nagoya University Medical Museum Small Exhibit

くうしゅう ひ がい か しょうず  
**空襲被害箇所要図 1945年**

1942年(昭和17年)4月、名古屋に初の空襲がありました。名古屋には軍需工業が集中していたため、1944年12月以降、合計63回の空襲を受けました。

1945年3月12日の空襲では、医学部及び附属医院の木造建物の大部分を焼失、3月19日の再度の空襲により病院建物4棟を失い、3月25日の3度目の空襲では残存建物のガラス窓に大被害を受け、戦前の建物の63%余りを焼失しました。

これは、3月12日(図面では13日)と19日の被害箇所を描いた図面です。

1枚: 縦 34cm × 横 37cm

Nagoya University Medical Museum Small Exhibit 11850628

な ご やていこくだいがく い がくぶ ふぞく い いん きゅうご びょういん きゅうごはん  
**名古屋帝国大学医学部附属医院 救護病院 救護班**

くうしゅう よ がいしょうかんじや ちりょうせいせき いこうしゅうせん  
**『空襲二因ル外傷患者ノ治療成績:昭和20年3月19日以降終戦まで』 1945年**

1945年(昭和20年)2月初めごろから、名古屋市の空襲が激しくなるに従い、負傷者が激増し、附属医院での治療が求められました。

勝沼精蔵(1886-1963)附属医院長は、少なくとも応急治療用器具と薬品の一部は、瀬戸町に借用できそうな鉄筋コンクリートの家に疎開させる必要があるとして輸送用トラックの斡旋を依頼し、渋沢総長は県に交渉しました。しかし、市民は医院が名古屋を離れることを嫌い、趣旨には賛成するが、未だ空襲の惨禍を知らないという理由から、県から融通されたトラックは少なく、3月の空襲前までに極めて一部が疎開できたばかりでした。

5枚: 26cm

Nagoya University Medical Museum Small Exhibit

な ご やていこくだいがく い がくぶ ふぞく い いんかつめまないか びょうしやうにっし  
**『名古屋帝國大學附屬醫院勝沼内科 病症日誌』 1946年**

1939年(昭和14年)4月に創設された名古屋帝国大学には、医学部と理工学部の2学部があり、同年5月に臨時附属医学専門部が設置されました。

1946年1月に、名古屋帝国大学初代総長渋沢元治(しぶさわもとじ)(1876-1975)が退職し、田村春吉(たむらはるきち)(1883-1949)が第2代総長となりました。医学部長には戸辺近太郎(とべちかたろう)(1896-1977)が就任し、勝沼精蔵(1886-1963)医院長は退職して、齋藤真(さいとうまこと)(1889-1950)医院長となりました。

8枚: 縦 27cm × 横 37cm

Nagoya University Medical Museum Small Exhibit 11902787

こ きりはらきやうじゆこくべつしきじゆんじよ  
**『故桐原教授告別式順序』 1949年**

桐原真一(1889-1949)は、東京市本所区千歳町(現 墨田区千歳)の出身で、1915年(大正4年)東京帝国大学医科大学を卒業し、京城(日本統治時代の旧称、現 ソウル)の総督府医院、医学専門学校などを経て、1926年、県立愛知医科大学講師となり、外科学を担当しました。1931年に教授となり、1933年(昭和8年)ウォルフ(Georg Wolf 1873-1938)とシンドラー(Rudolf Schindler 1888-1968)による軟性胃鏡を改良し、器械技師 武井勝に依頼して、1937年2月に先端が手元の操作により屈曲できる桐原式軟性胃鏡を完成しました。

キリスト教式告別式は名古屋帝国大学医学部講堂で行われました。東大で同期であった同僚 齋藤真(さいとうまこと)(1889-1950)は、その日「友逝きて一人淋しさまさりけるわれ還暦の春を迎へて」という歌を詠んでいます。

1枚[2つ折4p]:  
縦 18cm × 横 13cm

Nagoya University Medical Museum Small Exhibit 20134060

でんせんびょうかかんじやとどけ で ひょう  
**『傳染病患者届出票』 1949年頃**

伝染病予防法は、1897年(明治30年)3月制定され、同年5月1日に施行されました。1998年(平成10年)感染症法が制定されたことにより、1999年4月1日に廃止されました。

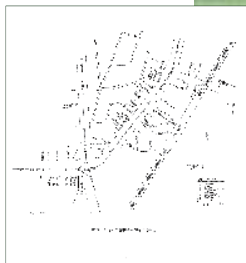
第三条には「医師伝染病患者を診断し若は其の死体を検案(死亡事実を医学的に確認すること)したときは其の家人に消毒方法を指示し且直に患者若は死体所在地の警察官吏、市長村長、区長、戸長、検疫委員又は予防委員に届出べし其の転帰(病気がたどった結果や経過。治癒、治療継続、死亡など)の場合亦同じ」とあります。

1945-1949年に発行された切手が貼付されています。

縦 32cm × 横 15cm



## 『大学生生活(昭和15-18年)を顧みる：十八会50周年記念誌』 1993年



108p : 26cm

名古屋帝国大学医学部を1943年(昭和18年)に卒業した76名(病気のため卒業の遅れた3名を含む)の学生による十八会が発行した記念誌です。

我等の学生生活史、座談会「恩師とその講義の思い出を語る」、座談会「亡き級友の思い出を語る」、私の大学生生活、学外生活の場、当時の部活動など多彩な内容で構成されています。学外生活の場「当時の学生馴染みの店(鶴舞近辺)」が記されています。昭和10年代当時は名古屋市内に市電が通っていました。(名古屋市電は、1974年3月31日に全廃されました。)

## 歴史の門を保存(『名大医学部学友時報』第600号) 2000年



16p : 縦30cm×横21cm

愛知県立医学専門学校・愛知病院は、1877年(明治10年)に建てられて老朽化した天王崎校舎(中区栄一丁目)から、1914年(大正3年)3月、現在の名古屋大学医学部・附属病院の地(昭和区鶴舞町)に移転し、学士号が取得できる大学昇格を目指しました。

移転時に築かれた医学専門学校の正門及び外堀、愛知病院の正門と通用門及び外堀は、現在、文化庁の登録有形文化財(建造物)として、鶴舞キャンパス南側の歩道沿いに保存されています。

## 2. 図書

## 張仲景『傷寒論』 200年頃(1816年玉峯蔵板)

79丁  
縦23cm×横16cm

張仲景(150-219)は、名は機、仲景は字です。長沙(湖南省)の太守(長官)となり、中国医学における医方の祖、医聖とされています。

古くからの医書を参照し、自らの治療経験を加えて『傷寒雜病論』を著し、後世の整理を経て、傷寒に関する部分を再編した『傷寒論』と、雜病部の『金匱要略』(正式には『金匱要略方論』)の2つの書に分かれました。

傷寒とは、高熱を伴う疾患のことです。腸チフス、風邪などが、時間の経過とともに変化していく病態を、大局的に把握、分類し、分類別に治療法や処方、治療の原則が記されていて、疾病そのものに対する見方や診断方法を確立した医学書であり、後世に大きな影響を与えました。小青竜湯、五苓散、葛根湯などが漢方処方として収載されています。

## 張仲景『金匱要略』 200年頃(1806年諸仙堂蔵板)

3, 10, 109丁  
縦19cm×横13cm

張仲景(150-219)の『傷寒雜病論』のうち、『傷寒論』を除いた雜病部の『金匱要略』(正式には『金匱要略方論』)であるといわれています。

雜病部は長らく行方不明でしたが、北宋時代に、王洙(997-1057)が図書館で、『金匱玉函要略方』3巻を発見しました。上巻は傷寒、中巻は雜病、下巻は処方と婦人の治療が記されていましたが、不備なものでした。そこで、林億らが勅命により、上巻は『傷寒論』が刊行済みであったため削除し、中巻、下巻を再編、欠けている部分を他の医書の引用部などを参考に補足し、新たに誕生したのが『金匱要略』です。

## 丹波康頼撰『醫心方』 984年(1973年覆刻版)

「医心方(30巻)」安政6年版(安政版)の複製  
帙入(2帙) 箱入(大きさ:46cm) 限定版 解説:  
270p, 図版[1]枚 : 27cm

現存する日本最古の医書で、平安時代の医師 丹波康頼(912-995)が、隋唐の『諸病源候論』、『千金方』を中心に百数十種の医書を撰述し、984年(永観2年)に、30巻にまとめたものです。各巻は、総説、鍼灸、内科、外科、薬劑、産科・婦人科、小児科、養生、房内、食養生など、医学全般からなり、病気の診断・治療法から煎じ薬の作り方、鍼灸、養生法、性生活に至るまで詳細に論じられています。

本書は、巻物から和綴じに変えて印刷刊行された安政版(1859年 安政6年)の覆刻版です。

## 『病草紙』 平安時代末期-鎌倉時代初期(1967年複製)

病草紙は、様々な奇病や身体の異常に関する説話風な詞書に、絵が添えられた絵巻物で、作者未詳です。当初の絵の数は不明ですが、現存するのは21図です。

本巻は、「風病の男」、「小舌の男」、「二形」、「眼病の治療」、「齒槽膿漏の男」、「痔瘻の男」、「毛虱」、「霍乱の女」、「口臭の女」の9図からなり、第17回日本医学会総会(名古屋)

1軸 : 27cm 限定1000部  
別冊(16p) : 「国宝病草紙解説」中村溪男、服部敏良著

の記念品として、関戸家を経て京都国立博物館で所蔵している図を限定複製したものです。仏教思想を背景とした六道絵とも考えられています。



1冊  
縦27cm×横19cm

Nagoya University Medical Museum Small Exhibit 10179966  
孫允賢『醫方大成論』 1321年(1651年瀧庄三良開板)

孫允賢は、中国 元の医師です。『医方大成』は、宋、元の医学者が常用した重要な方劑(薬剤)の調合、その方法、調合した薬剤を種類分けして編纂したものです。全体を風、寒、暑、湿、傷寒、瘧(間欠的な悪寒、発熱)、痢などの72門に分けて、門ごとに、その病候について要点を論じ、医方を選び、その出典をすべて注記しています。全体で2000余方を収録していますが、方論は簡潔であり、広く普及し、後に中国 明や日本の医学者により増補版や選録本が刊行されました。

本書は和刻本(外国、特に中国の本を日本で木版本として出版)です。寛永(1624-1645年)以後の和刻本では、返り点、送り仮名を付したものが多く発行されました。



58丁  
縦28cm  
×横20cm

Nagoya University Medical Museum Small Exhibit 11073729  
朱震亨『格致餘論』 1347年(1641年風月宗智刊行)

朱震亨(1281-1358)は、字は彦修、号は丹溪、中国 元の医学者であり、金元医学の四大家の一人です。

格致とは格物致知の略で、事物の道理を追究することです。『格致余論』は、論文41編を収め、「陽は常に余りがあり、陰は常に不足している」という朱震亨の医学理論を重点的に解明し、陰を養うことを重要視し、臨床治療では、滋陰・降火の剤を用いることを主張しました。このため朱氏の学派は、養陰派(滋陰派)と呼ばれました。

本書は和刻本(外国、特に中国の本を日本で木版本として出版)です。寛永(1624-1645年)以後の和刻本では、返り点、送り仮名を付したものが多く発行されました。



33丁  
縦28cm×横17cm

Nagoya University Medical Museum Small Exhibit 11073741  
葛可久撰『十薬神書』 1348年(1690年養志堂)

葛乾孫(1305-1353)は、字は可久、中国 元の医学者で、代々医師の家の出身です。若い頃は好んで武術で治療し、効果を上げたと言われています。癆瘵(肺結核)の治療に豊富な経験があり、『十薬神書』では、肺結核を治療する経験方10種を紹介しています。治療方剤は特殊ですが、正用から逸脱せず、多くは実用的で有効です。

味岡三伯の門下であり、尾張医学館を主宰した浅井家の基礎を築いた浅井周伯(1643-1705)は、『十薬神書』を校訂しています。養志堂は周伯の私塾です。本書は和刻本です。



5冊  
縦14cm×横20cm

Nagoya University Medical Museum Small Exhibit 11073742-46  
中江藤樹『捷徑医筈』 1638年(1655年田中文内梓行)

中江藤樹(1608-1648)は、近江国(滋賀県)出身で、江戸初期の儒学者です。伊予国(愛媛県)大洲藩に仕えましたが、母への孝養のため脱藩して、郷里小川村に帰り、母に仕えつつ学問と教育に励みました。日本における陽明学派の始祖とされ、近江聖人と呼ばれました。

藤樹は儒学、医学を講じて多くの門人を養成しました。

『捷徑医筈』は1655年(明暦元年)に発行された医学入門書で、捷徑は近道、医筈は医学の手引き、案内を意味しています。大洲藩時代の同僚の次男 大野了佐 一人のために、藤樹自ら医学書を読み編集したものです。

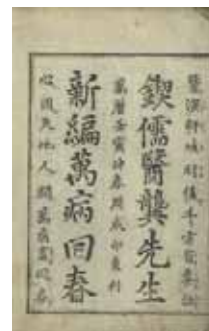


1 v. : ill. :  
縦38cm×横26cm

Nagoya University Medical Museum Small Exhibit 40002637  
ヴェサリウス “De humani corporis fabrica epitome” 1642年

ベルギーの解剖学者アンドレアス・ヴェサリウス(Andreas Vesalius 1514-1564)は、長く権威とされてきたギリシアの医学者ガレノス(Γαληνός 129-199頃)の学説の誤りを指摘し、1543年に『人体の構造についての七つの書』(『ファブリカ』)と、同年、学生のために要約版の『エピトメ』(『梗概』)を出版し、「近代解剖学の父」と呼ばれています。

1642年発行の本書は、『梗概』に、Nicolaus Fontanus(1589-1667)が注釈を加えたもので、正確、精緻な解剖図は、躍動感にあふれています。



8冊：縦27-28cm×横19-20cm

Nagoya University Medical Museum Small Exhibit 11724099-106  
龔廷賢編輯『新編萬病回春』 1666年

龔廷賢(1522-1619 号は雲林)は、江西省金谿の出身です。明末の3代にわたる医家の名門で、最高医療機関 太医院の医官です。

『万病回春』は、内科、婦人科、小児科、外科など各科と、雲林暇筆という医療倫理にわたる総合医学書です。約10,000の処方記が記されていて、江戸時代に多くの人に読まれ版を重ねました。



## フランソワ モリソー “Traité des maladies des femmes grosses” 1712年



[12], 555, [27] p. : ill. : 26 cm. (4to)

フランソワ モリソー (François Mauriceau 1637-1709) は、フランスの宮廷産科医・外科医です。

モリソーは、骨盤位分娩の進歩に貢献し、また、鉗子分娩や麻酔などの産科的処置を容易に行えるように、それまでの分娩椅子に代えて分娩台を使用することを提唱し、分娩体位として仰臥位を導入しました。

本書は、モリソーの主著“Traité des maladies des femmes grosses” (妊婦の病気概論) で、多くの言語に翻訳されました。

かいばらえきけん ようじょうくん

## 貝原篤信 編録『養生訓』4巻 1713年



4冊 : 縦 23cm × 横 16cm

貝原益軒 (1630-1714) は、筑前国 (福岡県) 福岡藩の祐筆 (書記) 貝原寛斎 (1597-1666) の四男として城内で生まれました。名は篤信、号は損軒、晩年に益軒と改めました。

藩命によって京都に遊学し、朱子学や本草学を学び、松永尺五 (1592-1657)、山崎闇斎 (1619-1682)、木下順庵 (1621-1699)、向井元升 (1609-1677) らと交友を深めました。

本書は、和漢の事跡と体験に基づき、心身の健康と長寿を保つため、生活する上で心得ておくべきことを具体的に平易に説いた教訓書です。

## あさぬま さえい ぞう し ず いがくせんすい 浅沼佐盈『蔵志図』(『医学選粹』第5号) 1759年(1975年覆刻版)



1枚 : 縦 29cm × 横 16cm

丹波国 (京都府) 亀山に生まれた官医山脇東洋 (1705-1762) は、後漢の張仲景の『傷寒論』、『金匱要略』などに示された処方を行う古医方派の後藤艮山 (1659-1733) に学びました。

中国の五臓六腑説を疑い、1754年 (宝暦4年) 京都所司代の許可を得て刑死体の解剖を行い、この時の所見と解剖図をまとめたのが『蔵志』です。解剖図は門人の浅沼佐盈が描いた原図をもとに、木版で輪郭を墨刷りし、手彩色されました。図は4葉のみで簡粗なものです。が、わが国最初の人体解剖図であり、実際に観察した実証精神にあふれています。

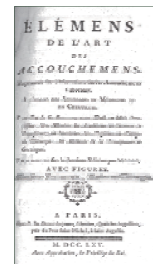
## よしますためのり なかむらてい じ るいじゅうほう 吉益為則撰 中邨貞治校『類聚方』 1763年

7, 5, 2  
8, 114, 2  
丁  
縦 17cm ×  
横 10cm

吉益東洞 (1702-1773) は、名は為則、通称は周助、東洞は号です。『類聚方』は、古方 (古医方) 派である東洞の代表作で、1万部を売り、さらに版を重ね、後世の漢方医学に大きな影響を与えました。

東洞は、張仲景の『傷寒論』、『金匱要略』を重視しましたが、『傷寒論』における急性の熱性疾患を経過や病気の進行で分類する三陰三陽論 (陽病を太陽、少陽、陽明、陰病を太陰、少陰、厥陰に分ける) ではなく、東洞自身が汎用した薬方約200と、経験はしていませんが重要だとする18方を選び出して、処方別に組み替えて『類聚方』を作りました。各条文の後に「為則按 (評語)」として東洞の意見を書いています。

## レーデラー “Éléments de l'art des accouchemens” 1765年



[6], xiv, 371, [7] p. : ill. (13 pl.) : 20 cm. (8vo)

レーデラー (Johann Georg Roederer 1727-1763) は、ドイツのゲッティンゲン大学の産科学教授です。

1751年にゲッティンゲン大学病院で、助産婦の養成を兼ねた医師・学生の教育の場として最初に設立された助産院の初代所長となりました。

本書は、レーデラーの主著“Éléments de l'art des accouchemens” (分娩術原理) です。

## か がわげんえつ しげん しさんろん 賀川玄悦『子玄子産論』 1765年(1859年校正再刻)



2冊 : 縦 26 × 横 18cm

賀川玄悦 (1700-1777) は、近江国 (滋賀県) 彦根の生まれで、字は子玄です。本姓は三浦で、7歳のとき母方の姓を継ぎました。鍼灸術を学び、のち京都に出て、鍼灸、按摩を業とするかたわら古医方を学び、賀川家の養子となり、徳島藩の藩医となりました。

たまたま一婦人の難産を鉄鉤を用いて救ったことから、助産術を独自に考案し、賀川流産科の祖となりました。『産論』は、世界に先がけて胎児の正常胎位を確認した文献として知られ、後にシーボルト (Philipp Franz von Siebold 1796-1866) により広く世界に紹介されました。



5枚：縦39cm×横27cm

## 杉田玄白『解體約圖』 1773年(1965年複製版)

『解体新書』が発行される1774年(安永3年)の前年に、世間の反響を見るため、報帖(広告らし)同様に刊行されました。序説、臓腑、脈絡、骨節、人体生理の要の5枚1組から成ります。

杉田玄白(1733-1817)が本文を書き、中川 淳庵(1739-1786)が校閲し、熊谷元章(儀克)が図を描いています。使用された図は『解体新書』の図とは異なります。

本書は、緒方洪庵(1810-1863)の曾孫 緒方富雄(1901-1989)の解説を添えて刊行された複製版です。

5冊：挿図  
縦27cm×横18cm

## 杉田玄白『解体新書』 1774年

1771年(明和8年)、杉田玄白(1733-1817)、前野 良沢(1723-1803)、中川 淳庵(1739-1786)らは、江戸小塚原(現 東京都荒川区南千住五丁目付近)の刑場で行われた刑死体の腑分けを参観し、この時に持参した解剖書の正確さに感嘆し、翻訳を始めました。玄白と良沢が持参した解剖書は、ドイツ人医師ヨハン・アダム・クルムス(Johann Adam Kulmus 1689-1745)著の医学書“Anatomische Tabellen”『解剖図表』(1722年)のオランダ語訳“Ontleedkundige Tafelen”(1734年アムステルダム刊)の第2版でした。

『解体新書』は、序と解体図1巻、本文4巻からなります。解体図は、秋田藩角館の小田野直武(1749-1780)が描きました。

## 佐々井茂庵著 賀川子玄閣『産家やしなひ草』 1777年



2, 4, 31, 2丁：縦26cm×横18cm

佐々井茂庵(1772-1818? 名は玄敬)は、和泉国(現大阪府)堺の出身で初め足立栄庵に学び、のち賀川玄悦(1700-1777 字は子玄)に産科を学びました。

玄悦は、胎児の正常胎位を世界に先がけて発見したことで知られ、母子ともに安全に救う産科学(賀川流産科)を発展させました。

『産家やしなひ草』は、「産前の心得」8条、「臨産の心得」9条、「産後の心得」18条からなり、産婦・助産婦が心得ておくべき知識を仮名書きで著した啓蒙書です。

## 吉益東洞校閲 六角重任筆記『古方便覧』

## 1782年(1850年嘉永3年三刻再板)

吉益東洞(1702-1773)は、安芸国(広島県)山口町の生れで、名は為則、通称は周助、東洞は号です。

父の医業をつぎ、古方(古医方)派の後藤良山(1659-1733)に学び、37歳で京都に開業し、44歳で山脇東洋(1705-1762)に認められ名声が高まり、古方派を代表する医となりました。

東洞は、張 仲景の『傷寒論』、『金匱要略』以外は、どんな有用な古典もとらない主義で、病気は体内に毒が動いて発病する、従って毒を体外に駆除することで病気は治る、という「万病一毒説」を唱えました。



2冊：縦26cm×横18cm

## 賀川玄迪『産論翼』 1775年

賀川玄迪(1739-1779)は、出羽国(現 秋田県)横堀の医師 岡本玄適の子として生まれました。字は子啓、号は有斎です。

京都の賀川玄悦(1700-1777 字は子玄)に産科を学んで賀川家の養子となり、徳島藩の藩医となりました。玄悦は世界に先がけて胎児の正常胎位を発見したことで知られています。

1775年(安永4年)に、玄悦の『子玄子産論』を増補して『産論翼』を著し、賀川流産科の名を高めました。

## 呉有性著 劉敞校『温疫論』2巻 1788年



2冊：縦26cm×横18cm



呉有性(1582?-1652?)は明の医学者です。1641年に山東、浙江、江蘇、河北に疫病が流行した際、医師の多くは傷寒(腸チフスなど高熱を伴う急性疾患)の治療法で対処しましたが効果がありませんでした。

本書は、温疫の原因、初期段階、諸症への変化、治療法などが詳しく論説されています。呉は、その疫病が温疫(流行性の熱病)であり、異気(雑気、戾気とも言う)が原因で、口や鼻から感染し、傷寒とは初めは異なるが後は同様で、承氣湯類に津液を補う薬物を調合すること、進行程度の診断には舌診が有用であることなどを指摘しました。以後温病派が形成され、傷寒派との論争が始まりました。本書は和刻本(日本で木版本として出版)です。





Nagoya University Medical Museum Small Exhibit 10009792-93  
 ヨハネス・デ・ゴルテル 宇田川玄随 玉函涅斯垓我爾德児著 宇田川玄随譯『西説内科撰要』  
 1793年(1810年大坂書林)

18巻2冊  
 縦26cm×横18cm

宇田川玄随(1755-1797)は、号は槐園、美作国(岡山県)津山藩医です。本書は、オランダの医師ヨハネス・デ・ホルテル(Johannes de Gorter 1689-1762)の内科書“Gezuiverde geneeskunst, of kort onderwys der meeste inwendige ziekten”(1744)を玄随が翻訳したわが国最初の西洋内科翻訳書です。3巻ずつ6回に分けて刊行されましたが、玄随は完結を待たずに亡くなりました。疾病の発生病位により56門に分類しました。序文は漢方の大御所、当時の医官の最高権力者 多紀元簡(1755-1810)が書きました。幕末になると漢方医は蘭学に存在を脅かされ敵対していきいますが、この時はまだ余裕があり西洋医学を受けとめていたようです。



Nagoya University Medical Museum Small Exhibit 11723883-86  
 かたくらげんしゅう 片倉元周 片倉元周『産科發蒙 醫學質驗義集』 1799年



4冊：縦26cm×横19cm

片倉元周(1751-1822)は、相模国(現 神奈川県)出身で、家は代々医家でした。字は深甫、号は鶴陵、静儉堂です。12歳のとき江戸に出て多紀藍深(1732-1801)に医学を学び、のち京都で賀川玄悦(1700-1777)に産科学を学び、江戸で産科を開業しました。隣家の蘭学者 嶺春泰と知り合い、西洋産科説に接するようになり、オランダなどの医学書を研究して『産科發蒙』を著わし、西洋産科術を紹介しました。



1冊(頁付なし)  
 縦23cm×横16cm

Nagoya University Medical Museum Small Exhibit 10009789  
 よしまたすなんがい 吉益南涯 吉益南涯『傷寒論』 1800年代

吉益南涯(1750-1813)は、吉益東洞(1702-1773)の次男で、名は猷、字は修夫、号は初めは謙斎、後に南涯と改めました。京都で父の医業を継ぎ、45歳で『医範』を著して、東洞の「万病一毒説」を発展させた「気血水説」を唱え、張仲景の『傷寒論』を解釈しました。「気血水説」は、人体には気(体内の見えない活力)、血、水(血液以外の体液)の三つの要素があり、そのバランスが崩れ、毒が加わると初めて証(症状)が現れるという説で、漢方の代表的な病理思想として伝えられています。世界で初めて全身麻酔を用いた手術(乳癌手術)を成功させた華岡青洲(1760-1835)は、南涯の弟子の一人です。



[72] 丁  
 縦24cm×横16cm

Nagoya University Medical Museum Small Exhibit 11587401  
 はなおかせいしゅう 華岡青洲『春林軒禁方録拔萃』 1800年代前半

華岡青洲(1760-1835)は、紀伊国 那賀郡名手荘(現 和歌山県紀の川市)に村医 華岡直道の長男として生まれました。春林軒は、青洲の住居兼病院・医学校です。吉益南涯(1750-1813)に古医方を、大和見立(1749-1827)にオランダのカスパル流外科を学びました。また、麻酔薬の研究をし、諸方の薬方を集め『禁方録』などにまとめました。

青洲の開発した麻酔薬「通仙散」は、曼陀羅華(朝鮮朝顔)を主剤とするもので、ヨーロッパの薬方に採用されていることを知り、中国医書を参考に改良を加えたものです。1804年(文化元年)、世界で初めて、全身麻酔により、乳癌摘出手術に成功しました。



[2], 42丁：縦15cm×横19cm

Nagoya University Medical Museum Small Exhibit 11723908  
 はなおかせいしゅう 華岡青洲 口授『産科瑣言』 1800年代前半

華岡青洲(1760-1835)は、吉益南涯(1750-1813)に古医方を、大和見立(1749-1827)にオランダのカスパル流外科を学びました。青洲は、古医方派の実証主義をとり、「内外合一、活動究理」として、内科・外科を統一し、生き物の法則性を明らかにすることを信条として、積極的な診療技法を展開しました。

徹底した臨床家であり、著書として印刷出版されたものは無く、青洲の著として伝わる書の内容は多岐にわたりますが、すべて門人達の筆録によるものです。



4冊：縦23cm×横16cm

Nagoya University Medical Museum Small Exhibit 11073772-75  
 いなば かつぶんれい 稲葉克文礼『腹證奇覽』 1801-1809年

稲葉文礼(? -1805 ?)は、名は克、通称は意仲、号は湖南です。諸国を漫遊し、後漢の張仲景の『傷寒論』、『金匱要略』などに示された処方を行う古医方派を研究した、腹診の名人である鶴泰米に学びました。腹診は腹部の症状で処方を定める診断法で、腹証とは、腹診によって得られる証、手で触れることによって得られる情報のことです。本書は、門人に口述筆記させた、傷寒論系の腹診書の代表的な著作であり、病状による様々な表情と、体位を示した挿絵により、腹診の方法がよくわかります。

# トーマス デンマン “Aphorisms on the application and use of the forceps and vectis” 1803年

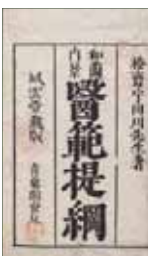


トーマス デンマン(Thomas Denman 1733-1815)は、英国ダービーシャー州ベイクウェル出身の医師です。海軍医療の経験の後に、助産で利益を得ました。横位妊娠における胎児の自然整位であるデンマン自回娩出(Denman's spontaneous evolution)の現象は、彼にちなんで名付けられています。

当館の所蔵本“Aphorisms on the application and use of the forceps and vectis”(鉗子と娩出挺の使用)は、北ニュージャージー医学アカデミーの創設者のひとりWilliam S. Disbrow (1861-1922)の蔵書だったものです。

[4]. 108. [4] p. : 18 cm. (12mo.)

# 宇田川榛齋 譯述 諏訪俊 筆記『西説醫範提綱釋義』3巻 1805年(1845年再刻)



榛齋は、宇田川玄真(1770-1835)の号です。伊勢国(三重県)安岡家に生まれ、杉田玄白(1733-1817)、大槻玄沢(1757-1827)らに学び、宇田川玄随(1756-1798)が亡くなると宇田川家を継いで、美作国(現 岡山県)津山藩医となりました。

本書は、榛齋の講義を門人の諏訪俊(藤井方亭)の別号 1778-1845)が筆記したもので、西洋解剖学の概要や病理学など平易な内容であり、榛齋が開いた私塾 風雲堂や蘭学塾で教科書として利用され、江戸時代で最も普及した解剖書となりました。見返しの書名は、『和蘭内景醫範提綱』です。

3 冊 : 縦 26cm × 横 18cm

# 宇田川榛齋『西説醫範提綱内象銅版圖』 1808年

宇田川榛齋(1769-1834)は、伊勢飯南郡の安岡四郎衛門の子で、名は璘、字は玄真、号を榛齋と言い、宇田川玄随(1756-1798)の嗣子です。

初め漢方医学を学び、江戸で玄随に漢学を学んだ後、蘭方医学を志し、大槻玄沢(1757-1827)などに蘭学を学びました。



1 帖 : 32cm

『西説醫範提綱釋義』の附図であるこの52の解剖図は、ブランカールト(Steven Blankaart 1650-1702)の『新改訂解剖学』などオランダの解剖書を模写したもので、わが国最初の銅版画による解剖図です。榛齋は、腺、腭などの用語を初めて用いました。

# 不冷吉著 不路乙斯譯 杉田立卿重譯『眼科新書』 1815-1816年



6 冊 : 縦 26cm × 横 18cm

杉田立卿(1786-1845)は、杉田玄白(1733-1817)の末子で、江戸に生まれました。名は予、号は錦陽で、立卿は字です。

本書は、オーストリアのプレック(Joseph Jacob Ritter von Plenck 1738-1807)の眼科書“Doctrina de morbis oculorum”(眼科疾患教科書 1777)のプロイス(Martin Pruyss)によるオランダ語訳(1787)をさ

らに翻訳したものです。初め宇田川玄真(1770-1835)が翻訳して『泰西眼科全書』(1799)と題しましたが未刊に終わり、立卿が改訳し、『和蘭眼科新書』(1815)として刊行後、薬法製煉剤部を附録として、『眼科新書』と書名を改めて刊行しました。眼球解剖図は、杉田玄白の肖像画で知られる石川大浪(1762-1817)が描きました。

# 水原濟卿『産科探領圖訣』 1836年



水原濟卿(1782-1864)は、近江(滋賀県)出身。本姓は最上、名は義博、字は濟卿、号は三折です。

京都に出て、宇津木昆台に内科、奥劣斎に産科、稲村三伯に蘭学を学びました。難産でも母子ともに救える鉗子(探領器)を発明しました。

31. 4. 2 丁 : 縦 26cm × 横 19cm

# 本間玄調『瘍科秘録』 1847年

本間玄調(1804-1872)は、常陸(茨城県)出身、家は代々医家で8代目です。通称は資章、字は和卿、号は棗軒、そして多くの人命救助により水戸藩第9代藩主徳川斉昭(1800-1860)から救という名を賜りました。

17歳のとき原南陽に漢方を、その後、華岡青洲(1760-1835)、シーボルト(Philipp Franz von Siebold 1796-1866)などに西洋医学を学び、江戸で開業。のち水戸藩主の侍医、藩校医学館教授となりました。華岡流外科を継承、発展させ、麻沸湯(全身麻酔薬)による外科手術を行いました。



12 冊 : 挿図 : 縦 25.7cm × 横 16.6cm





かたくらげんしゅう た きさいてい ほえいすち  
片倉元周 著 多紀藍庭閑『保嬰須知』 1848年

片倉元周(1751-1822)は、相模国(神奈川県)に生まれました。字は深甫、通称は元周、号は鶴陵です。祖父も父 周意も医師です。12歳のとき江戸で、多紀藍庭(1732-1801)から漢方を学び、京都で賀川玄迪(1739-1779)から賀川流産科を修めました。名医の評判高く、50歳のとき、町医の身分で、江戸城大奥の難産に呼ばれ治療しました。

多紀藍庭(1795-1857)は、奥医師で、名は元堅、藍庭は号です。『保嬰須知』は、小児科専門書で、断臍、初生治要から痘瘡奇案まで、須く知るべきことが書かれています。

2冊  
縦26cm×横18cm



お がたこうあん びょうがくつうろん  
緒方洪菴譯『病學通論』3巻 1849年(1857年)

緒方洪庵(1810-1863)は、備中国(現 岡山県)足守藩士佐伯瀬左衛門の三男として生まれました。号は適々斎または華陰、洪庵は通称です。16歳で大坂の蘭方医 中天游(1783-1835)に学び、後に江戸の坪井信道(1795-1848)、宇田川榛斎(1769-1834)らの指導を受けました。

『病學通論』は、日本語で書かれた最初の病理学書です。宇田川榛斎の遺志を継いで、原書を調べ、さらに舍密術(化学)・窮理学(物理学)・内科外科の書物を参照しながら榛斎の遺稿を補充校正しました。当初12巻の予定でしたが、生機論、疾病総論第一、第二の3巻だけが刊行されました。

[5], 4, 2, 23,  
38, 18丁  
縦26cm×横18cm



お がたこうあん ふ し けいけん いくん やくほう ふろく  
緒方洪菴譯『扶氏經驗遺訓』25巻 薬方2巻 附録3巻 1857年

イエナ大学教授、後にベルリン大学医学部長 フーフェラント(Christoph Wilhelm Hufeland 1762-1836)の内科書“Enchiridion medicum oder Anleitung zur medicinischen Praxis”(医学必携)第2版(1836年)の、ハーヘマン(H. H. Hageman Jr, 1813-1850)によるオランダ語訳(1838年)に感銘を受けた緒方洪庵(1810-1863)は、1842年(天保13年)ごろには義弟緒方郁蔵(1814-1871)らとともにこれを翻訳し、『扶氏經驗遺訓』と題していました。

しかし、蘭学への規制が強まるなかで、推敲を重ね出版の機会をうかがい、ついに1857年(安政4年)に出版を始め1861年(文久元年)に完了しました。

30巻(28冊)  
縦26cm  
×横19cm



ひゆへらんど あお きこうさい せつびょうき かん えんせいめい いひゆへらんど  
扶歌蘭度 著 青木浩齋重譯『察病龜鑑：遠西名醫扶歌蘭度』 1857年

イエナ大学教授、後にベルリン大学医学部長 フーフェラント(Christoph Wilhelm Hufeland 1762-1836)の内科書“Enchiridion medicum oder Anleitung zur medicinischen Praxis”(医学必携)第2版(1836年)の、ハーヘマン(H. H. Hageman Jr, 1813-1850)によるオランダ語訳(1838年)は、杉田成卿(1817-1859)、青木浩斎(1814-1883)、緒方洪庵(1810-1863)、山本致美らによって、それぞれ『医戒』、『察病龜鑑』、『扶氏經驗遺訓』、『扶氏診断』と題されて、抄訳されました。

青木浩斎は、伯耆国(鳥取県)生れの蘭学者であり、後に丹後(京都府)久美浜県知事などを務めた伊王野坦が一時期名乗っていた名前です。箕作阮甫(1799-1863)、緒方洪庵らに学びました。龜鑑とは手本という意味です。

2, 3, 20, 39, [1],  
28丁  
縦26cm×横18cm



お がたこうあん ふ し いかいのりやく  
緒方洪菴『扶氏醫戒之畧』 1857年(1974年複製)

イエナ大学教授、後にベルリン大学医学部長 フーフェラント(Christoph Wilhelm Hufeland 1762-1836)の内科書“Enchiridion medicum oder Anleitung zur medicinischen Praxis”(医学必携)第2版(1836年)のオランダ語版を、緒方洪庵(1810-1863)らが翻訳した『扶氏經驗遺訓』の巻末には、医者に対する戒めがかなり長く記述されています。

蘭学者・医者として知られる洪庵は、これを12条に要約し、『扶氏医戒之略』として、自らと適塾の門人たちへの戒めとしました。適々斎塾(略して適塾)は、洪庵が1838年(天保9年)に、大坂・瓦町に開いた蘭学の私塾で、門下生は、福澤諭吉、橋本左内、大村益次郎など、1,000名を超えると推定されています。

1枚  
縦76cm  
×横46cm



お がたこうあん ころりちじゆん  
緒方洪菴譯述『虎狼痢治準』 1858年(1978年複製)

緒方洪庵(1810-1863)は、備中(岡山県)に生まれ、江戸、長崎で医学を学びました。大坂に蘭学の私塾 適々斎塾(適塾)を開き、大村益次郎(1824-1869)や福沢諭吉(1835-1901)など、多くの人材を輩出しました。

1858年(安政5年)に、長崎で発生、以後、大坂などでコレラが大流行しました。「コロリ」と死んでしまうことから「虎狼痢」、「虎狼狸」などと呼ばれていました。『虎狼痢治準』は、有効な治療法がわからない医者のために、キニーネや阿片などを用いた治療手引書として急遽出版されました。

27丁：26cm

## 合信著 管茂材撰『西醫略論』 1858年



1冊  
縦 26cm  
× 横 18cm

英国の医師(Benjamin Hobson 中国名は合信 1816-1873)が上海で刊行した中国語の本を三宅良斎(1817-1868)が翻刻したもので、外科知識の普及に貢献しました。

良斎は、肥前国(佐賀県)生れで、子厚と称しました。18歳で長崎へ行き、蘭方医植林栄建(1800-1875)らに医学を学び、1841年江戸に開業しました。その後、下総国(千葉県)佐倉藩の堀田家奥医師、土佐藩(高知県)の江戸藩邸での睾丸摘出手術、幕府種痘館頭取として在任不幕命でフランス軍艦医官からコレラ療法を修得するなど、江戸末期の新医療普及に努力しました。

## 普林篤：松山棟菴譯『室扶斯新論』 1868年



2冊：  
縦 23cm × 横 16cm

フリント(Austin Flint 1812-1886)は、米国マサチューセッツで生まれ、ハーバード大学医学部を卒業しました。腸チフスと発疹チフスとは異なる病気であることを研究しました。また、オースチンフリント雑音(大動脈弁閉鎖不全で心尖部に聴取される拡張期雑音)で知られています。

松山棟菴(1839-1919)は、紀伊国那賀郡(現 和歌山県紀の川市)に、医師 松山庄太郎の四男として生まれました。蘭学を修めたのち慶應義塾へ入学し、英学を修めました。1871年(明治4年)大学東校(東京大学医学部の前身)の助教に就任し、後に大教授となりました。本書の他、英語医学書の翻訳出版を行いました。

## 司馬凌海『七新薬』 1862年



3冊：  
縦 23cm ×  
横 16cm

佐渡に生まれた司馬凌海(1839-1879)は、18歳で松本良順(1832-1907)の弟子として、長崎でオランダ海軍軍医ポンペ(Pompe van Meerdervoort 1829-1908)から医学を学びました。1876(明治9)年5月、外国人教師ローレツ(Albrecht von Roretz 1846-1884)とともに、副教師通弁兼医校教師として愛知県公立病院に赴任しました。凌海は英語、ドイツ語など6か国語に通じる天才でした。

日本最初の西欧式薬物治療の書とされる『七新薬』は、ポンペの講義をもとに、ポンペの書斎にあった諸外国の医学書から7種類の薬物を選んでその薬理作用について述べたものです。『七新薬』とは、解血変質の薬として沃顔(コード)、硝酸銀、酒石酸、補血強神解熱薬の規尼(キニーネ)、駆虫滌腸薬の珊多尼(サントニン)、峻烈麻神鎮痙薬の莫非(モルヒネ)、緩和滋養疎解薬の肝油です。

## 横井信之抄譯『撒善篤繃帶式』 1872年



2冊：23cm

横井信之(1846-1891)は、1879年(明治12年)～1880年に愛知県公立病院院長・公立医学校校長を務めました。また、1879年、現在の名古屋市西区槌の口町に私塾「好生舎」を創立し、さらに、病院「好生館」を開業しました。

本書は、大阪府病院教授局(大阪大学の前身)の文部大助教であった1872年に、サージェント(Fitzwilliam W Sargent 1820-1889)の“On bandaging, and other operations of minor surgery”(1869)を抄訳したものです。

## 中川淡齋編輯『眼科要略』 1863年



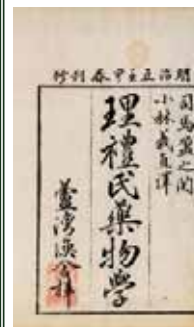
1冊  
縦 19cm × 横 13cm

中川淡齋(1838-1866)は、播磨国(現 兵庫県)出身で、諱は哲、字は明甫、淡齋は号です。15歳で備前の閑谷学校に学んだ後、緒方洪庵(1810-1863)に師事しました。

郷里で医者となりますが、西洋医術は未だ広まらず、貧弱だった眼科を詳しく研究し、本書を著しました。1865年(慶応元年)オランダ軍医ボードウイン(Anthonius Franciscus Bauduin 1822-1885)を長崎まで訪ねて学び、さらに翌年、オランダ人化学者で陸軍軍医のハラタマ(Koenraad

Wolter Gratama, 1831-1888)の講義を聞きに精得館(長崎養生所の後身、長崎大学医学部の前身)へ赴こうとして病に倒れました。

## 小林義直譯 司馬凌海開『理禮氏藥物學』 1872年



15冊：23cm

小林義直(1844-1905)は、備後国(現 広島県)福山藩士で、藩の儒官 江木鰐水(1810-1881 通称は繁太郎)に儒学を、寺地舟里(1809-1875)に蘭学を学びました。1872年(明治5年)、大学東校(東京大学医学部の前身)大助教となりました。

司馬凌海(1839-1879)は、語学の天才で独・英・蘭・仏・露・中の6か国語に通じていました。医学用語の日本語訳(蛋白質、室素、十二指腸など)を多く作っています。

原著は、John Campbell Riley(1828-1879)の“Compend of Materia Medica and Therapeutics”(Philadelphia, 1869)です。



# Christian Ostermann “Lateinisches Uebungsbuch im Anschluß an ein grammatikalisch geordnetes Vokabularium” 1872年



108p : 縦 22cm×横 14cm

司馬凌海(1839-1879)は、新潟県佐渡島の生まれです。幼名は島倉伊之助、諱は盈之、凌海は通称です。語学の天才で独・英・蘭・仏・露・中の6か国語に通じていました。このラテン語文法練習帳の標題紙の裏には、「明治9年(1876年)6月15日司馬盈之より買求之」と書かれていますので、凌海はこの本でラテン語を習得したと考えられます。書き込みが無く、きれいな状態です。

# 春風社『和譯獨逸辭典』 1872年



1046, 10, 8p : 縦 18cm×横 14cm

司馬凌海(1839-1879)は、1857年(安政4年)、松本良順(1832-1907)と長崎へ行き、オランダ軍医ポンペ(Johannes Lijdius Catharinus Pompe van Meerdervoort 1829-1908)に医学を学び、後に江戸で、私塾「春風社」を開きました。凌海は語学の天才で、独・英・蘭・仏・露・中の6か国語に通じていました。

本書は、Williamの“Handwörterbuch der deutschen Sprache für Japaner”の、司馬凌海(春風社当主)等による翻訳です。

# 丹涅爾原撰：司馬盈之、坪井為春譯『醫療大成 藥劑編』 1873年



7, 271p : 20cm

Thomas Hawkes Tanner(1824-1871)は、キングズ・カレッジ・ロンドンと、セント・アンドルーズ大学で学んだ英国の医師、医療ライターです。

本書は、1867年に英国で公表された規則と製法に従って、滋養法、変質解疑剤、制酸剤、防腐剤など、20条に類別して記載されています。

司馬盈之(凌海 1839-1879)は、語学の天才で独・英・蘭・仏・露・中の6か国語に通じていました。長崎でオランダ軍医ポンペ(Pompe van Meerdervoort 1829-1908)に医学を学び、1876年(明治9年)5月、ローレツ(Albrecht von Roretz 1846-1884)とともに、副教師通弁兼医校教師として愛知県公立病院・公立医学講習場に赴任し、翌1877年4月まで在職しました。坪井為春(1824-1886)は、1862年(文久2年)に西洋医学所教授となりました。

# 有独著：横井信之譯『七葉新書』 1873年



2冊 : 22cm

George Bacon Wood(1797-1879)は、ペンシルベニア大学と、同大学医学校で学んだ米国の医師です。

横井信之(1847-1891)は、三河国碧海郡福釜(現 安城市福釜町)の生れです。佐藤尚中(1827- 1882)と松本良順(1832-1907)に蘭方医学を学び、1872年(明治5年)陸軍一等軍医として、大阪鎮台病院長となりました。名古屋鎮台病院長に転じた後、1879年3月から1880年5月まで、愛知県公立病院長、公立医学校長を兼務しました。1891年5月、金沢に出張中、突如脳溢血を発症し、同月22日に、名古屋市西区樋の口町の自宅で逝去しました。

# 『養生新法』(『愛知週報』第22号附録) 1873年



6, [1]丁 : 23cm

1872年(明治5年)8月に学制が公布されて、近代的学校制度が定められました。全国を8大学区、1大学区を32中学区、1中学区を210小学区に区分するという学校組織が計画されました。

学制の第27章では、尋常小学の教科内容が示され、下等小学(6~9歳)には、習字、会話、修身、算術等とともに、養生法講義が定められました。

文部省は、東京開成学校(東京大学の前身)において、生徒の飲食、食事後の勉強・運動、勉強時の姿勢、目の保護のための光線注意、身体の清潔、運動、衣類と健康など、養生法に基づく指導がなされたという実践報告を『文部省雑誌』(明治6年3月)に掲載し、啓蒙活動を展開しました。

# 伊藤圭介『日本植物圖説 草部イ：初編』 1874年



1冊 : 縦 27cm×横 18cm

伊藤圭介(1803-1901)は、尾張国豊服町(現 名古屋市中区丸の内三丁目)の医家に生まれ、本草学者の水谷豊文(1779—1833)に博物学を学び、長崎でシーボルト(Philipp Franz von Siebold 1796-1866)にも師事しました。伊藤は、石井隆庵(1811-1884)、中島三伯(1824-1874)と連署して、洋医学校を名古屋にも設立すべきことを名古屋藩に建議し、1871年(明治4年)、名古屋大学の前身となる仮病院、仮医学校が開設されました。

本書は、いろは順に編集した植物図説で、イハハゼ(イワハゼ)から、イブキジャコウサウ(伊吹麝香草)まで、各丁に図と和名、学名、産地、説明などが記載されています。続編は発行されていません。

Nagoya University Medical Museum Small Exhibit 11836852-53

げんせいようろん  
**ヨングハンス『原生要論』 1876年**

名古屋大学の最初のお雇い外国人はヨングハンス(T. H. Junghans 日本語表記は雍翰斯)です。1873年(明治6年)5月に愛知郡名古屋七小区門前町(現 名古屋市中区門前町)の西本願寺別院に再興された仮病院は、ヨングハンス(佐賀県好生館病院を退職後、横浜にいたドイツ系アメリカ人)を3年契約で教師に迎えました。

2冊(各120p) : 19cm

ヨングハンスは、病院での診察や、解剖所での処刑人の死体解剖を病院医員、開業医に見学させました。1874年11月、仮病院内に設けられた医学講習場で講義した原生学は、後に『原生要論』として出版されました。内容は英米独等の生理学のダイジェスト版ですが、名古屋大学における最初の学術書となりました。

Nagoya University Medical Museum Small Exhibit 11908072

まつもといちざえもん いりようきかいずふ  
**松本市左衛門編『醫療器械圖譜』 1878年**

1869年(明治2年)に、新政府から先進的な医学校の創設のため、医学校取調御用掛に任命された佐賀の蘭方医 相良知安(1836-1906)は、ドイツ医学の採用に努め、その後、ドイツ製品を中心に新しい医療器械が医療の現場に次々と現れました。

海外の製造者から医療器械を輸入する業者の中では、東京の 鶴屋松本市左衛門、石代十兵衛、大阪の白井松之助、名古屋の 八神幸助などが草分けでした。『醫療器械図譜』は、販売促進の資料として刊行されましたが、地方の医師たちの教材としても利用されました。

129p : 縦 25cm × 横 17cm

Nagoya University Medical Museum Small Exhibit 11837718

たなかまざのり ほうしゅう おわりふうとか  
**田中正幅編：芳洲画『尾張風土歌』 1876年**

田中正幅(1842-1908)は、愛知県西加茂郡(現 豊田市の一部と、みよし市)の初代郡長でした。『明治初年愛知県公立病院外科手術の図』(1880年)を描いた柴田芳洲(1840-1890)が色刷りの挿絵を描いています。

本書は、尾張の歴史、地理、産業などを紹介したもので、『啓蒙尾参風土歌』の乾(上巻)として発行されました。坤(下巻)は、『参河(三河)風土歌』です。

42丁 : 縦 22cm × 横 16cm

Nagoya University Medical Museum Small Exhibit 11442216

いけ だけんさい ふじ たつごあら しきゅうびょうろん  
**池田謙斎著 藤田嗣章譯『子宮病論』 1878年**

池田謙斎(1841-1918)は、ベルリン大学医学部に学び、帰国後、陸軍軍医監(少将相当)などを務め、東京帝国大学医学部初代総理(現在の東京大学総長に相当)となりました。

藤田嗣章(1854-1941)は、大学東校(東京大学医学部の前身)で学び、陸軍軍医補、台湾陸軍軍医部長、朝鮮総督府医局長などを経て、1912年(大正元年)軍医總監(中将相当)となりました。画家 藤田嗣治(1886-1968)の父です。

本書は、『医事新聞』第4号(明治11年8月29日)からの抜書です。

1冊 : 縦 12x 横 17cm

Nagoya University Medical Museum Small Exhibit 10684843 ほか

あいちこうりついがっこう い じしんぼう  
**愛知公立医学校『醫事新報』 1878年**

『医事新報』は公立医学校が発行した、名古屋大学における最初の学術雑誌です。1878年(明治11年)7月に創刊し、1880年4月に任期の満ちたローレツ(Albrecht von Roretz 1846-1884)が離任した後も、54号(1882年3月)まで発行されました。本誌には、ローレツの臨床講義と治験、欧米の医学書や新聞記事などの抄録、各地の流行病、風土病の報告などが掲載されました。

11号からは、後に単行本としてまとめられるローレツの『断訟医学』が連載され、『断訟医学』の完結により『医事新報』も休刊となりました。

縦 19cm × 横 13cm

Nagoya University Medical Museum Small Exhibit 11936294


ろうれつ しこうぎ ひ ふびょうろんいっばん  
**老烈氏講義『皮膚病論一斑』 1880年**

ローレツ(老烈 Albrecht von Roretz 1846-1884)による短期集中講義で、クンツェ(Karl Ferdinand Kunze 1826-1889)の『実地内科綱要』第6版に依拠していますが、中でもヘーブラ(Ferdinand Ritter von Hebra 1816-1880)の皮膚科学の一端が初めてわが国に紹介されたことが注目されます。

口訳は、1878年(明治11年)1月、司馬凌海(1839-1879)の後任として訳官兼教諭となった栃木県出身の田野俊良、筆記は愛知県出身で、1873年4月病院開設に伴い病院開業係となった石井榮三です。

2, 2, 3, 54, 3丁 : 縦 19cm × 横 13cm





Nagoya University Medical Museum Small Exhibit


11891788

『愛知縣公立病院 及 醫學校第一報告』 1880年

愛知県公立病院長 医学校長心得 後藤新平(1857-1929)から、愛知県令(県知事) 國貞康平(1841-1885)に宛てた序によると、「凡ソ一官衛或ハ一社会アレハ則チ其計畫正鵠及ヒ成廢得失ヲ摘彙シ既成ノ事蹟ヲ不朽ニ伝ヘ且ツ其未成ノ方策ヲ掲載メ以テ内外人ニ示シ而メ将来ノ鍼路ヲ定メ毎年度ノ進歩ト事蹟トヲ比較スルハ是レ事務上実ニ欠クヘカラサル者」として年報を発行することが述べられています。

内容は、病院と医学校の沿革略誌、院校現在職員表、医学校学科表、同教員分担学科表、同生徒員数表、同明治13年夏期生徒試験成績表、病院及医学校経費通算表、病院患者病症人員表、院校解剖表、医学校現在書籍表、病院及医学校建言書、院校将来須要の諸件など19款です。

10, 2, 152, 5p : 縦20cm×横14cm



Nagoya University Medical Museum Small Exhibit


11830230

『愛衆社型典彙編』 1880年

後藤新平(1857-1929)は、ローレツ(Albrecht von Roretz 1846-1884)から衛生行政思想と、実験的実証科学的発想法の影響を受けました。1879年(明治12年)、後藤は、公立医学校の二等訓導石川詢(1858-1933)、一等訓導兼編輯係 瀧浪圖南(1852?-1902)と、県下の医師を組織して私立衛生会「愛衆社」を設立しました。

1880年3月付けの愛衆社長・後藤新平による序文には、「嚮ニ汎布セル設社ノ告示及主旨ト第壹回私立衛生會ニ於テ協議セル諸規則ヲ集成シテ愛衆社型典彙編ト名ツケ…」とあります。

33p : 縦20cm×横14cm



Nagoya University Medical Museum Small Exhibit


11904608

松本順口授：三宅康昌筆記『民間諸病療治法』 1880年

松本順(1832-1907)は、下総国(現 千葉県)佐倉藩医の佐藤泰然(1804-1872)の次男として生まれ、幼名は順之助、奥医師 松本良甫(1806-1877)の養子となり、良順、後に順と改めました。1857年(安政4年)に、司馬凌海(1839-1879)を従えて、幕命で長崎に行き、ポンペに学び、医学伝習生の責任者として長崎養生所、江戸の医学所の運営に尽力しました。

本書は、松本順が口述した風邪、腹痛、疝痛、溜飲、霍乱などの治療法と、三大家先生御方劑効能として、佐藤尚中(1827-1882)、松本順、林紀(1844-1882)による薬の効能、用法を三宅康昌がまとめたものです。

3, 76p : 肖像 : 19cm



Nagoya University Medical Museum Small Exhibit


11908073

老烈講述：朝山義六口譯『微毒學』 1881年頃

ローレツ(Albrecht von Roretz 1846-1884)は、ウィーン大学医学部に学び、内科学と外科学の学位を取得しました。博物学の研究調査を目的として、公使館付き医官として1874年(明治7年)11月に来日しました。ヨングハンス(T. H. Junghans)の後任として、愛知県からの招聘を受けて、1876年5月、訳官の司馬凌海(1839-1879)を伴って、愛知県公立病院及び公立医学講習場へ着任し、1880年4月まで勤めました。

ローレツは石川県立金沢医学校を経て、1880年9月に山形県の済生館医学寮教頭として招かれました。本書は済生館教頭時代の講義を、館医兼教授の朝山義六(1851-1924)が訳したものです。朝山は、1876年に愛知県公立医学講習場係となり、1877年4月以降、司馬凌海の後任の訳官代理を務め、ローレツが山形に着任後、通弁として呼び寄せられました。

83丁 : 縦18cm×横13cm



Nagoya University Medical Museum Small Exhibit


10003424

エスマルク著：片山國嘉譯：石黒忠恵補訂『軍陣外科手術』 1881年

エスマルク(エスマルヒ Johan Friedrich August von Esmarch 1823-1908)は、ドイツのキール大学教授、外科部長で、ドイツ陸軍軍医監です。エスマルヒ バンデーという駆血帯や、エスマルヒ開口器に名前が残っています。片山国嘉(1855-1931)は、遠江国周智郡(現 静岡県浜松市)の出身で、1879年(明治12年)東京大学医学部を卒業、ドイツ留学後、1888年帝国大学医科大学教授となり、裁判医学講座(後に法医学講座)を開講し、法医学という言葉を初めて使いました。

軍陣外科手術とは、軍隊を対象とした外科手術で、本書は、繃帯篇と手術篇(格魯魯保兒母麻醉法、止血法、刺絡、輸血、四肢の切離、関節の切除など)の2篇から構成されています。

418p 図版 : 縦25cm×横17cm



Nagoya University Medical Museum Small Exhibit

11902304

板垣退助『岐阜凶報板垣君遭難顛末』 1882年

板垣退助(1837-1919)は、1882年(明治15年)4月、自由党総理として岐阜で遊説中に暴漢に襲われ負傷しました。この時、リスター氏消毒を施し傷を治療したのが後藤新平(1857-1929)で、当時 愛知医学校長・愛知病院長でした。

「名古屋鎮台病院院長横井信之(1847-1891)氏へ往診のことを依頼せしに何分公務の身なれば即座に派出し難き... 故に公立病院長(正しくは、愛知病院長)後藤新平氏は外科の名手なればとて更に同氏へ往診の義を依頼せしに... 後藤氏は車(人力車)を馳せて岐阜に赴かれたり... 疵は肺に及ばず此上胸膜炎を發せざれば大丈夫なり最早24時間を経れども其微なければ氣遣いなしとの診断なり」(本書より)

43p, 図版1枚 : 縦19cm×横13cm



3冊：縦20cm×横14cm

Nagoya University Medical Museum Small Exhibit

10009785-87

奈良坂源一郎『解剖大全』 1883年

奈良坂源一郎(1854-1934)は、陸奥国桃生郡鷹来村大字矢本(現宮城県東松島市矢本)の生まれです。1881年(明治14年)、東京大学医学部を卒業し、同年10月19日に愛知医学校一等教諭となりました。

弱冠30歳で大著『解剖大全』を著し、以後『簡明組織學』(1888)、『解剖簡明』(1894)、『簡明胎生學』(1895)、『局處解剖學講本』(1902)、『局處解剖學圖譜』(1903)、『新撰中庸組織學』(1903)を出版し、いずれも版を重ねました。これらの著作は泰西諸家の説に基づき、自らの経験を加えたものです。



7p：縦19cm×横13cm

Nagoya University Medical Museum Small Exhibit

11830231

『愛衆社規則』 1886年

後藤新平(1857-1929)は、ローレツ(Albrecht von Roretz 1846-1884)から衛生行政思想と、実験的実証科学的発想法の影響を受けました。1879年(明治12年)、後藤は、公立医学校の二等訓導石川詢(1858-1933)、一等訓導兼編輯係 瀧浪圖南(1852?-1902)と、県下の医師を組織して私立衛生会「愛衆社」を設立しました。1886年9月30日付の規則改正と役員改選結果の通知が付いています。

1883年に大日本私立衛生会が創設された折に、愛衆社は愛知県支部となり、その事務を担当することになりました。



497p：縦21cm×横15cm

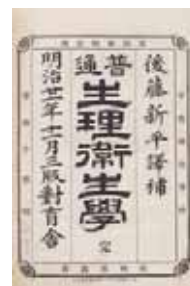
Nagoya University Medical Museum Small Exhibit

10009290

老烈氏講述 田野俊貞口譯 石井榮三筆記『斷訟醫學』 1886年

ローレツ(Albrecht von Roretz 1846-1884, 日本語表記は老烈)は、1874(明治7)年に来日し、オーストリア公使館附属医員という身分を得て、博物学の調査のため西日本各地を訪れました。横浜居留地に戻ったローレツは医院を開業後、ヨングハンス(T. H. Junghans)の後任としていた愛知県に招かれ、1876年5月、西本願寺別院にあった愛知県公立病院及び公立医学講習場の教師となります。

ローレツが1879年の冬学期から翌年3月まで110回ほど行った法医学の講義は、『医事新報』の第11号から連載され、1886年(明治19年)に一冊の本としてまとめられたのが本書です。



上巻(187p)、中巻(179p)、  
下巻(264p)  
(上・中・下合本)：  
挿図：19cm

Nagoya University Medical Museum Small Exhibit

11904609

勃古著：後藤新平譯『普通生理衛生学』 1888年

Carl Ernst Bock(1809-1874)は、ライプツィヒ大学で学んだドイツの医師、解剖学者です。本書は、人体の構造、生活及び保護を論じて、病者に対する処置即看護法、予防法の心得を述べたものです。

後藤新平(1857. 6-1929)は、福島県須賀川の医学所を卒業後、1876年(明治9年)8月、愛知県公立病院の三等医となり、司馬凌海(1839-1879)の家塾に寄寓し、ローレツ(Albrecht von Roretz 1846-1884)の指導を受けました。1881年10月、24歳で愛知病院長兼医学校長となり、1883年、内務省衛生局に入り、1892年に衛生局長となり、公衆衛生行政の基礎を築きました。



3, 208p：  
縦21cm  
×横15cm

Nagoya University Medical Museum Small Exhibit

10009456

石黒忠恵序文 森林太郎撰『陸軍衛生教程』 1889年

石黒忠恵(1845-1941)は、陸奥国伊達郡(現 福島県伊達市)出身で、1865年(慶応元年)江戸の医学所に入り、西洋医学を修めました。1869年に大学東校

(東京大学医学部の前身)に勤務し、1871年に兵部省(1872年に廃止後、陸軍省と海軍省が新設)の軍医となりました。1877年西南戦争勃発後、大阪臨時陸軍病院長を務め、愛知県公立病院にいた後藤新平(1857-1929)の申し出により、外科治療を指導し、後藤に内務省衛生局入りを勧めました。

陸軍軍医学校長 陸軍軍医監となった石黒が書いた序文では、従来の衛生書は原書を翻訳し編集したものだが、ドイツで衛生学と軍陣衛生学を学んだ陸軍一等軍医 森林太郎(鳴外1862-1922)による本書は、真の著作物であり本校で刊行した、と述べています。



2, 10, 103p, 図版8枚：19cm

Nagoya University Medical Museum Small Exhibit

11829086

熊澤釰七郎『通俗衛生新書』 1890年

熊澤釰七郎(1861-1934)は、尾張藩士の生まれです。

1881年(明治14年)に愛知県公立医学校を卒業後、名古屋市内の矢場町で開業し、名古屋市医師会長を務めました。また、熊澤古蓬として、写生・写実を基礎とした日本画を数多く残しました。

当時、内務省衛生局技師であった後藤新平(1857-1929)が題辞を書いています。




Nagoya University Medical Museum Small Exhibit 11059291

Flügge <sup>かわはらひろし</sup> <sup>これらびょうばしるるすろん</sup>  
**布律外著 川原汎譯『虎列刺病拔失爾々論』 1890年**

布律外(Karl Georg Friedrich Wilhelm Flügge 1847-1923)は、ドイツの細菌学者、衛生学者で、ローベルト・コッホ(Heinrich Hermann Robert Koch 1843-1910)の同僚でした。拔失爾々ス(バチルス Bazillus)は細菌のことで、本書は、魚沈賢(ゲッティンゲン)の衛生試験所長時代のコレラ菌(Cholera bacillus)の解説書です。

川原汎(1858-1918)は、肥前国大村木場郷(現 長崎県大村市木場)に生まれ、長崎医学校を経て、東京大学医学部の頃、肺結核を発病し、ベルツ(Erwin von Baelz 1849-1913)による治療を受けつつ卒業しました。北里柴三郎(1853-1931)と同期です。1883年(明治16年)、愛知医学校一等教諭となり、日本最初の神経学書『内科彙講 神経系統篇』を発刊しました。



118p:  
縦 19cm × 横 13cm

Nagoya University Medical Museum Small Exhibit 10000349

<sup>あいち いがっかいざっし</sup>  
**『愛知医学会雑誌』 1894年**

1894年(明治27年)7月、愛知医学校を中心に愛知医学会が組織され、『愛知医学会雑誌』が創刊されました。隔月発行で、第一号には、原著 <sup>かわはらひろし</sup> <sup>きたがわおとじろう</sup> <sup>はがえいじろう</sup> として、川原汎(1858-1918)、北川乙治郎(1864-1922)、芳賀榮次郎(1864-1953年)、熊谷幸之輔(1857-1923)、花房道純(1860-1895)、稻田宜四郎(?-1930)、小島浦三郎(?-1923)、甚目心融の論述のほか、内外医事、本会記事、会報、時報が掲載されました。

1897年に『中央医学会雑誌』と誌名を変更し、以後、『愛知医学会雑誌』、『名古屋医学会雑誌』、『名古屋医学』と誌名が変わり、1987年3月に発行された第109巻 第1/4号をもって休刊となりました。



1冊(第壹號-拾號)  
縦 22cm × 横 16cm


Nagoya University Medical Museum Small Exhibit 40925601

<sup>ごとうしんぺい</sup>  
**後藤新平 “Vergleichende Darstellung der Medizinalpolizei und Medizinalverwaltung in Japan und anderen Staaten”**

(日本とその他の国の保健警察と保健行政の比較論) 1891年

後藤新平(1857-1929)の海外留学の志は、名古屋時代からありましたが、1890年(明治23年)4月、内務省衛生局の技師の時代に、自費でのドイツ留学が認められ、衛生制度について研究しました。本書は、後藤がミュンヘン大学(Ludwig-Maximilians- Universität München)に提出した34ページの学位論文で、医学博士号を与えられました。

後藤は、1892年6月に帰国し、同年11月に、<sup>ながよせんさい</sup> 長與専齋(1838-1902)の後任として衛生局長に就任しました。




34 p. : 26 cm

Nagoya University Medical Museum Small Exhibit 11829085

<sup>やざしたしこう</sup> <sup>さいとうくめじろう</sup> <sup>これらせきりよぼうしやうどくじつてびかえ</sup>  
**柳下士興、齋藤条次郎『虎列刺赤痢豫防消毒實施手扣』 1895年**

1880年(明治13年)7月、伝染病予防規則が公布されました。本書の広告によると、当初1,000部出版の見込みで予約を募集したところ、申込者が多く2,000部に変更したのですが、さらに申込があり、ついに15,000部印刷したとあります。柳下士興は、京都の栗田口青蓮院内の仮療病院(京都府立医科大学の前身)の職員でした。

北里柴三郎(1853-1931)が校閲し、後藤新平(1857-1929)から柳下に宛てた折込文があります。後藤は、当時、陸奥中村藩の末代藩主であ <sup>あわたぐちしやうれんいん</sup> る相馬誠胤(1852-1892)をめぐる相馬事件に連座して一時収監された後、無罪判決を得て、臨時陸軍検疫部事務官長(高等官三等)でした。



2, 3, 62p :  
縦 14. 9cm × 横 10. 5cm


Nagoya University Medical Museum Small Exhibit 11903890

<sup>ごとうしんぺい</sup> <sup>ばいきんずふ</sup>  
**ギンテル著：後藤新平譯『微菌圖譜』 1893年**

ギンテル(ギュンター Friedrich August Günther 1784-1872)は、ドイツベルリンの微菌学者で、顕微鏡の撮影術に練熟していました。(本書の序文より)

後藤新平(1857. 6-1929)は、福島県須賀川の医学所を卒業後、1876年(明治9年)8月、愛知県公立病院の三等医となり、1881年10月、24歳で愛知病院長兼医学校長となりました。1883年、内務省衛生局に入り、2年間のドイツ留学ののち、1892年に衛生局長となり、公衆衛生行政の基礎を築きました。1893年11月16日、相馬事件に連座して入獄しました。

(相馬事件は、福島県の旧相馬藩主が精神障害になり座敷牢や東京府癲狂院へ収容されたことを、陰謀として、旧藩士が訴訟を起こしたことに端を発するお家騒動です。旧藩士に組みしていた後藤は、1893年当時衛生局長でしたが、局長を辞めることになりました。翌1894年、無罪の判決が確定しました。)



12p 図版 12 枚 :  
26cm


Nagoya University Medical Museum Small Exhibit 10010373

<sup>ごとうしんぺい</sup> <sup>こつかえいせいげんり</sup>  
**後藤新平『國家衛生原理』 1898年**

後藤新平(1857-1929)は、ウィーン大学医学部に学んだローレツ(Albrecht von Roretz 1846-1884)から衛生行政思想と、実験的実証科学的発想法の影響を受け、後に、イギリスの公衆衛生に影響を受けました。

後藤は、警察練習所で府県警察官に講義した講義録『衛生警察原理』を元に、『國家衛生原理』(初版は1889年発行)を出版しました。

本書には、国家衛生思想、衛生行政論、衛生経済論がまとめられています。第1編(緒論)、第2編(群生 社会 国家)、第3編(国家の機能)、第4編(固有衛生制度)は、パッペンハイム(Louis Pappenheim 1818-1875)の“Handbuch der Sanitätspolizei”のAllgemeiner Theil(総論)からの邦訳であり、第5編(衛生と理財の関係)のみが後藤の文章とされています。



2, 6, 162p :  
縦 22cm × 横 15cm





3, 179p :  
縦 23cm  
× 横 15cm

たかつか に お さぶろう どくいつ ご さんかげつじしゅうしょ

### 高塚二男三郎『獨逸語三ヶ月自修書』 1900年

高塚二男三郎(1865-1924)は、東京市の生まれです。1885年(明治18年)に東京本郷区の独逸学校を卒業後、第一高等中学校、独逸協会学校などにおいて、ドイツ語学を修業、1900年、愛知医学校における独逸学の教授を嘱託され、1903年、愛知県立医学専門学校嘱託教員となりました。

1920年(大正9年)、県立愛知医科大学予科助教授、1922年、高等学校教員規程により独逸語の教員免許状を授けられました。1923年、県立愛知医科大学予科教員に任ぜられ、法制経済および独逸語の授業を担当、1924年に逝去しました。在職中は長く教務副部長を務めました。

本書は、東京中学校専任講師の時に著したものです。



261p :  
縦 25cm × 横 18cm

あいちけんけいさつぶえいせいしか よぼうようろく

### 愛知県警察部衛生課編『ペスト豫防要録』 1902年

1899年(明治32年)、ペストが広島で発生し、神戸、大阪、浜松に広がりましたが、名古屋は免れました。本書は、当時の予防措置を記録し、今後の参考とするため、愛知県警察部衛生課が編集したものです。

1899年11月訓令第1036号「広島神戸ヨリ來ル旅客ニ對シ注意ノ件」から、同年12月訓令第292号「熱田町傳染病院ニペスト治療器具器械設備方ノ件」、同年12月縣令第92号「飲食物ニ覆蓋ヲ爲スヘキ件」、1900年6月示令乙號外「名古屋市内儉病的戸口調査實施ノ件」など、同年12月「検疫官島村岬解職ノ件」までの訓令、県令、告示等の公文書と、検病的戸口調査(鼠駆除薬配置・清潔方法施行)の図が収録されています。



142p : 縦 27cm × 横 19cm

な ら さかげんいちろう きょくじょかいぼうがくず ふ

### 奈良坂源一郎『局處解剖學圖譜』 1903年

奈良坂源一郎(1854-1934)は、<sup>むつのにものうぐんたかきむらおおあざやもと</sup>陸奥国桃生郡鷹米村大字矢本(現 宮城県東松島市矢本)の生まれです。後藤新平(1857-1929)に招かれ、1881年(明治14年)、愛知医学校の解剖学、生理学、組織学の一等教諭として赴任しました。

本書の自序によると、「解剖学を講ぜんと欲せば必ず先ず図画を備えざる可らず」として、「図画は泰西諸書中より勉めて精密にし、<sup>ほひつ</sup>て最も应用到する物を選択し自画を以てして其足らざるを補弼」しました。

多芸な奈良坂は、特に詩歌や絵画などに才能を発揮しました。

きたざとしばさぶろう

あさかわのりひこ

くりばやしでんきち

さいしんしゅとうかく

### 北里柴三郎序文 浅川範彦校閲 栗林傳吉纂著『最新種痘學』 1903年

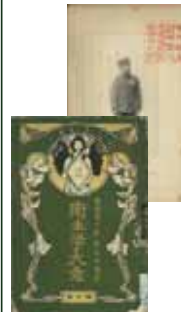


111p :  
縦 18cm × 横 14cm

北里柴三郎(1852-1931)は、ローベルト・コッホ(Heinrich Hermann Robert Koch 1843-1910)に師事、破傷風菌の純粋培養に成功しました。帰国後ペスト菌を発見し、血清療法を開発しました。

浅川範彦(1865-1907)は、土佐国(高知県)土佐郡の生れです。高知医学校で医学を学び、卒業後上京して、済生学舎で学びました。1894年(明治27年)再び上京し、北里が新たに開いた伝染病研究所の助手となり、ジフテリアの血清療法や破傷風の毒素の研究に功績を残しました。日本細菌学会賞の一つに、その功績を記念する浅川賞があります。

栗林伝吉は、痘苗製造所技手です。



2, 4, 160p, 図版  
[1]枚 :  
縦 23cm × 横 15cm

### 森林太郎講述『衛生學大意』 1907年

森林太郎(鷗外 1862-1922)は、石見国津和野(現 島根県津和野町)出身です。津和野藩代々の御典医(大名に仕えた医師)の家柄で、7歳から藩校で漢学を学び、10歳で上京し、進文学舎でドイツ語を学びました。1881年(明治14年)7月に東京大学医学部を卒業後は、開業医の父を手伝い、同年12月に陸軍省に入り軍医となりました。ドイツ留学後は、陸軍軍医学教官、日清戦争出征、第二軍軍医部長として日露戦争出征などの後、1907年に陸軍軍医總監・陸軍省医務局長となりました。公務のかたわら、1890年に『舞姫』を発表し、以後、創作、翻訳などの多彩な文学活動を展開しました。

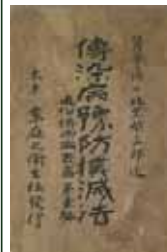
本書は、森林太郎の講話を筆録したもので、土地、下水、埋葬、上水、都会、家屋、空気、気象、衣服、栄養の10章に編集されています。

きたざとしばさぶろう

でんせんびょうよぼうほくめつほう

つうぞくでんせんびょうそうしよだいいっぺん

### 北里柴三郎講述『傳染病豫防撲滅法 通俗傳染病叢書第壹編』 1911年



4, 9, 214p : 図版 :  
縦 22cm × 横 15cm

この叢書の発行について、北里柴三郎(1852-1931)は、次のように述べています。「<sup>ヨーロッパ</sup>欧羅巴殊に独逸あたりでは、医事衛生のことに関する、通俗的の書物が多く出版になって居て(中略)．．．伝染病は多くの病気の中でも、中流以下の人に最も多く蔓延して(中略)．．．其の予防法の如きは、上流社会の学問知識のある人ばかり知って居たところまで到底充分なる成績の挙るものではありません、殊に腸室扶斯、赤痢、肺結核の如きは、下等社会の貧民窟に、最も多く流行するものであるから、中流以下の人々が、能く其の予防法や撲滅法を心得て居てこそ、公衆衛生の道も次第に発達する域に進む(中略)．．．通俗平易に説く事は最も必要とする処で、是れは又学者のなすべき当然の任務であると信じます。」

はやしな おすけ つつがむしびょうびょうりかいぼうならび そしきがくてきけんきゆう

## 林直助『恙虫病々理解剖並ニ組織學的研究』 1911年

51p : 図版 :  
縦 25cm × 横 17cm

林直助(1871-1953)は、岐阜県恵那郡出身です。1901年(明治34年)に京都帝国大学医科大学助手となり、1906年7月、新潟県から恙虫病調査員を嘱託され、同年12月、愛知県立医学専門学校教諭、1920年、県立愛知医科大学教授となり、病理学、病理解剖学等を担当しました。

林は、1906年～07年に3例の恙虫の病理解剖を行い、恙虫病病原体は恙虫口器「ヒポハリンキス」(Hypopharynx)を媒介して人体に侵襲することなどを明らかにし、1908年、『恙虫病病理解剖並びに組織學的研究』を『北越医学会報』165巻に投稿しました。1913年、本書を学位主論文として、京都帝大から医学博士の学位を授けられました。

やがみこうすけ い か き かいもくろく

## 八神幸助編『醫科器械目錄』 1912年



八神幸助は、1871年(明治4年)に名古屋京町(現名古屋市中区丸の内三丁目)に八神商店(八神製作所の前身)を創業しました。

海外の製造者から医療器械を輸入する業者の中では、先駆的な業者の一つでした。

本書発行当時の八神醫科器械舗の営業種目は、理化学器械、消毒繃帯材料、玻璃(ガラス)・陶磁器製造、量器製作、度衡器販売などです。

173p : 図版 : 縦 13cm × 横 10cm

かんさい い かい じ ほう

## 『関西醫界時報』 1912年

1冊(第1号-31号):  
縦 28cm × 横 20cm

1912年(明治45年)6月7日、名古屋の関西医界時報社から、川村泉を発行編集人として創刊されました。判型はB5、月刊で定価は8銭でした。当時の医事評論誌は『中央医事新誌』等の東京発行の2、3誌に限られ、名古屋では『愛知医学会雑誌』(後に、『中央医学会雑誌』→『愛知医学会雑誌』→『名古屋医学会雑誌』→『名古屋医学』と誌名変遷)など学術誌のみでした。愛知県を中心とし、東海、北陸の医師を対象にした医事評論誌として、地方の医界政論等を掲載した最初の雑誌といわれています。誌名に「関西」とあるのは、「関東」に対する語として広範な地域を意識したものと考えられます。1944年(昭和19年)に休刊し、1946年に復刊しました。

## 北里柴三郎『腸室扶斯とパラチフス』 1912年

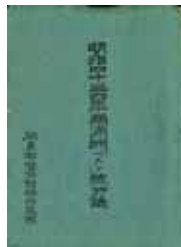
4, 14, 146, 4p :  
縦 21.9cm × 横 14.8cm

北里柴三郎(1852-1931)は、肥後国北里村(現 熊本県阿蘇郡小国町)の総庄屋の長男として生まれました。1871年(明治4年)熊本の官立医学所兼病院(熊本大学医学部の前身)でオランダの海軍軍医マンスフェルト(Constant George van Mansveldt 1832-1912)に師事しました。1883年に東京大学医学部を卒業後、内務省衛生局に勤務し、1886年からの6年間、ドイツに留学し、ローベルト・コッホ(Heinrich Hermann Robert Koch 1843-1910)に師事して研究に励みました。

留学中の1889年に破傷風菌の純粋培養に成功し、さらに抗毒素を発見しました。帰国後ペスト菌を発見し、血清療法を研究しました。私立伝染病研究所を創立しましたが、文部省に移管されたことに反対し、私立北里研究所を設立しました。

かんとう ととくふりん じほうえきぶ めいじ ねん りゆうこうし

## 関東都督府臨時防疫部『明治四十三、四年「ペスト」流行誌』 1912年

1冊 :  
縦 27cm × 横 19cm

1910年-11年(明治43年-44年)、南北満州でペストが大流行しました。関東都督府は、1905年(明治38年)のポーツマス条約により、日本がロシアから引き継いだ租借地である関東州(旅順、大連、金州などの都市を含む)の政務を管掌し、南満州鉄道株式会社の業務の監督に当たった日本の機関です。関東都督府の管内では、防疫の効果により、比較的被害が少なかったのですが、それでも200余名の患者があり、直接被害防止に要した官費は172万円余り、公共団体と個人の支出80万円余りでした。(1910年ごろの大卒初任給は35円程度。)

本書は、患者発生状況、防疫機関、防疫施設、防疫従事員勤務状況、会計、学術的研究、日清共同防疫会議などの資料をまとめたものです。

すずきこうのすけ つうぞくはいびょうかんじやせっせいほう ふはいびょうよぼうほう

## 鈴木孝之助『通俗肺病患者攝生法：附肺病豫防法』 1913年

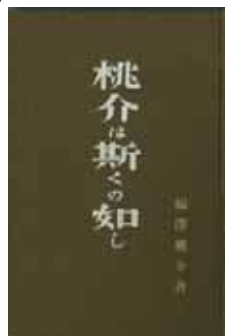


4, 2, 106p : 19cm

鈴木孝之助(1854-1945)は、愛知県田原藩士の家に生まれ、1880年(明治13年)東京大学医学部を卒業、同年9月、愛知県公立医学校の一等教諭となりました。

当時の医学校長心得であった後藤新平(1857-1929)は、外国人教師は高給なため、他の専門科目の教授に徹底を欠くということで、県令(県知事)安場保和(1835-1899)の同意を得て、日本人の医学士を採用して、漸次増員するという方針を立てました。鈴木は、その最初の医学士で、後藤が内務省へ異動すると、後任として1883年1月から同年10月まで愛知医学校長を務め、後に、海軍軍医総監となりました。





2, 6, 342p :  
縦 20cm × 横 13cm

Nagoya University Medical Museum Small Exhibit

11913971

# 福澤桃介『桃介は斯くの如し』 1913年

福澤桃介(1868-1938)は、埼玉県吉見町に岩崎紀一の子として生まれ、慶應義塾在学中に福沢諭吉に見込まれ養子となり、米国に留学しました。名古屋を中心とする実業界で活躍し、木曾川などの水力発電の開発など電気事業に係わり、電力王と呼ばれました。

1873年(明治6年)5月に、名古屋西本願寺別院の仮病院の教師となったヨングハンス(T. H. Junghans)は、1876年に米国へ帰国し、ニューヨーク州ポキプシー(Poughkeepsie)に住みました。諭吉の親友であり、来日していた医療宣教師D. B. シモンズから推薦されて、桃介は、留学時代にヨングハンス宅に身を寄せて、イーストマン・ビジネス・カレッジに通いました。

Nagoya University Medical Museum Small Exhibit

40006115

# “Aichi Journal of Experimental Medicine”「愛知實驗醫學」 1923年



102p : 縦 26cm × 横 18cm

1923年(大正12年)3月、県立愛知医科大学は、欧文紀要“Aichi Journal of Experimental Medicine”を創刊しました。創刊号には、大庭士郎、種村式、田中義雄、林直助、葛谷貞之らによるドイツ語7編、英語1編の論文が掲載されました。

この紀要は、1927年に“Nagoya Journal of Medical Science”と誌名を変更し、2011年からは冊子の印刷をやめてオープンアクセス・ジャーナルとし、また海外メンバーも含めてEditorial Board Memberを拡充し、海外からの投稿も増えてきました。2013年にはインパクトファクターを取得しました。

Nagoya University Medical Museum Small Exhibit

11640142

# 『愛知縣立醫學專門學校 縣立愛知病院 新築落成式紀念』 1915年

52p, 図版 57 枚 : 挿図 :  
縦 17cm × 横 13cm



愛知県立医学専門学校・県立愛知病院は、1914年(大正3年)3月、現在の名古屋大学医学部の地(昭和区鶴舞町)に移転しました。

1915年11月3日の新築落成式に際して、職員と校友が協力して落成式協賛会を組織し、その事業の一部として、創立以来の沿革並びに現況の梗概を載録したこの記念帖を出版しました。

Nagoya University Medical Museum Small Exhibit

11829545

# 後藤新平『帝都復興とは何ぞや』 1924年



1, 2, 2, 202p,  
図版 3 枚 : 18cm

後藤新平(1857-1929)は、1920年(大正9年)に東京市長に就任し(1923年4月辞職)、8億円の東京市改造計画を提案しました。

後藤は、1923年9月1日の関東大震災発生後、9月2日に、第2次山本権兵衛(1852-1933)内閣の内務大臣となり、9月29日には帝都復興院総裁を兼任し、大規模な区画整理と公園・幹線道路の整備を伴う、大震災後の東京の都市計画を指導しました。

本稿は、後藤が内務大臣時代の地方長官会議での演説を抄録したもので、東京市が編集し、帝都復興叢書刊行会から刊行された『区劃整理と建築』(東京市編纂)に収録されています。



36p :  
縦 26cm  
× 横 19cm

Nagoya University Medical Museum Small Exhibit

11903889

# 『國民學校自由講座』(第1巻 第3号) 1916年

名古屋市東区にあった國民自由講座機關雜誌社が発行していた月刊誌です。

この講座の顧問として、第八高等学校長 大島義脩(1871-1935)、名古屋高等工業学校長 土井助三郎、元愛知医学専門学校長 熊谷幸之輔(1857-1923)、社長に愛知県会副議長 藍川清成(1872-1948)、常置委員として第八高等学校、名古屋高等工業学校、愛知県立医学専門学校の生徒が名前を連ねています。

「八高、医専、高工の鼎立は、(中略)進歩あり、権威ある文明的都市としての名古屋の誇り(中略)爾来毎回の講演に熱心其蘊蓄を披歴せらるる」(主幹)

本誌には、医専の林直助(1871-1953)と石森國臣(1874-?)の講演記録が掲載されています。

Nagoya University Medical Museum Small Exhibit

# 勝沼精藏 “Intrazelluläre Oxydation und Indophenolblausynthese : histochemische Studie über die “Oxydasereaktion” im tierischen Gewebe” 1924年



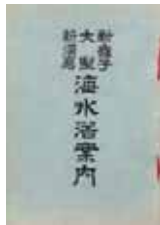
viii, 232 p., [3] p. of plates (some col.) : table : 縦 26 cm × 横 18cm

勝沼精藏(1886-1963)は、兵庫県生まれで、1911年(明治44年)に東京帝国大学医科大学を卒業後、同大学で、内科学、病理学の研究を続けました。

1919年に愛知県立医学専門学校(後に県立愛知医科大学などを経て名古屋大学)の教授となり、1949年7月に、名古屋大学第3代総長に就任しました。ドイツ留学から帰国後の1926年に、39歳で「オキシダーゼの組織学的研究」により帝国学士院賞(現 日本学士院賞)を受賞しました。

38歳で発表した本書の表紙には、1933年6月19日付けで、Mühleus教授への謹呈が自筆で記されています。

## 『海水浴案内：新舞子：大野：新須磨』 1925年

48p. 図版 [4] 枚  
：19cm

知多半島の<sup>しおとうじ</sup>大野では、江戸時代に病気治療のために潮湯治が行われていたことが『尾張名所図会』などにより知られています。

愛知医学校長兼愛知病院長であった後藤新平<sup>ごとうしんぺい</sup> (1857-1929) は、海水浴の医学的な効果に注目し、近代的な海水浴の普及に努め、1881年(明治14年)、大野の<sup>なごよせんざい</sup>実地調査を行い、翌1882年には、内務省衛生局長 長与専斎 (1838-1902) とともに詳細な調査を行いました。同年、後藤は日本で最初の海水浴啓蒙書といわれる『海水功用論』を出版しました。

本書には、「東に大磯、西に大野、否世界最古の海水浴地場として」と書かれています。

## 木下杢太郎『支那南北記』 1926年

3, 571p 挿図(65 図) :  
縦 20cm × 横 13cm

木下杢太郎(1885-1945 本名 太田正雄)は、1911年(明治44年)、東京帝国大学医科大学を卒業後、東大、奉天(現 瀋陽市)の南満医学堂教授兼奉天医院皮膚科長を経て、フランスを拠点にして、欧米に留学しました。1924年(大正13年)10月に県立愛知医科大学教授(皮膚科学泌尿器科学担当)となり、1926年10月東北帝国大学医学部皮膚病梅毒学教授に転じました。

本書は、1916年から1920年にかけて、満州に住み、支那(中国)や朝鮮半島を旅行した折に書いた紀行、論文、随筆などを編集したもので、小引(短い序文)に、「大正14年12月15日 名古屋の客寓に於て」とあります。名古屋時代には、『口腹の小説』などを発表し、名古屋銀行クラブ晩餐会で『日本文明の未来』を講演しました。

## 秋本文吾謹纂『光榮録』 1928年



1冊：縦 28cm × 横 39cm

1927年(昭和2年)11月、愛知県で実施された陸軍特別大演習にともない、昭和天皇(1901-1989)による行幸がありました。

11月14日、当時26歳の昭和天皇は、午前9時5分に自動車で県庁を訪問したのち、9時55分に鶴舞の愛知医科大学(名大医学部の前身)、名古屋高等工業学校(名古屋工業大学の前身)、11時6分に第八高等学校(名大教養部の前身、現 名古屋市立大学滝子キャンパス)、11時39分には名古屋高等商業学校(名大経済学部の前身、現 名市大桜山キャンパス)を訪問し、いずれも主な職員と会見したのち展示物を観覧し、ハ高と名高商では運動場で学生一同を親閲しました。

## 加藤一三編『醫科器械目録』 1930年



357p : 図版 : 縦 26cm × 横 19cm

名古屋市中区裏門前町三にあった合名会社 奈良太郎商店(代表社員 加藤一三)が発行した医科器械目録です。

奈良太郎商店の営業範囲は、名古屋市を中心として近県の官庁をはじめ公私立病院などです。

従来の目録は、挿図が少ないため不便であり、各商店の特徴を出すため一般の器械目録としての価値が無いことや、大冊子の目録もあるが価格が高く、内容価格も不統一のため、これらの不備な点を除去して理想の目録に近づけるべく微力を尽くした、と書かれています。

## 齋藤眞 桐原眞一 河石九二夫共述『輸血法講習録』 1932年

4, 138p : 図版 :  
縦 23cm × 横 16cm

官立名古屋医科大学教授の齋藤眞(1889-1950)と桐原眞一(1889-1949)、助教授の河石九二夫(1895-1973)による本書は、1931年(昭和6年)11月11日から26日まで11回、外科学教室において開いた輸血に関する医学講習会の講義を元にしたものです。

内容は、輸血概論、血液検査実習、輸血発達史、出血及び「ショック」に対する輸血、貧血に対する輸血、伝染性疾患に対する輸血、衰弱及栄養障碍に対する輸血、中毒及火傷に対する輸血、給血者の選択及び血型、輸血法とその実施、反応症状及副作用とその予防法からなり、附録として、医師より見たる輸血に関する法規が収録されています。

## 司馬凌海『凌海詩集』 1933年



[7], 28, 6 丁 : 24cm

司馬凌海(1839-1879)は、佐渡国新町(現 佐渡市真野町)の生まれです。幼名は島倉伊之助、諱は盛之、凌海は通称です。

5歳で祖父の膝下に四書を誦し、8歳で詩を賦し、神童と称されました。1876年(明治9年)5月、ローレツと共に副教師兼訳官として、愛知県公立病院・公立医学講習場に着任し、1877年4月まで務めました。語学の天才で独・英・蘭・仏・中の5か国語ができ、ロシア語・ラテン語・ギリシア語も学んでいたようです。

本書は、司馬凌海の長男で、ドイツ語学者の司馬亨太郎<sup>しばきやうたろう</sup> (1862-1936) が凌海の遺稿を編集したものです。



く の やす  
久野寧 “The physiology of human perspiration” 1934年

x, 268 p., [4] leaves of plates :  
ill., tables, diagrs. :  
縦 21 cm × 横 14cm

久野寧(1882-1977)は、名古屋の生まれで、1903年(明治36年)12月に愛知県立医学専門学校を卒業しました。

1911年から、南満医学堂(後に満州医科大学)教授として、人体発汗の生理学を体系付け、その後、1935年に京都大学、1937年に官立名古屋医科大学に転じた後も、発汗室、発汗量測定のための人体天秤、換気カプセル法の考案など、世界で初めてヒトの汗の本格的な研究を行いました。

本書は、ロンドンで発行され、世界の発汗生理学者者の大きな指針となりました。1941年に帝国学士院恩賜賞、1963年に文化勲章を受章しました。

さいとうまこと けっかんさつえいほう  
齋藤眞 『血管撮影法』 1937年

1冊：図：縦 27 cm × 横 20cm

齋藤眞(1889-1950)は、宮城県仙台市の生まれです。1915年(大正4年)東京帝国大学医科大学を卒業、1917年に愛知県立医学専門学校の講師となり、県立愛知医科大学などを経て、1939年に名古屋帝国大学教授となりました。

本脳神経外科学会を創設し、脊椎麻酔を発展させ、脳血管撮影法、輸血法を確立しました。また、脳神経外科の啓蒙活動として、医学映画の作成と普及を行いました。

本書は、『日本外科学会雑誌』第37回第11号の別刷です。

かとうりょうごろう こうじょうえいせい  
加藤鏖五郎 『ポケット工場衛生』 1939年

82, [6]p :  
縦 11cm × 横 8cm

加藤鏖五郎(1883-1970)は、瀬戸市の生まれです。1905年(明治38年)愛知県立医学専門学校を卒業後、岐阜県立病院、津島済生病院を経て、1908年名古屋市中区で医院を開業し、当時としては破天荒な隆鼻術も手がけました。

かねてから政治家を志していた加藤は、1913年、名古屋市議員に当選後、愛知県議員、衆議院議員となり、第5次吉田茂内閣の国務大臣などを経て、1958年に、衆議院議長となりました。

1937年には落選して約2年間、名古屋医科大学の研究生となり、1944年、名古屋帝国大学から医学博士号を授与されました。嫌煙薬「キンエン」の開発は名大医学部との連携事業です。

本書は、工場災害とその損失、工場換気と粉塵、化学工場とガス中毒、医者をつつまで、脚気、花柳病、肺結核、健康いろはかるたなど多彩な内容により構成されています。

いくたつぷ おかざきとしお ちんりん  
郁達夫著 岡崎俊夫譯 『沈淪』 1940年

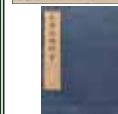
7, 339p :  
縦 19cm × 横 13cm

郁達夫(Yu Dafu 1896-1945)は、浙江省富陽縣に生まれ、1913年(大正2年)に来日しました。第一高等学校特設予科を修了後、1915年9月に第八高等学校の第三部(医科)に入学し、翌年、第一部丙類へ転科、1919年に卒業

しました。1921年、九州帝国大学在学中の郭沫若(1892-1978)らの留学生と文学団体「創造社」を結成し、同年10月に小説集『沈淪』を出版しました。

『沈淪』は、ハ高時代の自伝的小説で、当時の中国人留学生の孤独と性を描き、中国の近代文学で性の問題を真正面から取り上げた最初の作品として評価されています。

「電車に乗っていくつもひっそりした通りを過ぎ、鶴舞公園前で下車した。(中略)今このN市(名古屋市)の郊外へ来てからは、下宿といへばぽつんと立っている一軒家で、周囲には全然隣近所といふものがない。」(本書より)

おわりめいようず え  
『尾張名陽圖會』 1940年

7冊：27cm

尾張国呉服町生まれの医師であり、日本初の理学博士である伊藤圭介(1803-1901)は、尾張藩主から種痘法取調を命ぜられ、以後尾張藩の医術に大いに尽くしました。1868年(明治元年)、伊藤圭介と、一等医内家御雇の石井隆庵(1811-

1884)、尾張徳川家第16代藩主徳川義宜(1858-1875)侍医の中島三伯(1824-1874)の3名は連署して、洋医学校を名古屋にも設立すべきことを名古屋藩に建議しました。

1871年(明治4年)旧暦8月9日、名古屋藩は名古屋藩評定所跡(現在の名古屋市中区丸の内三丁目)に仮病院を設け、その西側、本町通りを挟んで名古屋町奉行所跡(丸の内二丁目)に仮医学校を設置しました。その後、医学講習場などを経て、名古屋大学医学部へと発展しました。(仮病院の開設時期は、名古屋藩時代の5月説と名古屋県時代の8月説の二つの説があります。)

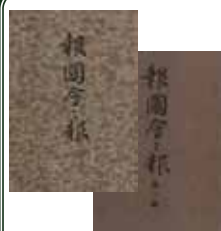
しんいわてじん こごとしんべいはくついでん  
『新岩手人』故後藤新平伯追憶號 1941年

11巻2号  
縦 26cm × 横 19cm

後藤新平(1857-1929)は、陸奥国胆澤郡塩竈村(現 岩手県奥州市水沢区)吉小路に、仙台藩一門留守家の家臣 後藤実崇と利恵の長男として生まれました。

故後藤新平伯の追憶として、読売新聞社長 正力松太郎(1885-1969)「恩人・後藤伯」、元商工大臣 藤原銀次郎(1869-1960)「千里の馬を見るの明」、吉田生「水澤印象記」が掲載されています。

表紙の似顔絵は、岩手出身の風刺漫画家である岸丈夫(1909-?) 本名 古澤行夫)によるものと思われます。



## 『報國會會報』 創刊号(1941年)-第2号(1942年)

1940年(昭和15年)10月の帝国大学総長会議などにおいて、学友会を改組し、報国団を結成するよう求める文相訓示が行われました。名古屋帝国大学(1939-1947)では、1940年7月に結成されていた体育会が翌年5月1日に解散となり、代わって同日に報国会が結成されました。

会長は、<sup>しづさわもとじ</sup>渋沢元治(1876-1975)名古屋帝国大学初代総長です。

太平洋戦争開戦後の1942年12月には、渋沢報国隊長から、東春日井郡牛山にて、工兵基礎作業訓練を受け、航空機滑走路整備作業に従事するため、報国隊を出動したいとする通知書が関係者宛てに出されました。そして、1944年8月公布の学徒勤労令により、学校報国隊による「勤労即教育」の学徒動員が法制化されました。

2冊：  
縦21～22cm×横15cm



## 情報局編輯『寫眞週報』 227、268号) 1942～1943年

写真週報は、1937年(昭和12年)、情報委員会を拡大・改組し、内閣総理大臣のもとに発足した内閣情報部により、1938年に創刊された週刊の国策グラフ雑誌です。内閣情報部は、1940年に外務省情報部、陸軍省情報部、海軍省軍事普及部、内務省警保局検閲課など各省に分かれていた情報事務を統一化することを目指して設置された情報局へと代わりしました。

268号(1943年)には、「機械工を志す女性のために」東京と名古屋に設けられた女子機械工補導所の内、名古屋鶴舞女子機械工補導所(千種区花田町3-15)が紹介されています。「着物も化粧もそして甘い夢も投げすてて挺身参加するうら若い女性の数も日一日と激増してきた」(本文より)とあり、銃後の窮乏生活から目をそらして、団結を高める記事が掲載されました。

2冊：  
縦30cm×横21cm



## 久野寧 装幀木下奎太郎『熱帯生活問題』 1943年

久野寧(1882-1977)は、名古屋の生まれで、1903年(明治36年)12月に愛知県立医学専門学校を卒業しました。

南満医学堂(後の満州医科大学)、京都大学、官立名古屋医科大学で発汗生理学の研究を行い、1941年に帝国学士院恩賜賞、1963年に文化勲章を受章しました。

本書の内容は、人類生活への気候の影響とその対策、熱帯植民と日本人の体質、熱帯気候の影響とこれに対する応急策、冷房問題、発汗、体臭、耐寒鍛錬、感覚の訓練、記憶、最近本邦医学会に現れた協同研究の気運、国際生理学会概況、日華医学者の協調に関する私案からなります。



257p：縦21cm×横15cm

<sup>しづさわもとじ</sup>渋沢元治 <sup>われら</sup>『我等の學園』 <sup>がくえん</sup> 1943年

渋沢元治(1876-1975)は、名古屋帝国大学の初代総長(1939-1946)です。

1942年(昭和17年)、工場労働者の増加と戦時下により、学生の下宿が不足したため、大学で空き家を借り入れ、学生寮として十数名の学生を入寮させました。この寮は、渋沢総長により<sup>せいせいりよう</sup>「菁々寮」と名づけられ、総長直筆の書(「進吾往也」、「園日涉以成趣」)が掲げられました。「菁々寮」内では、総長と学生との、豚鍋をつつき合う懇談会が開催されました。学生により総長懇談会と名づけられ、7月まで十数回開かれ、延べ二百名あまりの学生が参加しました。翌1943年からは、本部会議室で開催されるようになり、その内容を書いた『我等の学園』を学生に配付し、懇談会で説明、補足を行いました。



18p、図版1枚：  
18cm

## 三菱重工株式會社名古屋航空機製作所『兵器を造る我等の覚悟』 1943年

内閣総理大臣兼陸軍大臣 <sup>とうじょうひでき</sup>東條英機(1884-1948)による1943年(昭和18年)8

月4日の訓示、名古屋航空機製作所長 <sup>おかのやすじろう</sup>岡野保次郎(1891-1976)による「兵器を造る我等の覚悟」(1943年5月28日 東京放送局より放送)、大本営陸軍報道部長 <sup>やはぎな かお</sup>谷萩那華雄(1895-1949)による「航空決戦」(1943年5月1日講演)ほか全12編の放送・講演集です。

「大東亜戦争勃発以来僅々1年有余の間陸海軍御当局より或は性能優秀の廉により或は増産達成の廉により栄の表彰を拝受すること実に5回に及んだ… 本書はこの類例なき光栄と感激を記念し… 一層我等の責務の重大性に対する自覚を固め… 出版したもの」(岡野保次郎の序より)



259p：  
縦19cm×横13cm

## 技術院『戦時研究員制度ニ就テ』 1944年

技術院は内閣総理大臣の管理下、科学技術の刷新向上、<sup>なはんく</sup>就中航空に関する科学技術の躍進を図ることを目的として1942年(昭和17年)に設置されました。

1943年10月に、技術院の主導により内閣が設けたのが、戦時研究員制度です。戦時研究員は、戦争目的の達成のため、国が全力をかたむけて急速に成果をあげる必要のある科学技術の重要課題に取り組む、とされました。首相を会長とする研究動員会議が決定する戦時研究員は、1944年には1,122人にのびりました。同年の研究課題は183で、その7割の担当官庁が陸軍省と海軍省でした。技術院は1945年9月4日に廃止されました。



27p：  
縦18cm×横13cm





8, 146p :  
縦 26cm×横 19cm

Nagoya University Medical Museum Small Exhibit

10039877

太田正雄編著『日本の醫學』 1946年

太田正雄(1885-1945)は、詩人 木下全太郎としても知られています。1924年(大正13年)、県立愛知医科大学教授となり、1926年、東北帝国大学医学部教授に転じました。

各医科大学及び専門学校では独立した医学史の講義が無いため、医学史研究の入門書として、「第一部 日本医学史概要(前期)」は山崎 佐(1888-1967)、「第二部 同(後期)」は太田正雄、「第三部 現代の医学研究」は緒方 富雄(1901-1989)・小川鼎三(1901-1984)らにより執筆されました。

太田を中心に編集は戦争中も進められましたが、1945年10月15日、太田の逝去により、出版できなくなり、原稿は黒田清伯爵を経て、四部と五部を割愛して第三部までが出版されました。



12冊 : 19cm

Nagoya University Medical Museum Small Exhibit

10447010-10447021

『木下全太郎全集』 1948-1951年

木下全太郎(1885-1945)は、静岡県賀茂郡湯川村(現 伊東市湯川)に生まれました。本名は太田正雄です。詩人、劇作家、小説家、美術研究家として知られていますが、東京帝国大学医学部を卒業した皮膚科の医学者で、フランス留学から帰国後、1924年(大正13年)-1926年に県立愛知医科大学の皮膚科の教授となり、その後、東北帝国大学、東京帝国大学の医学部教授などを歴任しました。

『木下全太郎全集』は、第1巻 詩集、第2巻～3巻 戯曲、第4巻～5巻 小説、第6巻 吉利支丹研究、第7巻～8巻 評論、第9巻～10巻 紀行、第11巻 随筆、第12巻 医学論稿・日記・書簡、から構成されています。



238p : 縦 19cm×横 13cm

Nagoya University Medical Museum Small Exhibit

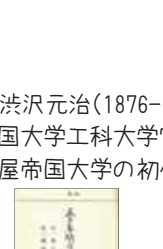
11910001

小谷剛著 熊谷九壽装幀『確證』 1949年

小谷剛(1924-1991)は、京都市で生まれ、名古屋市で育ちました。1945年(昭和20年)名古屋帝国大学附属医学専門部を卒業し、土浦航空隊に入隊し終戦を迎えました。

名古屋市中川区で産婦人科医院を開業するかたわら、同人雑誌『作家』を主宰し、1949年、『確證』により、由起しげ子(1900-1969)とともに戦後復活した最初の芥川賞を受賞しました。

「瀧井(孝作)さんや川端(康成)さんが、小谷を嫌いなのは、よくわかる。それは、悪達者で、はったりが多く、興味のもち方が低い点で、カンベンがならぬのであろう。そう思ったので、私は、却て、小谷を推してやりたくなった。」(芥川賞選考委員 舟橋聖一の評)



17, 314, 204p.  
図版[7]p : 挿図 : 22cm

Nagoya University Medical Museum Small Exhibit

11164122

渋沢元治『五十年間の回顧』 1953年

渋沢元治(1876-1975)は、埼玉県生まれで、実業家 渋沢栄一(1840-1931)の甥です。東京帝国大学工科大学電気工学科を卒業後、欧米に留学し、逓信省、東京帝国大学に勤務し、名古屋帝国大学の初代総長(1939-1946)となり、本学の基礎作りに尽力しました。

本書の「第二編 名古屋大学創設私記」は、就任以来の日記を整理したもので、「太平洋戦争に突入したため、教官の招聘、校舎の建築、設備の充実等に意想外の支障を受け、加えて軍部の要求が益々深く教育界に浸潤し、当初抱いていた大学教育の理想の実現など思いもよらず、終には頻々たる空襲のため約7年間の努力の結果である校舎及び設備の大部分は焼失または破壊せられ、大学構内も荒涼たる状況を呈するに至った。…必ずや近き将来に再建せらることを期待して…」と書かれています。



東大皮膚科医局長時代  
1915年(大正4年)初夏  
田村は後列右から2人目  
土肥慶蔵教授、田中友治  
助教授、太田正雄らと

509p. 縦 22cm×横 16cm

Nagoya University Medical Museum Small Exhibit

10141098

春光同門会編『田村春吉』 1954年

田村春吉(1883-1949)は、1910年(明治43年)12月、東京帝国大学医科大学を卒業後、皮膚科教室、病理学教室で研究を続けました。当時

の皮膚科教室の土肥慶蔵(1866-1931)教授は、ウィーンで学んだムラージュ(Moulage ろう製人体模型)の技法により皮膚病像の忠実な再現を行いました。田村は、ムラージュの製法を技官 伊藤有(1864-1934)

から学んだ長谷川兼太郎(1891-1981)とともに、1916年(大正5年)8月、愛知県立医学専門学校教諭として赴任しました。1932年に名古屋医科大学学長、1946年に名古屋帝国大学第2代総長に就任しました。長谷川の製作したムラージュは、現在、名古屋大学博物館が所蔵しています。本書は、田村の追悼文集で、編輯後記を長谷川が書いています。



82p, 図版2枚 :  
19cm

Nagoya University Medical Museum Small Exhibit

11826434

『名古屋大学医学部学友会沿革』 1956年

名古屋大学医学部学友会は、1900年(明治33年)10月28日に愛知医学校同窓会として発足しました。当時の会長は熊谷幸之輔(1857-1923)愛知医学校長です。その後、愛知医学専門学校校友会、愛知医科大学鶴天学友会などと改称され、1947年(昭和22年)10月から現在の名称となりました。

会報として『愛知醫學校同窓會雜誌』が、1900年12月から発行されました。1940年、「国難打破に邁進すべき未曾有の非常時局に際会して、一つに新体制にのっとり国策に順応しなければならない状態」であるため、9月30日発行の『名大醫學部學友會報』第60号をもって、一時休刊することになりました。復刊されたのは、1946年11月25日です。

すぎもりひさひで みやながたけひこ おおぶろしき  
杉森久英著 宮永岳彦装幀挿絵『大風呂敷』 1965年

391p : 22cm

杉森久英(1912-1997)著の歴史小説です。

主人公の後藤新平(1857. 6-1929)は、福島県須賀川の医学所を卒業後、1876年(明治9年)8月、愛知県公立病院の三等医となり、司馬凌海(1839-1879)の家塾に寄寓し、ローレツ(Albrecht von Roretz 1846-1884)の指導を受けました。1881年10月、24歳で愛知病院長兼医学校長となり、内務省衛生局長の後、台湾総督府民政長官、南満州鉄道株式会社総裁、逓信大臣、鉄道院総裁、東京市長、内務大臣、帝都復興院総裁などを歴任し、壮大な発想から「大風呂敷」と呼ばれました。

ふじえだしずお らくだいめんじょう  
藤枝静男『落第免状』 1968年238p :  
縦 20cm  
×横 14cm

藤枝静男(1907-1993)は、静岡県志太郡藤枝町(現 藤枝市本町)に生まれました。本名は勝見次郎です。旧制第八高等学校を受験しますが不合格となり、この頃、志賀直哉(1883-1971)を読み、白樺派の文学に惹かれていきます。2年の浪人生活を経て、1926年(大正15年)、八高理科乙類(医・薬・農学部進学コース、ドイツ語専攻)に入学し、1930年に卒業しました。千葉医科大学(千葉大学医学部の前身)を卒業後、眼科医となり、開業しながら創作活動を行いました。

代表作に『イペリット眼』、『空気頭』、『田紳有楽』(谷崎潤一郎賞)があります。

本書は、初めての随想集で、八高時代からの友人である文芸評論家 平野謙(1907-1978 本名 平野朗)が常に推薦文を書いています。

あべともじ りょうしんてきへいえきさよひ しそう  
阿部知二『良心的兵役拒否の思想』 1969年iii, 211p :  
縦 18cm  
×横 11cm

阿部知二(1903-1973)は、岡山県勝田郡湯郷町(現 美作市)出身の小説家、評論家です。旧制第八高等学校文科甲類(英語専攻)を1924年(大正13年)に卒業後、東京帝国大学英文科を卒業しました。

小説『冬の宿』、『風雪』、『日月の窓』、評論『主知的文学論』などのほか、メルヴィル『白鯨』、シャーロック・ホームズなど英米文学を幅広く紹介しました。

本書は、「戦争を否定し、これと強く闘うためには国家よりも高い原理に立ってその命に抗うしかないであろう。この書は自己の信条に基いて、いわば素手で徴兵に反対し、あらゆる苦難をなめた「良心的兵役拒否」の思想及び歴史を各国に例をとってあとづけたものである。」(帯より)

ざいだんほうじん きょうさいだんごじゅうねんし  
『財団法人 共済団五十年誌』 1972年127 p : 縦 22 cm  
×横 16cm

財団法人共済団は、名大医学部の前身校である県立愛知医科大学の学長 山崎正董(1872-1950)と事務部長 脇屋義純の提唱により、「職員及学生生徒の間の親睦を図り学事上及其他の便宜を与え並に入院患者の救恤(救済)を目的」として、文部大臣の許可を得て、1922年(大正11年)に設立されました。

設立当初から、患者の必需品を販売する売店、飲食店の経営、付添婦の斡旋、貸布団取り扱い、患者の入院保障等を事業としてきました。

1931年(昭和6年)以降は、入院患者のための寝台自動車の運営、衣料品の斡旋、生花の提供、土地の取得と建物の寄附、入院患者の食事の調製などを行ってきました。

よしだみつくに せかい ふなで しんち ず だくせい かいけつ としゅう えんどう しょうく  
吉田光邦『世界への船出:新地図の作成』(太陽 No. 145 特集 江戸の洋学) 1975年

168p : 縦 29cm × 横 21cm

吉田光邦(1921-1991)は、愛知県西春日井郡出身の科学史家です。

1942年(昭和17年)9月、旧制第八高等学校理科甲類を卒業後、京都帝国大学理学部宇宙物理学科を卒業し、京都大学人文科学研究所教授、京都文化博物館館長などを務めました。

『日本科学史』、『砂の十字路』、『錬金術』、『やきもの一技術・生活・美学』など多くの著書があります。

ごとうしんぺいけんしやうねんじぎやうかい ごとうしんぺいついそうろく  
後藤新平顕彰記念事業会『後藤新平追想録』 1978年

173p, 図版 [12] p : 19cm

後藤新平記念館(岩手県奥州市水沢区)の開館記念出版です。

椎名悦三郎(1898-1979 顕彰記念事業会名誉会長)、河野義克(1913-2003 東京市政調査会)、正力享(1918-2011 読売新聞)、坂本朝一(1917-2003 NHK)、小林與三次(1913-1999 日本テレビ)、美濃部亮吉(1904-1984 東京都知事)等の追想、写真、後藤新平小伝、略年譜が収録されています。

後藤新平顕彰記念事業会が編集発行したものです。



しばりょうたろう かやまたぞう こちよう ゆめ  
司馬遼太郎著 加山又造装幀『胡蝶の夢』 1979年



5冊：20cm

司馬遼太郎(1923-1996)著の歴史小説です。

司馬遼海(1840-1879)と松本良順(1832-1907)らが主人公です。小説では、愛知県公立病院の副教師を契約切れとなり、しばらく名古屋の市中で開業していた遼海(幼名 伊之助)について次のように書かれています。

「得た金はすべて花街で蕩尽し、月ごとに借金がかさんだ。「借金とりがやってくる月末になると、翻訳をやらされた」と、当時、書生として住み込んでいた後藤新平(1857-1929)が語っている。(中略)…。伊之助はドイツの『衛生警察学』や『裁判医学』の本をとりあげ、夕刻から深夜までそのまま漢文調の美文で訳し流してゆくのである。後藤はその速記をするだけであった。」

おあたもつぐ せんぜんはびょういんちよう かいこうく  
太田元次『戦前派病院長の回顧録』正・続 1979年、1992年



2冊：  
縦 20cm×  
横 14cm

太田元次(1913-1990)は、1938年(昭和13年)に名古屋医科大学を卒業後、齋藤(眞)外科学教室の副手を経て、同年5月、軍医候補生として入隊、1944年1月、軍医大尉で召集解除後、再び、齋藤外科学教室の副手、同年7月、臨時召集、1945年11月、召集解除となりました。1940年に樹立された南京政府の首席である汪兆銘(1883-1944)が、1944年3月に名古屋帝国大学医学部附属医院に「梅号」として極秘入院した時に専属医となりました。

正編では、汪兆銘との思い出、幼少期から官立名古屋医科大学を経て、南京、応山などでの軍医としての生活、戦後の名古屋掖済会病院の開院まで、続編では、名古屋掖済会病院長、愛知医科大学学長時代が回顧されています。

つばたちゆうべえ きやうど ふじの げんく ろうせんせい  
坪田忠兵衛『郷土の藤野巖九郎先生』 1981年



60p：図版 [5]p：  
20cm

藤野巖九郎(1874-1945)は、中国の文学者 魯迅(1881-1936 本名 周树人)著の自伝的短編小説『藤野先生』の主人公として知られています。

藤野は、敦賀桑坂井郡(現 福井県あわら市)で、代々続く医者の家に生まれました。1892年(明治25年)に愛知医学校に入学し、卒業後、同学校の助手、1900年に教諭となりました。1901年仙台医学専門学校(後の東北帝国大学医学専門部)に嘱託講師として赴任しました。魯迅は、1904年9月に最初の中国人留学生として同校に入学し、解剖学の教授となっていた藤野は親切に指導しました。藤野は、1917年(大正6年)郷里の福井県三国町に帰り、耳鼻咽喉科医院を開業しました。

おかいたかし きんき こうしよく  
岡井隆『禁忌と好色』 1982年



183p：  
縦 22cm×横 15cm

岡井隆(1928-)は、名古屋市に生まれました。旧制第八高等学校理科を1949年(昭和24年)に卒業し、1950年、慶應義塾大学医学部に入学しました。卒業後は、北里研究所付属病院に入局し、気管支循環系に関する研究により慶大から医学博士号を授与されました。その後、国立豊橋病院内科医長などを務めました。17歳で短歌を作り始め、18歳でアララギに入会し、塚本邦雄(1920-2005)、寺山修司(1935-1983)らと前衛短歌運動の旗手となりました。『禁忌と好色』で、辻空賞を受賞しています。

歌といふ傘をかかげてはなやかに今わたりゆく橋のかずかず

あたらしき禁忌の生るる気配していとどりの遠き雨傘 (『禁忌と好色』より)

ところてる お がしゆう  
『所輝夫画集』 1983年

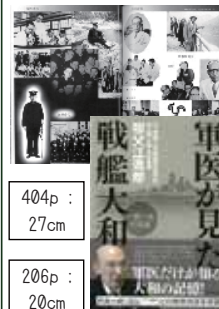
所輝夫(1906-1990)は、岐阜県斐斐郡の生まれで名古屋医科大学の1932年(昭和7年)卒業生です。独立美術協会、日本美術院の院友としても活躍しました。



1冊：縦 25cm×横 26cm

「齋藤教授 脳手術の図」(1931年 医学部図書館3階閲覧室展示)は、所が学生時代に、フランスから帰国した日本における脳神経外科学のパイオニア齋藤眞教授(1889-1950)から、肖像的に描いてほしいとの依頼で描いたものです。戦災で傷んだため戦後すぐに、また1986年にも再度、自身の手で修復されました。「戸田教授 手術の図」(1944年)も3階閲覧室に展示しています。

そ ぶ え い つ ろ う き ょ う じ ゅ う たい かん き ね ん  
『Lesen, Denken und Arbeiten：祖父江逸郎教授退官記念』 1984年



404p：  
27cm

206p：  
20cm

そ ぶ え い つ ろ う ぐ ん い み せん かん や ま と  
祖父江逸郎『軍医が見た戦艦大和』 2013年

「大学を卒業した頃は第二次世界大戦が 酣 な頃で、直ちに海軍に入隊、青島および築地の海軍軍医学校で軍医としての基礎的な訓練と軍陣医学についての教育を受けたのち、それぞれ第一線に配属された。私は軍艦大和乗組を命ぜられ、ア号作戦、レイテ作戦などに参加、最後の特攻隊として出撃する少し前に、海軍兵学校附教官として大和を退艦、兵学校に赴任した。兵学校勤務の折、広島投下の原爆を間近に目撃、投下2～3日後現地調査団に加わり広島に赴き現地のあ

の悲惨な状態を目の辺りに見る事ができた。」(『退官記念』より)

## 清川正二『私のスポーツの記録:オリンピックと共に半世紀』 1984年



340p 図版 16 枚 :  
縦 22cm × 横 16cm

清川正二(1913-1999)は、愛知県豊橋市出身です。名古屋高等商業学校(名古屋大学経済学部的前身)を経て、1936年(昭和11年)東京商科大学(一橋大学的前身)を卒業後、兼松商店(現在の兼松)に入り、1951年～1953年に社長となりました。

1932年、名古屋高商在学中に、ロサンゼルスオリンピックの100m背泳ぎで金メダルを獲得しました。2位、3位も日本選手でした。

日本水泳連盟常務理事などを経て、1979年に日本人初のIOC副会長となり、1988年(昭和63年)のソウルオリンピックでは、100m背泳ぎで金メダリストとなった鈴木大地(1967-)に表彰式でメダルを授与しました。

## 木村資生著 向井輝美、日下部真一訳『分子進化の中立説』 1986年



396p : 挿図 :  
縦 22cm × 横 16cm

木村資生(1924-1994)は、愛知県岡崎市出身です。旧制第八高等学校理科甲を1944年(昭和19年)に卒業し、京都帝国大学理学部で植物学を学びました。卒業後は京都大学農学部、国立遺伝学研究所に入り、1968年、分子進化の中立説を発表し、淘汰説対中立説の世界的な論争が展開されました。1976年に文化勲章、1992年に日本人で唯一のダーウィン・メダルを受賞しました。

「本書は、分子レベルでの進化的変化、すなわち遺伝物質それ自身の変化を引き起す主な要因は正のダーウィン淘汰ではなく、淘汰に中立なまたはほとんど中立な突然変異遺伝子の偶然的固定であるということを科学的に確信させるため書かれたものである。」(英語で書かれた原書は、“The neutral theory of molecular evolution” Cambridge University Press, 1983です)

## 小野稔『太田元次軍医の汪兆銘看護日誌抄』 1988年



113p :  
縦 22cm × 横 16cm

汪兆銘(1883-1944)は、中国広東省生まれの政治家です。清朝末期に日本へ留学し法政大学を卒業しています。孫文の中国革命同盟会のメンバーで、国民党左派の重鎮でした。孫文の死後は国民政府主席として、日中戦争後は親日派として、抗日派の蒋介石と対立しました。

1944年(昭和19年)3月に来日し、名古屋帝国大学医学部附属医院で、以前に受けた凶弾の摘出再手術を受けました。このことは暗号「梅号」と呼ばれて一般に公表されませんでした。汪の病気は多発性骨髄腫であったため、治療の甲斐もなく同年11月に附属医院内で逝去しました。

汪の死後、治療に対する感謝として遺族から梅の木が贈られ、「汪兆銘の梅」として、現在は大幸キャンパス内にあります。太田元次(1913-1990)は、汪兆銘の主治医の一人でした。

## テレビ東京『大風呂敷一時代をクリエートした男 後藤新平』 1989年



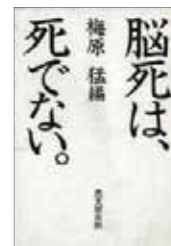
184p : 25cm

テレビ東京が開局25周年記念ドラマスペシャルとして製作した番組です。1989年4月10日(月)20:00～22:54に放送されました。

原作は杉森久英(1912-1997)の『大風呂敷』、脚本は布施博一、題字は森繁久彌です。主な配役は、後藤新平(森繁久彌)、後藤和子(八千草薫)、桂太郎(須賀不二男)、伊藤博文(芦田伸介)、青年時代の後藤新平は近藤真彦、安場和子は鈴木保奈美が演じました。

名古屋時代には、安場保和(川津祐介)、司馬凌海(不破万作)、板垣退助(丹波哲郎)、国貞廉平(宮口二郎)、内藤魯一(草薙良一)等が登場します。

## 梅原猛編『脳死は、死でない。』 1992年



iv, 314p :  
縦 20cm  
× 横 14cm

梅原猛(1925-)は、宮城県仙台市に生まれ、愛知県知多郡で育ちました。旧制第八高等学校文科乙類を1945年(昭和20年)に卒業し、同年、京都帝国大学文学部哲学科に入学しました。入学直後に徴兵され、1948年に卒業後、立命館大学、京都市立芸術大学などに勤め、国際日本文化研究センターの初代所長となりました。

文学、歴史学、宗教などに大胆な仮説を立て、梅原日本学を確立しました。本書は、1990年(平成2年)に首相の諮問機関として設置された「脳死臨調」(臨時脳死及び臓器移植調査会の通称)の委員となった後の対談と講演をまとめたもので、「脳死臨調」の最終答申の全文も収録されています。

## 『よみがえる尾張医学館薬品会：再現江戸時代の博覧会』 1993年



52p : 26cm

江戸時代の「尾張医学館薬品会」を復元する目的で、名古屋市博物館が作成した図録です。江戸時代後半には、各地で動物、植物、鉱物を中心に様々な品を集めて一般に公開する薬品会や本草会が行われ、学問の発達や知識の普及に貢献しました。尾張の本草学は、初代藩主徳川義直(1601-1650)の時代に始まり、水谷豊文(1779-1833)、伊藤圭介(1803-1901)らが活躍し、大きな発展をとげました。

1937年(昭和12年)2月、勝沼精藏(1886-1963)と名古屋市保健部長 金原庄治郎とによる伊藤の銅像の建設協議があり、勝沼の提唱による伊藤圭介翁顕彰事業が始まります。名古屋市鶴舞中央図書館の前庭に山本豊市(1899-1987)制作の伊藤圭介坐像が設置され、1957年5月5日に除幕式が行われました。題字は勝沼が揮毫しました。



奈良坂源一郎『蟲魚圖譜』 2005年

奈良坂源一郎(1854-1934)は、陸奥国桃生郡鷹来村大字矢本(現 宮城県東松島市矢本)に仙台藩士の長男として生まれました。

後藤新平(1857-1929)に招かれ、1881年(明治14年)、愛知医学学校の解剖学、生理学、組織学の一等教諭として赴任しました。

幼少のころから右手が不自由でしたが、多芸に秀で、特に詩歌や絵画などに才能を発揮しました。

『虫魚図譜』は、源一郎の孫 奈良坂宏氏から名古屋大学博物館に寄贈された原本を、医学部第一外科の同門会「同心会」からの支援を得て、発行したものです。



94p : 縦 26cm × 横 39cm

### 3. 絵画・掛軸

長束宗元『乳癌摘出之図』 1800年代前半

1804年(文化元年)、華岡青洲(1760-1835)は、曼陀羅を主剤とした麻酔剤「通仙散」を用いて、世界で初めて全身麻酔による乳癌摘出手術を成功させました。

この図は、華岡流手術図に影響を受けて描かれたものと考えられます。

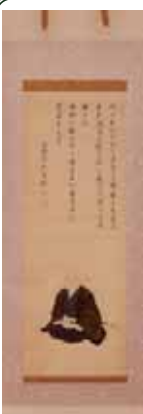


1軸 : 縦 27.8cm × 横 90.8cm

長束宗元(三世)は、愛知郡御器所村(現 名古屋市昭和区)の農家 彦七の子として生まれました。1801年(享和元年)、長束宗元(二世)に入門し、後に養子となり、1811年(文化8年)に一人立ちしました。同年、二世の死去に伴い、1812年、長束宗元と改名、1825年(文政8年)から一段席医師として活躍しました。

三村玄澄 1850年

三村玄澄(1792-1853)は、35歳から38歳にかけて華岡青洲(1760-1835)に学び、尾張の地に華岡流の漢蘭折衷外科をもたらし、尾張で初めて全身麻酔による乳癌の手術に成功しました。1845年(弘化2年)藩医となり、晩年62歳にして尾張藩第10代藩主徳川齊朝(1793-1850)担当の(御匙もしくは御匙手代)奥医師となりました。名は百穀、字は茂公、蕙斎と号しました。自賛肖像画です。箱書きには、「蕙齋先生之像」と記されています。



1軸 : 縦 186cm × 横 47cm (箱の大きさ 縦 58cm × 横 8cm × 高さ 7cm)

瀧浪図南 1876年

瀧浪図南(1852?-1902)は、佐渡国相川町(現 新潟県佐渡市)の生れです。1872年(明治5年)東京へ出て、経史を学び、また司馬凌海(1839-1879)に入門し、ドイツ学および英学を修めました。

1876年、司馬が愛知県に赴任するのに従って名古屋に移り、公立医学講習場掛に申し付けられ、公務の余暇は、司馬とローレツ(Albrecht von Roretz 1846-1884)に医学を学びました。その後、公立医学校三等授業生、二等訓導、一等訓導、教諭心得、一等助教諭等を歴任し、1889年12月に教諭となりました。物理学、生理学、断訟医学、衛生学等の授業を担当し、また、編輯係、副監事、教務部長等を兼務して、『院校報告』の編集などに尽力しました。在職27年、1902年8月急性肋膜炎を発症し、療養中のところ同年11月に逝去しました。



1枚 : カラー  
縦 45.4cm  
× 横 33.5cm

『明治初年愛知県公立病院外科手術の図』 1880年

1876年(明治9年)5月、ローレツ(Albrecht von Roretz 1846-1884 日本語表記は老烈)は、訳官の司馬凌海(1839-1879)を伴って愛知県公立病院・公立医学講習場に着任しました。

愛知県の浮世絵画家である柴田芳洲(1840-1890)による絵で、司馬が在任した1877年4月までに手術を写し、「老烈先生囑」の為書きにより、ローレツが在任した1880年3月頃までには描かれた作品と思われます。



縦 99.3cm × 横 123.8cm

片膝立ちで執刀するのが後藤新平(1857-1929)、左端襷掛けで点滴吸入麻酔を行っているローレツは、自身の好みで老人に描かれていますが、この時はまだ30歳代はじめてでした。和服で患者の腕を支えるのが司馬凌海、洋服でスプレーを持つのが早川養順と伝えられています。

惜別の辞 “Quidquid agis prudenter agas et respice finem.” 1880年

1880年(明治13年)4月13日、任期満了となったローレツ(Albrecht von Roretz 1846-1884 日本語表記は老烈)が、宴の席に臨んで愛知公立医学校生徒に与えたラテン語箴言の掛軸です。出典は“Gesta Romanorum”『ローマ人行状記』第103話(皇帝が商人から3つの箴言を買う話)です。

当時の公立医学校教諭兼訳官 田野俊貞(1856-?)の漢訳には、「汝每事必慮、而後可行、焉常無忽其終」とあります。意識すると、「何事を為すにせよ、その結末まで良く考えてから事を為せ」となります。

下段には在校生徒名と次の添書があります。「明治13年4月13日臨 別得辱教頭老烈氏遺 箴辞短意遠矣生等謹 師其辞之意他日将大有 所為」



1軸 : 縦 185.5cm  
× 横 42.5cm



な ら さかげん いちろう  
奈良坂源一郎 1881年

むつのにものうぐんたかきむらおあざやもと

奈良坂源一郎(1854-1934)は、陸奥国桃生郡鷹来村大字矢本(現 宮城県東松島市矢本)に仙台藩士の子として生まれました。1872年(明治5年)、大学東校(東京大学医学部の前身)に入学します。子供のころに肩を損傷して右腕がほとんど使えなかったため、臨床ではなく基礎医学の解剖学を専攻しました。1881年に東京大学医学部を卒業し、後藤新平(1857-1929)に招かれ、同年10月19日に愛知医学校の一等教諭として赴任し、解剖、生理の両学科を担当しました。当時の医学士は貴重な存在で、その給与(月俸金120円)は後藤校長(月俸金60円)をはるかに上まわっていました。

1枚: モノクロ:  
縦 39.5cm × 横 30.5cm

1892年10月ごろ、名古屋市門前町五丁目に愛知教育博物館を開館し、標本を集めて市民の教育に尽くしました。1921年(大正10年)4月30日に辞職するまで40年間、教鞭をとりました。



くまがいこうのすけ  
熊谷幸之輔 1881年

でわのくにせんぼくぐんろうこう

せんぼくぐん

熊谷幸之輔(1857-1923)は、出羽国仙北郡六郷(現 秋田県仙北郡美郷町)に生まれました。1881年(明治14年)4月に東京大学医学部を卒業すると、愛知医学校の後藤新平校長から同校の将来を担う人材として期待され、同年11月14日に一等教諭として名古屋に赴任しました。その後、愛知医学校や愛知県立医学専門学校などの校長を1916年(大正5年)6月6日まで、33年間にわたって務めました。

1枚: モノクロ(一部カラー):  
縦 42.3cm × 横 33.1cm

辞任後、1,614名の醵金を得て、銅像が建設され、1918年7月1日に除幕式が行われました。銅像は、名古屋高等工業学校(名古屋工業大学の前身)教授の鈴木槇次(1870-1941)により原型が製作され、帝室技芸員の新海竹太郎(1868-1927)により鑄造されました。



かわはらひろし  
川原汎 1883年

ひぜんのくにおおむらこぼごう

川原汎(1858-1918)は、肥前国大村木場郷(現 長崎県大村市)出身です。1883年(明治16年)東京大学医学部を卒業し、同年7月に公立佐賀医学校教員に招聘されました。同年10月に、医学士の学位を取得し、鈴木孝之助(1854-1945)教諭の後任として、愛知医学校一等教諭兼愛知病院内科医長として赴任しました。愛知医学校では、内科学のほかに、病理学、衛生学、診断学、精神病学、皮膚病学などの授業を担当しました。

1897年(明治30年)2月、肺結核の治療のため退職し、名古屋市東区東片端町に川原療院を設立し、療養のかたわら診療を行いました。

英独仏の3か国語に通曉し、『精神病学提綱』、『内科彙講 神経系統篇』、『衛生学綱目』等の著書があります。

1枚: カラー:  
縦 44.3cm × 横 31.0cm



うせん ひつ しょうしゅう しゃ ふくうみのごとし  
羽仙筆 松洲 写『福如海』 1890年ごろ

くまがいこうのすけ

な ら さか

羽仙は、熊谷幸之輔(1857-1923)の号、松洲は、故郷の松島に因んだ奈良坂源一郎(1854-1934)の号で、『福如海』は、二人の合作です。

熊谷幸之輔は、1881年(明治14年)11月14日、愛知医学校校長 後藤新平(1857-1929)から同校の将来を担う人材として期待され、一等教諭として名古屋に赴任しました。その後、愛知医学校や愛知県立医学専門学校の校長を33年間にわたって務めました。

1枚:  
縦 185.5cm  
× 横 42.5cm

奈良坂源一郎は、1881年10月19日、愛知医学校の解剖学、生理学、組織学の一等教諭として赴任しました。若干30歳で大著『解剖大全』を著し、40年間、教鞭をとりました。



な ら さかげん いちろう おど がいいつ がいいつにたい  
奈良坂源一郎『踊る骸骨』『骸骨二体』 1897年頃

奈良坂源一郎(1854-1934)は、後藤新平に招かれ、1881年(明治14年)、愛知医学校の解剖学、生理学、組織学の一等教諭として赴任、40年間、教鞭をとりました。

『踊る骸骨』は、奈良坂が門弟 大北武彦(1893年卒業)に寄贈した戯画です。解剖図や博物図など絵の得意な奈良坂が、竹内栖鳳の『観花』を見て、よし自分も、と柳の下に骸骨を配した画を描いた、と言われています。『骸骨二体』も『踊る骸骨』と同時期に描かれたものと思われます。号は故郷の松島に因み「松洲」としていました。

踊る骸骨: 1軸: 縦 190.5cm × 横 52.6cm 骸骨二体: 1軸: 縦 194.0cm × 横 47.0cm



いしもりくににおみ  
石森國臣 1903年

石森國臣(1874-?)は、福井県出身です。第四高等学校医学部医科を卒業し、京都帝国大学医科大学生理学助手を経て、1903年(明治36年)2月10日に愛知県立医学校教諭となり、1910年からドイツに2年間留学し、神経系統、医化学を研究しました。

石森は、世界で初めて睡眠調節に関して、イヌを使って実験的に研究し、眠気を引き起こす睡眠物質の存在を報告しました。

1917年(大正6年)から1920年12月27日まで愛知県立医学専門学校教授を務めました。辞職後は欧州へ出張し、帰国した後は、名古屋市東区武平町二丁目(当時)に住みました。

1枚: カラー:  
縦 45.0cm × 横 33.3cm



きたじま たち だいにほんこくみんきょういくかい つうぞくえいせいずかい  
北島多一校閲 大日本国民教育會編『通俗衛生圖解』 1919年



1軸：  
縦 118cm × 横 62cm

『日常衛生と傳染病豫防心得』(1917年)の理解を図る附図として、すべての国民が衛生思想の觀念を一目瞭然で得られるように考案して発行されました。男爵 後藤新平(1857-1929)閣下題字とあります。

図の上には、「健康へ行く道」として、早起、清潔、食物や、伝染病の予防、迷信を去ること、公衆衛生などが「無病長寿」へ至る道として示され、下には、白米、甘藷、牛肉など31品目の普通食品分析表があり、蛋白質、脂肪、澱粉糖分、塩分灰分、水分が図示されています。

北島多一(1870-1956)は、石川県出身です。東京帝国大学医科大学を卒業し、ハブの血清療法で知られている細菌学者です。

ところてる お さいとうきょうじゅ のうしゅじゅつ ず  
所輝夫『齋藤教授 脳手術の図』 1931年



1枚：縦 111cm × 横 160cm  
額縁：縦 138cm × 横 186cm

1929年(昭和4年)に、フランスから帰国し、日本における脳神経外科学のパイオニアとなった齋藤眞(1889-1950年)の依頼を受けて、県立愛知医科大学の学生であった所輝夫(1906-1990)が肖像的に描いたものです。



所は、岐阜県揖斐郡の出身、官立名古屋医科大学を1932年に卒業し、独立美術協会の会友、日本美術院の院友としても活躍しました。本図は、戦災で傷んだため終戦直後に、また1986年(昭和61年)に再度、所自身の手で修復されました。

ところてる お と だ きょうじゅ しゅじゅつ ず  
所輝夫『戸田教授 手術の図』 1944年



1枚：縦 71cm × 横 90cm

所輝夫(1906-1990)により、額帯鏡を使って深部の手術野を照明しながら胸部交感神経摘出術を進める戸田博(1906-1953)の様子が描かれています。

戸田は、血管外科、交感神経外科を開拓する一方、日本で初めて人工心肺を開発しました。

所は、岐阜県揖斐郡の出身、官立名古屋医科大学を1932年(昭和7年)に卒業し、独立美術協会の会友、日本美術院の院友としても活躍しました。

ほったかずお  
堀田一雄 1958年



1枚：縦 66cm × 横 54cm  
額縁：縦 89cm × 横 76cm

堀田一雄(1894-1976)は、名古屋市の出身です。1916年(大正5年)に愛知県立医学専門学校を卒業後、東北帝国大学医科大学研究科に入学して生化学を専攻し、1920年、母校の助教授として着任し、生化学の講義を担当しました。1935年5月に名古屋医科大学教授、1939年4月に名古屋帝国大学教授となりました。

1925年、「鳩脚気様疾患におけるコレステリンの意義」の研究論文により東北帝国大学医学部から医学博士の学位を授与されました。ビタミンB2の研究などで成果をあげ、1958年に名古屋大学を定年退職しました。

絵の右下に、Denzaというサインがあります。

#### 4. 図・絵葉書

あんせいな ご や ず  
安政名古屋圖 (1977年複製)



地図1枚：3色刷：  
縦 118cm × 横 173cm  
(折りたたみ 30cm)

名古屋城の南に、名古屋藩の評定所(最高司法機関)と町方役所がありました。

1871年(明治4年)、名古屋藩は元評定所に仮病院を開き、高崎藩の医師 張三石を招聘し、また元町方役所に仮医学校を設けて、張三石を教師とし、荻谷藩士 鈴木甲蔵を助教として、診療と医学教育を行いました。これが名古屋大学の創基とされています。

仮病院の開設時期については、名古屋藩時代の5月説と名古屋県時代の8月説の二つの説があります。

あい ち けんこうりつびょういんおよび い がっこう の へいめん ず  
愛知縣公立病院 及 醫學校之平面圖 1878年頃

公立病院及び公立医学校は、1877年(明治10年)7月、約5,700坪の敷地をもつ天王崎の堀川端旧千賀邸跡に新築された新病院・医学校へ移転しました。



着色図1枚：縦 47cm × 横 58cm  
額：縦 57cm × 横 75cm

設計は、東京出身で、1874年小川善司の後任として病院医員兼訟官となった鈴木宗泰です。西(図下部)の表門を入れて南(右)側が病院で、正面の一棟が外来診療棟。南(右)隣の予備病室が教師館。門柱の掛札には「ドクトル フォン ローレツ」とあります。奥(図上部)の六つの翼は病棟です。医学校は北(左)側で、第一から第四までの教場のほか、化学局、寄宿舍、解剖局、屍室などからなっていました。

## 【絵葉書】好生館側面遠望 1884年

1枚：  
縦9cm×横15cm

横井信之(1847-1891)は、1879年(明治12年)3月から1880年5月まで、愛知県公立病院長、公立医学校長を務めました。この頃、西洋医学の医師養成の必要性を痛感して、私財により名古屋市西区樋の口町の自宅内に、私塾 好生舎を設けて、医学の講義を行い、患者の診療にあたりました。後進の啓発と治療の精巧さで声望が高まり、1884年6月には、手狭となった北鷹匠町から、樋ノ口町(堀川の東、名古屋城の堀端西側)の2,600坪あまりの地に、新たに病院を建築し、好生館と改称して開業しました。

好生館は、横井の没後、女婿であった北川乙治郎(1864-1922)、佐藤勤也(1864-1920)らが経営しましたが、1945年(昭和20年)の空襲により焼失しました。

## 奈良坂源一郎 挿図帖とその使用例『解剖簡明』 1905年以前

解剖簡明: 3冊: 縦22cm×横15cm  
挿図帖: 1冊: 縦23cm×横16cm

奈良坂源一郎(1854-1934)の解剖書(『解剖簡明』と『局所解剖学図譜』)の挿図に使われた奈良坂自身による作画の人体解剖図です。挿図帖には、約320枚の図のみが示されており、部位の説明は記されていません。『解剖簡明』の初版は1894年(明治27年)に発行され、以後、改訂が行われましたが、挿図が使用されたのは、1905年の新訂五版からです。

奈良坂源一郎は、幼少の頃から右手が不自由でしたが、多芸に秀で、特に詩歌や絵画などに才能を発揮しました。

## 【絵葉書】愛知 醫學専門學校全景 1908年



1枚: 縦9cm×横15cm

愛知県公立病院と公立医学所は、1877年(明治10年)7月に、西本願寺別院から、堀川の東岸、天王崎町(現 名古屋市中区栄一丁目)にあった旧 名古屋藩士 千賀家の屋敷跡地へ移転し、愛知病院、愛知医学校と改称しました。敷地面積は約2万㎡です。

その後、医学校は、3年6期の修学期間を4年8期に延長し、入学年齢は15歳から17歳に引き上げられ、それまでの中等教育機関から、高等教育機関である専門学校に格上げされました。さらに1903年(明治36年)3月の専門学校令と公立私立専門学校規程の公布により、愛知県立医学専門学校と改称しました。

## 【絵葉書】愛知縣立醫學専門學校同窓會春季運動會 1908年

2枚:  
記念スタンプあり: 縦10cm×横15cm  
記念スタンプなし: 縦9cm×横15cm

春季運動會の綱帶競争です。他にも載囊競争、制歩競争、提灯競争、数学競争、解剖レース、グラマティシユ(grammatisch ?)競争などの種目がありましたが、競技内容はわかりません。翌年からは、競争中に題を課せられて即吟する俳句競争が新たに加わりました。

愛知県立医学専門学校は、1914年(大正3年)3月に鶴舞に移転するまでの約37年間、堀川の東岸、天王崎町(現 名古屋市中区栄一丁目)にありました。

## 【絵葉書】愛知病院全景 1908年

1枚:  
縦9cm×横15cm

愛知病院は、1881年(明治14年)10月から、1922年(大正11年)7月までの名称です。

愛知県公立病院は、1877年7月に、西本願寺別院から、堀川の東岸、天王崎町(現 名古屋市中区栄一丁目)にあった旧 名古屋藩士 千賀家の屋敷跡地へ移転し、愛知病院と改称しました。1914年3月には鶴舞に移転し、1920年7月の県立愛知医科大学への昇格の後、1922年7月に愛知医科大学病院と改称しました。

この間、1883年1月までが後藤新平(1857-1929)、その後は、熊谷幸之輔(1857-1923)が病院長を務めました。

## 最近名古屋明細地圖 1910年

1枚(2図):  
縮尺1:16000  
縦79cm×横55cm

堀川の東岸、天王崎町(現 中区栄一丁目)に愛知病院と医学校(1910年当時は愛知県立医学専門学校)があり、門前町五丁目には奈良坂源一郎(1854-1934)が開館した愛知教育博物館がありました。

鶴舞公園(水流間、津留間などが語源との説があります)は、1905年から精進川(現 新堀川)を浚渫した土砂が余っていたこと、当時、御器所村だった田園地帯を埋め立てる公園計画があったこと、さらに誘致が決まっていた産業博覧会 第10回関西府県連合共進会の会場が必要だったことから整備され、1909年に開設されました。

裏面には、共進会噴水塔(鶴舞公園)、名古屋停車場、第三師団司令部、名古屋遊藝など市内各所が写真で紹介されています。



あいちけんりついがくせんもんがっこう けんりつあいちびょういん しんちくらくせいきねん  
**〔絵葉書〕愛知県立医学専門学校 県立愛知病院 新築落成記念 1915年11月3日**

1908年(明治41年)6月の臨時県議会において、愛知県立医学専門学校の施設・設備の老朽化解消と、官立大学への昇格をめざして、天王崎町(現 名古屋市中区栄一丁目)から「鶴舞カ原」への移転・改築案が可決されました。敷地面積は、天王崎町の約3倍の広さで、総工費は約70万円でした。



学校本館：縦 9.1cm × 横 14.3cm



病院本館：縦 9.1cm × 横 14.3cm



学校及病院前景：縦 9.1cm × 横 14.3cm

11904644

おしまよしながせんせいじゅぞう  
**〔絵葉書〕大島義脩先生壽像 1919年**

大島義脩(1871-1935)は、丹波国氷上郡(現 兵庫県丹波市)の生まれです。1894年(明治27年)帝国大学文科大学哲学科を卒業し、第四高等学校(金沢大学の前身)教授、東京音楽学校(東京芸術大学の前身)校長などを歴任し、1908年に愛知郡呼続町(現 名古屋市瑞穂区)に新設された第八高等学校の初代校長(1918年まで)となります。

指導教官制度、公認下宿制度など高等学校として初めての試みを実施し、軍事教練と現役将校による検閲講評など、規律厳正の中に自己啓発の自由を残す方針により、「勤勉ハ高」、「教練ハ高」と呼ばれる独自の校風を確立しました。この胸像は、1919年にハ高内に設置されました。作者は、彫刻家 渡辺長男(1874-1952 朝倉文夫の実兄)です。



絵はがき 1 枚：  
縦 10cm × 横 15cm

11903547

なごやしがいず  
**名古屋市街圖 1922年**

愛知県立医学専門学校と愛知病院は、1914年(大正3年)3月、敷地面積2万㎡の天王崎町(現 名古屋市中区栄一丁目)から、鶴舞公園に隣接した6万1千㎡の敷地に移転しました。1918年に制定公布された大学令により、1920年、県立愛知医科大学へと昇格しました。

裏面に名古屋市名勝地誌があります。  
 「附近には(県立)愛知医科大学を始め愛知病院、名古屋高等工業学校(名古屋工業大学の前身)、第八高等学校(名大教養部の前身)、名古屋高等商業学校(名大経済学部の前身)等あり」(鶴舞公園の説明から)



1 枚：縮尺:1:19000  
縦 79cm × 横 55cm (折りたたみ 20cm)

11903546

なごやしがいせんず  
**名古屋市街全圖 1925年**

愛知県立医学専門学校と愛知病院は、1914年(大正3年)3月、敷地面積2万㎡の天王崎町(現 名古屋市中区栄一丁目)から、鶴舞公園に隣接した6万1千㎡の敷地に移転し、1918年に制定公布された大学令により、1920年(大正9年)、県立愛知医科大学へと昇格しました。

道路を隔てて東に県立工業学校(県立愛知工業高等学校の前身)、名古屋高等工業学校(名古屋工業大学の前身)があり、南に第八高等学校(名大教養部の前身)、名古屋高等商業学校(名大経済学部の前身)があります。



1 枚：縮尺:1:15000  
縦 79cm × 横 55cm (折りたたみ 20cm)

11829100

きゆうじょうまえほうしゆくりよくもん しょうねんだんほうしゆくしんか ちゅうおう だんちようごとうしんべいし  
**〔絵葉書〕宮城前奉祝緑門と少年団奉祝薪火(中央は団長後藤新平子) 1925年**

後藤新平(1857-1929)は、1922年(大正11年)、東京連合少年団団長となり、その後、間もなく少年団(ボーイスカウト)日本連盟総裁となりました。



絵はがき 1 組 (8 枚)：  
カラー：縦 9cm × 横 15cm

後藤は、少年団に「自治三訣」を説きました。  
 人のお世話にならぬよう  
 人のお世話をするよう  
 そしてむくいをもとめぬよう

この絵葉書は、大正天皇の銀婚式奉祝(1925年5月10日)として発行された『奉祝東京市之光景』8枚1組の内の1枚です。

11955074

はちこうこうゆうかい まま  
**八高校友會『創立二十週年 記念繪葉書』 1928年**

第八高等学校は、1908年(明治41年)4月に設置されました。愛知県に官立高等学校を誘致する活動は、1899年ごろから本格化し、1905年3月に名古屋高等工業学校(名古屋工業大学の前身)が設置されたことで機運が高まりました。ハ高の誘致運動は、静岡県と長野県も行いましたが、愛知県への設置が確定し、愛知県は愛知郡呼続町大字瑞穂字山ノ畑(現 名古屋市瑞穂区瑞穂町山ノ畑)周辺の第五中学校敷地(約5万4000㎡)の買収費用(約1万3900円)を国に寄付することになりました。

この絵葉書は、「夕陽を浴びて」(文三甲一 永野武)、「瑞陵の夜」(理三甲三 伊藤益雄)、「自覺」(文一乙 山中四郎)の3枚からなり、八高校友会が発行しました。



絵葉書1組(3枚) カラー：  
縦 14cm × 横 9cm

なごやしえいせいしせついちらんず  
名古屋市衛生施設一覧圖 1929年



地図1枚：  
縦51cm×横38cm

各種市営衛生事業の一覧図です。

裏面には、名古屋市衛生機関一覧表があります。

市営機関(保健部、水道部、社会部)、官公立診療機関(遊廓花柳病患者の収療を目的とする県立名古屋診療所など)、公益診療機関(薄資患者の診療を目的とする日赤名古屋診療所など)、公私衛生団体(名古屋市総連合衛生会、愛知県医師会など)、官公立病院(県立愛知医科大学附属医院、名古屋鉄道病院)、私立病院(好生館病院、東山脳病院など)、私立学校(看護婦養成を目的とする名古屋病院附属看護婦学校、産婆養成を目的とする川地産婆学校など)、其の他(大日本施薬院など)

なごやしがいちず  
名古屋市街地図 1943年



1枚：縮尺1:20000  
縦77cm×横55cm  
(折りたたみ20cm)

1931年(昭和6年)に設置された官立名古屋医科大学は、1939年4月に、医学部と理工学部の2学部からなる名古屋帝国大学となりました。同年5月、名古屋帝国大学臨時附属医学専門部が設置されました。

1943年当時の地図では、鶴舞キャンパスは医科大学・大学病院、東山キャンパスは名古屋帝国大学と書かれています。

また、名古屋城の東、東区二葉町にあった愛知県立第一中学校(旭丘高等学校の前身)の旧校舍を仮校舍として学生を募集していたため、帝大仮校舍とあります。第八高等学校(名大教養部の前身)と名古屋高等商業学校(名大経済学部の前身)は、瑞穂区として分離される以前の昭和区にありました。裏面は市内町名索引です。

はくしゃくごとうしんべいしゅうぞう ごとうしんべいし せい か  
〔絵葉書〕伯爵後藤新平 鑄像・後藤新平氏生家 1930年頃

後藤新平(1857-1929)は、陸奥国胆澤郡塩竈村(現 岩手県奥州市水沢区)吉小路に、仙台藩一門留守家の家臣 後藤実崇と利恵の長男として生まれました。



絵はがき1組(8枚)：  
モノクロ：縦9cm×横14cm

伯爵後藤新平鑄像は、1911年(明治44年)に建立され、5月4日に除幕式が行われました。その後、鑄像は太平洋戦争中に、鉄類を国に献納するため撤去され、1971年にボーイスカウト姿の銅像が、1978年に大連星ヶ浦公園にある銅像と同型の銅像が建立されました。

この絵葉書は、『岩手水澤名所美観』8枚1組として発行された内の1枚です。

なごやめいしよ とうしんちやうふきん  
〔絵葉書〕名古屋名所：東新町附近 1943年



絵はがき1枚：  
縦9cm×横15cm

1943年(昭和18年)、陸田志ようから、名古屋市中区東新町にある鉄筋コンクリート5階建の陸田ビルディングの寄附申し出があり、医学専門部の診療実習病院とすることを内定し、文部省の許可を得て正式に寄附を受けました。内部の模様替え後、附属医院分室として同年9月30日に開院し、11診療科が置かれました。分室は翌年5月に正式に附属医院分院としての設置が認められました。

1945年3月19日、分院も空襲を受け、木造附属物の一部を焼失しました。職員と学生が消火作業にあたり、名古屋港から海水を汲んできてリバノール液の代用としたようです。

分院は、1961年に東区東門前町(現 東桜二丁目)に新築、移転し、1979年東区大幸一丁目(現 大幸南一丁目)に新築、移転、1996年(平成8年)に本院と統合し、同年、大幸医療センターが設置され、2011年3月閉院となりました。1997年、大幸キャンパスに医学部保健学科が設置されました。

ほしがうら きやうじやう た ごとうしんべいはく どうぞう  
〔絵葉書〕星ヶ浦の丘上に立つ後藤新平伯爵の銅像 1940年

1905年(明治38年)9月、日露戦争後のポーツマス条約により、日本は旅順・大連の租借権、東清鉄道の一部権益などを得て、1906年南満州鉄道株式会社(満鉄)の初代総裁に後藤新平(1857-1929)が就任しました。

鉄は、大連—孟家屯、安東—奉天間などを手始めに営業しました。

星ヶ浦(現 中国遼寧省大連市 星海公園)は、満鉄が開発し、庭園を造り芝生を敷き詰めて作った公園と、丸い砂利を敷いた人工海岸の海水浴場を持つ避暑地です。後藤の没後、1930年(昭和5年)、星ヶ浦公園内霞ヶ丘に銅像が建立されました。

この絵葉書は、『明光の大連』5枚1組として発行された内の1枚です。



絵はがき1組  
(5枚)：モノクロ：  
縦9cm×横14cm

なごやしふっこうとしけいかくず  
名古屋市復興都市計画圖 1946年



1枚：縮尺1:30000  
縦77cm×横55cm

名古屋市では市内の4分の1ほどが空襲により被災しました。

戦後1945年9月に、名古屋市は無秩序に建ちだしたバラックの規制を始め、市長を会長とする復興調査会が組織されて、10月に東京帝国大学工学部で土木工学を専攻し、木曽三川の治水なども担当した田淵寿郎(1890-1974)が技監に就任しました。田淵を中心とした戦災復興の基本計画は12月に決定しました。この基本方針に従い、東西(若宮大通)と南北(久屋大通)の2本の100m道路が整備され、市内に約280か所あった墓地は市の東部、平和公園に移転させることになりました。田淵は名古屋の「名誉市民第一号」に選ばれています。





1枚  
縦39cm×横46cm  
額 縦48cm  
×横63cm

Nagoya University Medical Museum Small Exhibit  
あい ち けんこうりつびょういんてんきやうしつ ぶくげん ず  
『愛知県公立病院癪狂室 復原図』 1995年

ローレツ (Albrecht von Roretz 1846-1884) は、監禁され粗衣悪食を与えられて人権が侵害されていた精神病患者の扱いを見て、英独仏等の建築を参考にして、博愛、人道主義に則ったノンレストRAINT・システム (non-restraint system 無拘束治療法) に基づく癪狂院 (精神科病院) の建設を愛知県令に建議しました。1880年 (明治13年) 4月、公立病院構内に落成した癪狂室棟は、わが国屈指のものでした。

平屋で他の病室とは隔離し、建物の中央にツェルレ (Zelle 隔離室) 式の病室が2室あり、周囲は廻り廊下にして、東方廊下を隔てて看護人室が2部屋ありました。ツェルレの外部は泥壁木柱、内部は壁を畳床とし中層には帆布綿を張り、更にペンキを塗り、床は厚板が敷いてあります。

この復原図は、1995年に名古屋で開催された第24回日本医学会総会の委嘱により、名古屋大学工学部建築学科の小寺武久 (1933-2006) 教授と溝口正人 (1960-) 助手が作成しました。

## 5. 写真



鶏卵紙写真1枚 :モ/クロ:  
縦10.5cm×横6.4cm  
(写真:縦9.1cm×横5.6cm)

Nagoya University Medical Museum Small Exhibit

11934603

し ば りやうかい  
司馬凌海 1876年

司馬凌海 (1839-1879) は、佐渡国新町 (現 佐渡市真野町) の生まれです。幼名は島倉伊之助、通称は凌海、諱は盈之 (みつゆき) です。語学の天才で独・英・蘭・仏・露・中など数か国語に通じていました。

まつもと りやうじゆん  
松本良順 (1832-1907)、ポンペ (Johannes Lijdius Catharinus Pompe van Meerdervoort 1829-1908) に師事し、医学を学び、医学用語の日本語訳を多く作っています。(蛋白質、室素、十二指腸など)

1876年 (明治9年) 5月、外国人教師ローレツ (Albrecht von Roretz 1846-1884) とともに副教師通弁兼医校教師として、愛知県公立病院・公立医学講習場に着任しました。



鶏卵紙写真1枚 :モ/クロ:  
縦10.5cm×横6.3cm  
(写真:縦9.1cm×横5.6cm)

Nagoya University Medical Museum Small Exhibit

11935833

ごとうしんぺい  
後藤新平 1880年5月

後藤新平 (1857-1929) は、仙台藩 (水沢藩) 陸奥国胆澤郡塩竈村 (現 岩手県奥州市水沢区) の出身です。福島県須賀川 (すかがわ) の医学所を卒業し、1876年 (明治9年) 愛知県公立病院に着任、1880年5月に横井信之 (1846-1891) 退職に伴い、心得の後、1881年10月、24歳で公立病院長兼公立医学校長となりました。

ながよせんざい  
1883年、長与専斎 (1838-1902) の招きで内務省に任官し、後に東京市長、内相、外相などを歴任しました。

裏面に「岩手縣平民 醫士 後藤新平 齡廿三年 明治十三年五月採影」と書かれています。



鶏卵紙写真1枚 :モ/クロ:  
縦10.5cm×横6.3cm  
(写真:縦9.1cm×横5.6cm)

Nagoya University Medical Museum Small Exhibit

11935835

ごとうしんぺい  
後藤新平とローレツ 1880年

西南戦争による傷病兵の治療のために、愛知県公立病院から大阪陸軍臨時病院に転任した後藤新平 (1857-1929) は、名古屋へ戻ると鎮台病院に引き抜かれました。ローレツ (Albrecht von Roretz 1846-1884) は鎮台病院を訪ねて、「日本のために、かつて日本の医学界のために、立派な医者を養成して、公益を将来に期して行きたい。後藤君を除いては、私の後継者となるような人材は一人もいない」と説明し、後藤は再び公立病院に戻ることにしました。

その後、後藤はローレツの学徳を受け、助手として、代診として期待に込めて、後藤とローレツは水魚の交わりとなっていきます。



1枚 :  
縦8.6cm  
×横12.6cm

石川 後 柘 田 石  
川 藤 植 野 井  
詢 新 宗 榮 三  
平 一 貞

Nagoya University Medical Museum Small Exhibit

ごとうしんぺい きやうゆ  
後藤新平と教諭たち 1881年頃

ごとうしんぺい よこいのぶゆき  
後藤新平 (1857-1929) は、横井信之 (1846-1891) の後任として、1880年 (明治13年) 5月から1881年5月まで、愛知公立病院長兼医学校長心得となり、1881年5月から1883年1月まで、公立病院長兼医学校長を務めました。髭を蓄えた後藤が前列中央にいることと、柘植宗一 (1878年東京大学医学部別課医学科卒業) が1881年7月27日に退職していることから、1880年後半～81年7月に撮影された写真と思われます。

いしかわじゆん つげ そういち たのとしさだ  
石川詢 (1858-1933) は愛知県出身の一等助教諭、柘植宗一は三重県出身、田野俊貞は栃木県出身の訳官兼二等教諭、石井榮三は愛知県出身の一等助教諭です。



1枚 : 縦18.0cm×横26.2cm

Nagoya University Medical Museum Small Exhibit

おいてにしほんがん じ べつていん こうちやう ごとうしんぺい し そうべつ き ねんさつえい しよくいんがくせいいちどう  
於 西本願寺別院 校長後藤新平氏送別記念撮影 (職員学生一同) 1883年

ごとうしんぺい  
後藤新平 (1857-1929) は、1883年 (明治16年) 1月内務省に転勤のため、西本願寺別院 (名古屋市中区門前町 1-23) において記念撮影後、人力車を連ねて熱田海岸の旅籠屋「伊勢久」に到着し、送別の宴を開いて、海路、東京へ赴任しました。

写真上の○の中、左からローレツ (退職当時 Albrecht von Roretz 1846-1884)、後藤、海軍大軍医 鈴木孝之助 (校長退職当時 1854-1945) です。前から2列目中央が後藤、向かって左隣から鈴木孝之助、奈良坂源一郎 (1854-1934)、一人おいて瀧浪圖南 (1852?-1902)、右隣に齋藤道四郎 (1858-1930)、熊谷幸之輔 (1857-1923)、小倉開治 (1855-1908)、一人おいて石井榮三らが並んでいます。

あいち いがっこうぜんめん ず  
愛知醫學校前面/圖 1884年



1枚：縦 27.3cm×横 59.4cm  
額：縦 36cm×横 69cm

名大医学部の源流にあたる愛知県病院・医学講習場(公立医学所)は、1877年(明治10年)7月に、当時の名古屋町域の西端を流れていた堀川の東岸、天王崎町にあった旧名古屋藩士千賀家の屋敷跡地(現 中区栄一丁目)に移転しました。約5,700坪の敷地の西側にある表門を入れて南側が病院で外来診療棟1棟、奥に翼状の病棟3棟が並び、北側に医学校舎として教場、化学局、寄宿舎4棟などがありました。

1881年(明治14年)10月、公立医学校は、愛知医学校と改称しました。

写真の裏面には、「大日本愛知縣立愛知醫學校及愛知病院/表門ヲ距ルコト西方二十四間/位置ニ於テ寫影スルモノナリ 明治十七年十月」とあります。

めいじ ねん がくせい あいち いがっこう  
明治21年の学生(愛知医学校) 1888年

制服姿の愛知医学校六期生(1888年3月上旬)と、フロックコート(男性用礼装)を着た卒業生(1888年6月1日)の写真です。

2枚：モ/クロ：縦10.6-10.3cm×横14.1-15.0cm

後列

久野慶二  
加藤虎彦  
小野末鉄  
進藤玄敬  
太郎

前列

馬島六之丞  
清水元彌  
岩城貫三郎  
杉浦倉一  
天野亀彦



はかせらいめい きねん  
コッホ博士来名記念 1908年



1枚：モ/クロ：  
縦 35.3cm×横 42.3cm

結核菌、コレラ菌を発見したドイツの細菌学者ローベルト・コッホ(Heinrich Hermann Robert Koch 1843-1910)は、門下の北里紫三郎(1853-1931)の要請に依りて、1908年(明治41年)6月12日、夫人とともに来日、横浜に上陸し、8月24日まで滞在しました。観光目的でしたが、明治天皇(1852-1912)に拝謁し、各地で知事、市長、医師会などから歓迎を受け、日光から宮島、高松まで旅行しました。

この写真は、7月30日に、名古屋市中区南武平町(現 中区栄四丁目と五丁目の一部)の愛知県会議事堂の前で撮影されました。コッホ博士の左に北里、志賀潔(1871-1957)、北川乙次郎(1864-1922)、熊谷幸之輔(1857-1923)、川原汎(1858-1918)が並んでいます。

そつぎょう あいちけんりついがくせんもんがっこう  
卒業アルバム(愛知県立医学専門学校) 1910年

1910年(明治43年)3月、48名の学生が愛知県立医学専門学校を卒業しました。



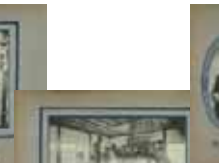
表紙

1冊：図版 42枚：  
縦 19cm×横 27cm

医聖ヒッポクラテス之像



愛知医学専門学校  
及病院正門



病理学実験室



小川教諭/  
奈良坂教諭/  
熊谷校長

ながよせんさい  
長與専齋 1891年頃



鶏卵紙写真1枚：  
モ/クロ：  
縦 10×横 7cm

長与専齋(1838-1902)は肥前国(現 長崎県)で代々、大村藩の漢方医であった家に生まれました。1854年(安政元年)緒方洪庵(1810-1863)の適塾に入り、1858年には福沢諭吉(1835-1901)に代わり塾頭となり、その後、長崎でオランダ軍医ポンペ(Pompe van Meerdervoort 1829-1908)に医学を学びました。1871年(明治4年)岩倉遣欧使節団に加わり、欧米の衛生事情を視察し、1873年文部省医務局長に就任し、後に、初代内務省衛生局長となり1891年(明治24年)まで在任し、衛生行政の確立に努めました。

いしくろただのり  
石黒忠恵(1845-1941)の紹介で、愛知医学校長兼愛知病院長であった後藤新平(1857-1929)を衛生局に採用し、1892年、衛生行政の後継者として後藤を衛生局長としました。

なかむらぼくよう な ゴ やちめいじんししょうぞういちらん めいじ ねんだいきょうしんかいきねん  
中村牧陽編『名古屋知名人士肖像一覽：明治四十三年大共進會紀念』 1910年

当地の製品を広く世間に知らしめ、モノづくりの発展に資することを目的として第10回関西府県連合共進会が1910年(明治43年)3月16日～6月13日、御器所村(現 鶴舞公園周辺)で開催されました。

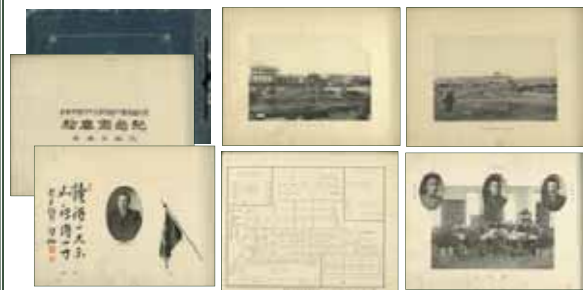
本書には、官公吏、神職、教育家、宗教家、医師、弁護士、実業家、書画家、風雅家らが収録されています。

愛知医学専門学校と愛知病院から、伊藤武文(皮膚病花柳病)、濱見津(眼科)、小川三之助(外科)、賀古桃次(眼科)、谷實抱(内科)、高橋傳吾(内科)、多田學三郎(小児科)、中村豊(耳鼻咽喉科)、中嶋潮造(眼科)、黒田三樹三(内科)、葛谷貞二(眼科)、熊谷幸之輔(外科)、楠太(皮膚花柳科)、舟木重次郎(産科婦人科)、寺倉文之助(外科)、青山理三郎(外科)、安間賢敏(外科)、佐々木中(外科)、北林貞道(神経精神科)、三原吉裕(小児科)、森田資孝(内科)、女性では、伊藤照(胃腸科小児科)が掲載されています。

268p：縦 20cm×横 28cm



あいちいがくせんもんがっこうだい かいそつぎょうせい きねんしゃしんちよう  
『愛知醫學専門學校第三十六回卒業生 紀念寫真帖』 1914年



1冊：図版80枚：縦24cm×横32cm

1914年(大正3年)に愛知県立医学専門学校を卒業した125名の学生(大三会)の卒業アルバムです。

愛知県立医学専門学校は、1914年3月に、名古屋市内の堀川の東、天王崎町(現 中区栄一丁目)から、現在の名古屋大学医学部の地、昭和区鶴舞町に移転しました。

あいちげんりついがくせんもんがっこうそつぎょうきねんかい だい かい  
『愛知縣立醫學専門學校卒業紀念帖』 第三十七回 1915年



1冊：図版21枚：縦27cm×横38cm

1915年(大正4年)、中華民国同窓生8名を含む123名の学生(ちるな会)が卒業しました。

この頃、ドイツ語を担当していたハーン(Friedrich Karl Arnold Hahn 1869-1941)は、ドイツのビーレフェルト(Bielefeld)市出身です。第八高等学校ドイツ語教諭を経て、1910年(明治43年)愛知県立医学専門学校に赴任しました。その後、1941年(昭和16年)、図書館で執務中に逝去され、

覺王山日泰寺に葬られました。藤源真亮(1883-?)は三重県出身で倫理学とドイツ語を担当、高塚二男三郎(1865-1924)は東京出身でドイツ語を担当しました。

ふじいせいえい  
藤井静英 1915年



1枚：モノクロ：縦36.8cm×横27.0cm

藤井静英(1881-1960)は、山口県熊毛郡の生まれです。第一高等学校を経て、1911年(明治44年)7月、東京帝国大学医科大学を卒業、同大学において、小児科学、衛生学、細菌学等を研究しました。1915年(大正4年)5月17日に愛知県立医学専門学校教諭に任ぜられ、児科学及び児科臨床実習授業担当となり、同年5月25日には愛知病院小児科部長も兼任しました。1922年に県立愛知医科大学教授、1927年11月に愛知医科大学長・同附属医院長となりました。

1931年5月に官立名古屋医科大学長・同附属医院長となりましたが、同年5月の官立移管に際しての教授人事により学内が紛糾し、その責任を負い、1932年1月に退官しました。退官後は、欧米留学の後、名古屋市内で小児科を開業しました。

やまざきまさただ  
山崎正董 1916年



1枚：モノクロ：縦29.5cm×横23.8cm

山崎正董(1872-1950)は、高知県高岡郡の生まれです。第三高等学校から第一高等学校を経て、1900年(明治33年)2月、東京帝国大学医科大学を卒業し、同大学の助手として産科婦人科教室に勤務しました。その後、熊本県立病院、私立熊本医学校を経て、1908年12月にドイツへの留学を命じられ、ミュンヘン大学、ボン大学で産科婦人科学及び病理学を研究し、1910年、帰国しました。

1916年7月17日に、熊谷幸之輔(1857-1923)の後任として、愛知県立医学専門学校校長兼教諭、同年8月22日に愛知病院長となり、1920年6月には、県立愛知医科大学長となりました。1926年2月19日退職し、熊本医科大学(熊本大学医学部の前身)の学長などを務めました。

たむらはるきち  
田村春吉 1916年



1枚：モノクロ

田村春吉(1883-1949)は、東京府京橋区(現 東京都中央区)に生まれました。第一高等学校第三部から東京帝国大学医科大学に進み、1910年(明治43年)12月に卒業後も皮膚科教室、病理学教室で副手、助手として研究を続けました。

1916年8月、愛知県立医学専門学校教諭として赴任し、愛知病院皮花科部長を命じられました。1932年、名古屋医科大学の学長に就任し、総合大学を創設することに尽力しました。1939年に名古屋帝国大学が創立されると、医学部長として、渋谷元治(1876-1975)総長を支え、戦後、1946年1月に第2代総長に就任しました。空襲で焼失したキャンパスの復興や代替施設の確保、農学部や文系学部の新設、新制大学への移行の準備など、多くの困難な事業をなしとげました。

さいとうまこと  
齋藤眞 1917年



1枚：モノクロ：縦31cm×横24cm

齋藤眞(1889-1950)は、宮城県に生まれ、東京帝国大学医科大学医学科を卒業し、1917年(大正6年)3月、愛知県立医学専門学校講師となりました。

1919年3月には30歳の若さで外科学講座の教授に就任し、1920年から4年間、ウィーン大学、ベルリン大学、パリ大学に留学し、帰国後、400余名の門下生を指導しました。齋藤は脳のレントゲン診断法の開発に特に精力をそそぎ、1924年には気脳撮影、1931年には脳血管撮影、1933年には神経撮影をいずれも日本で初めて行いました。

日本における脳神経外科学の開拓者であり、1948年(昭和23年)、日本脳神経外科研究会(日本脳神経外科学会の前身)を創設し、機関誌として『脳と神経』(1号は『脳及神経』)を創刊しました。

Nagoya University Medical Museum Small Exhibit  
卒業アルバム(愛知県立医学専門学校) 1918年

11683341

1918年(大正7年)、支那共和国江蘇省の2名を含む120名の学生(大七会)が卒業しました。



表紙



歴代の校長



山崎校長



恩師送別記念撮影

1冊：縦27cm×横38cm

Nagoya University Medical Museum Small Exhibit  
卒業アルバム(愛知県立医学専門学校) 1920年

11944768

1920年(大正9年)に卒業した76名の学生(久念会)の卒業アルバムです。



1冊：縦27cm×横39cm

Nagoya University Medical Museum Small Exhibit  
愛知県立医学専門学校『記念』 1919年

11457279

1919年(大正8年)5月に愛知県立医学専門学校を卒業した126名の学生(椎の葉会)の卒業アルバムです。

医学専門学校と愛知病院に留まって研究を続ける卒業生は、46名いました。

部活動として、野球、庭球、角力、弓術、剣道、柔道などの写真が掲載されています。



全景



前校長熊谷先生銅像



部活動

1冊：図版66枚：縦27cm×横38cm

Nagoya University Medical Museum Small Exhibit  
『記念寫眞帖：創立五拾週年昇格祝賀』 1920年

11878962

1871年(明治4年)旧暦8月9日、名古屋県は、名古屋藩評定所跡(現在の名古屋市中区丸の内三丁目)に仮病院を設け、その西側、本町通りを挟んで向かい側の名古屋町奉行所跡(丸の内二丁目)に仮医学校を設置しました。名古屋大学の前身です。

愛知県立医学専門学校は、当初、官立大学への移管と大学昇格を同時に行うことを目標としていましたが、文部省が受け入れなかったため、県立のまま大学昇格を実現するという方針に転換し、大学昇格を実現しました。

本書は、県立愛知医科大学が、創立50周年と愛知県立医学専門学校からの昇格を記念して発行したものです。



1冊：縦16cm×横22cm

Nagoya University Medical Museum Small Exhibit  
勝沼精藏 1919年

勝沼精藏(1886-1963)は、兵庫県神戸区(現 神戸市)に生まれました。

1919年(大正8年)、愛知県立医学専門学校の内科学教授になり、1923年には同校が昇格した愛知医科大学の教授(内科学)に就任しました。勝沼の血液学は高く評価され、39歳で帝国学士院賞を受賞しました。戦後、新制大学に移行してまもなく、1949年7月、名古屋大学の第3代総長に就任し、1954年には文化勲章を受章しました。

1967年に名古屋で開催された第17回日本医学会総会の会頭に決定していましたが、1963年11月9日に愛知県文化講堂における記念講演中に、突然意識を失って倒れ、翌10日に急逝しました。



1枚：モノクロ：縦31cm×横24cm

Nagoya University Medical Museum Small Exhibit  
戸荻近太郎 1920年

戸荻近太郎(1896-1977)は、1896年(明治29年)8月1日、愛知県豊川市大崎町に生まれ、1920年(大正9年)、愛知県立医学専門学校を卒業し、解剖学教室で研究に従事、ドイツのハレ大学に留学、1932年(昭和7年)3月、名古屋医科大学第2解剖学の教授となりました。

1946年2月、名古屋帝国大学医学部長に選出され、戦災により灰燼に帰した医学部の再建に尽力しました。

著書として、『組織標本製作技術』(1939年)、『組織学』(1954年)などがあります。



1枚：モノクロ：縦30cm×横25cm



## レオノール ミハエリス 1924年

1枚：モノクロ  
縦 26cm × 横 31cm

レオノール ミハエリス (Leonor Michaelis 1875-1949) は、ドイツの生化学者、医師です。酵素反応速度論に関するモード・メンテン (Maud Leonora Menten 1879-1960) との共同研究によるミハエリス・メンテン式を確立しました。1922年 (大正11年) 12月1日、愛知医科大学講師を嘱託され、医化学教室の主任教授となり、1926年3月31日、講師の嘱託を解かれました。この写真は、1924年9月21日、フライブルク大学の病理学者アショフ教授 (Karl Albert Ludwig Aschoff 1866-1942) が本学を訪れた時に撮影したものです。前列左から、新潟医科大学のグレッフ (Siegfried Gräff 1887-1966 アショフの娘婿)、林直助 (1871-1953)、アショフ、山崎正重学長 (1872-1950)、ミハエリス、酒井繁 (1885-1929)、齋藤真 (1889-1950)。後列左から、大島福造 (1894-1977)、加藤竹男 (1887-?)、江口孝雄 (1897-?)、三原吉裕です。

## 戸谷章 編輯『中部日本紳士録』 1927年

1冊：  
縦 16cm × 横 23cm

名古屋市西区深井町にあった関西新聞社が発行した紳士録です。県立愛知医科大学から、学長 小口忠太、教授として酒井繁 (内科)、林玄之助 (薬物学)、八木沢文吾 (耳鼻咽喉科)、桐原眞一 (外科学)、北林貞道 (神経精神科)、林直助 (病理学)、勝沼精蔵 (内科学)、田村春吉 (皮膚科泌尿器科)、藤井静英 (小児科)、大庭士郎 (細菌学)、佐藤亀一 (解剖学)、浅井猛郎 (解剖学)、北村一郎 (歯科学)、助教授として、大島福造 (病理学)、中島実 (眼科学)、林亨 (内科兼胃腸科主任)、講師として、大木常松 (産科婦人科学)、附属医院薬局長として、柳沢秀吉らが掲載されています。

## 杉田直樹 1931年

1枚：モノクロ  
縦 37cm × 横 27cm

杉田直樹 (1887-1949) は、1887年 (明治20年) 9月3日、東京市に生まれ、1912年 (大正元年)、東京帝国大学医科大学医学科を卒業し、同大学精神病学教室副手、医学部講師、東京府立松沢病院副院長などを経て、1931年 (昭和6年) 5月、名古屋医科大学精神医学教授となりました。1937年4月、九仁会を組織し、ハ事少年寮を私費で開設しました。

独、仏、奥に留学し、脳の形態学を研究、統合失調症の間脳障害説を提唱しました。

11935815

## 『名古屋醫科大學第二期卒業記念アルバム』 1933年



大学全景

田村学長

1冊：縦 32cm × 横 25cm

1933年 (昭和8年) に官立名古屋医科大学を卒業した97名の学生 (昭ハ会) の卒業アルバムです。

1933年1月、名古屋医科大学の学生 青木文次 (1908-1938) ら9名が「思想問題」で検挙されました。青木は昭ハ会です。

同年1月、東京商科大学教授の大塚金之助 (1892-1977)、元京都帝国大学教授の河上肇 (1879-1946) が検挙され、2月には、作家小林多喜二 (1903-1933) が治安維持法違反容疑で逮捕され、東京 築地署に留置され特別高等警察の拷問により虐殺されました。4月には、京都帝国大学で滝川事件が起こりました。

## 三輪誠 1933年

1枚：モノクロ  
縦 37cm × 横 27cm

三輪誠 (1889-1946) は、1889年 (明治22年) 1月11日、愛知県海部郡に生まれ、1910年、第三高等学校第三部を卒業、1914年 (大正3年)、東京帝国大学医科大学医学科を卒業し、薬物学教室での研究従事、東京帝国大学医科大学助手、北海道帝国大学教授などを経て、1933年 (昭和8年) 12月、名古屋医科大学薬理学教授に就任しました。

血液瓦斯分析装置による実験方法の改良、動物実験用自動血圧調節装置の製作指導と臓器流血量調節法を考案し、研究方法の改良、薬物の直接間接作用の分離に成果をあげた。

11367573

## 『卒業記念 名古屋醫科大學』 1934年



1冊：図版 69枚：縦 41cm × 横 30cm

1934年 (昭和9年) 3月、88名の学生 (名三会) が官立名古屋医科大学を卒業しました。

野砲第三連隊見学、電信隊見学、衛生施設見学 (名古屋市立屠殺場)、田中隆三文相訓示 (官立移管祝賀式)、愛知医科大学最後の記念祭、査閲 (ハ事本学グラウンド)、松茸狩 (栗栖山)、解剖祭追悼会 (覚王山日泰寺) などの写真が掲載されています。

この年、満州国で愛新覚羅 溥儀 (1906-1967) が皇帝となりました。

## 『卒業記念 名古屋医科大学』 1935年

1935年(昭和10年)に卒業した95名の学生(昭十会)の卒業アルバムです。

1934年と35年に大学歌の募集があり、予科教授

であった石田元季(1877-1943)の補正を得て、1935年に「名古屋医科大学の歌」が決定しました。

「東海<sup>あ</sup>の天<sup>てん</sup>明け初めて 雲<sup>くも</sup>紫<sup>むらさき</sup>にほふ時<sup>とき</sup>  
 久遠<sup>くおん</sup>の生命<sup>いのち</sup>限りなき 力<sup>ちから</sup>に萌<sup>も</sup>えて照<sup>て</sup>り徹<sup>とと</sup>る  
 地上<sup>ひかり</sup>の光華<sup>こうか</sup>集めつつ 高<sup>たか</sup>く大<sup>おほ</sup>きく繋<sup>つな</sup>りては  
 み空<sup>くら</sup>に揺<sup>ゆ</sup>ぐ深<sup>ふか</sup>みどり 杏<sup>きょう</sup>林<sup>りん</sup>永<sup>と</sup>劫<sup>わ</sup>の栄<sup>えい</sup>あれ」

1冊：縦40cm×横30cm

## 『名古屋医科大学第六期卒業生アルバム』 1937年

1937年(昭和12年)3月、65名の学生(克有会)が卒業しました。

県立愛知医科大学は、1931年(昭和6年)に国へ移管され官立名古屋医科大学となりました。1939年(昭和14年)には名古屋帝国大学が創設され、官立名古屋医科大学は名古屋帝国大学医学部へ改組されました。

名古屋医科大学第六期生が在学していた1933年-37年には、二・二六事件が起こるなど、軍部が発言力を強化していった時代でした。1937年7月7日に盧溝橋事件が起こり、これが発端となり日本と中国との間に、全面的な日中戦争が始まりました。

1冊：縦31cm×横24cm

## 『名医大第七回卒業記念』 1938年

1938年(昭和13年)に官立名古屋医科大学を卒業した81名の学生(昭和十三年会)の卒業アルバムです。

1920年に大学令に基づき改称された県立愛知医科大学は、1931年に国へ移管され官立名古屋医科大学となり、1939年には名古屋帝国大学が創設され、名古屋医科大学は名古屋帝国大学医学部へと改組されました。

1冊：縦37cm×横30cm

## 『名古屋医科大学 第八回卒業記念』 1939年(皇紀2599年)

1939年(昭和14年)、77名の学生(十四年会)が卒業しました。

表紙に“Erinnerung an unser Studentezeit”(私たちの学生時代の記憶)と2599(皇紀)、タイトルページに2599とあります。皇紀(神武天皇即位紀元)は、日本書紀の記述により、初代天皇である神武天皇が即位したとされる年を元年とする日本の紀年法です。部活動(射撃部、柔剣道部、馬術部など)勤労奉仕、陸軍病院慰問などの写真が掲載されています。

この年、厚生省は「結婚十訓」を発表し、「産めよ殖やせよ国のため」の標語を掲げました。

1冊：縦37cm×横31cm

## 名古屋帝国大学臨時附属醫學専門部『入学生徒写真』 1939年～1944年

1931年(昭和6年)の満州事変、1937年の日中戦争と戦争が拡大していくにつれて、軍医として召集される医師が増えて、医師不足が顕著となります。陸軍省などの要請により、医師の増員養成が国防上、国民医療上急務とされ、1939年5月に、帝国大学7校、官立医科大学6校(新潟、岡山、千葉、金沢、長崎、熊本)に修業年限を4年(1947年時点の在学学生は5年)とする臨時附属医学専門部が設置されました。入学資格は、旧制中学校卒業生並に同等以上の資格の者でした。さらに1943年以降には、女子医専など、各地に医学専門学校が設置されました。

名古屋帝国大学臨時附属医学専門部には1939年に78名が入学しますが、1941年の太平洋戦争の開戦により、繰り上げで半年早い1942年9月に65名が卒業し、10月にはそれぞれ軍務に就きました。1946年度に新入生の募集を停止しました。

6枚：  
縦38～46cm  
×横30～32cm

## 『名古屋帝国大学 昭和18年卒業アルバム』 1943年

1943年(昭和18年)に名古屋帝国大学医学部を卒業した76名の学生(十八会、病気のため卒業の遅れた3名を含む)の卒業アルバムです。

軍事教練を行った高師カ原練兵場は、豊橋南部にあった陸軍演習場です。この年の2月、陸軍省は、「撃ちて止まむ」というポスターを配布し、4月、海軍大将(たかし はら)の山本五十六(1884-1943)は、ソロモン諸島ブーゲンビル島上空で戦死しました。

2冊：各10枚：縦33cm×横43cm



## 『名古屋帝国大学医学部アルバム』 1944年

1944年(昭和19年)に名古屋帝国大学医学部を卒業した79名の学生(甲申会)の卒業アルバムです。

1886年(明治19年)に公布された帝国大学令による7番目の帝国大学として、1939年4月1日に名古屋帝国大学は設立されました。創設当初は、医学部と理工学部の2学部のみでした。

1925年、「陸軍現役将校学校配属令」の公布により、中等学校以上の学校に現役将校が配属され、軍事教練が開始されました。「この制度は、学生に対する思想対策の施策であるとともに、戦時における予備役将校の確保と、軍縮によって余剰となった将校の温存とを目的として」[『日本大百科全書』による]いました。

1冊：縦 38cm×横 28cm

## 空襲で灰塵に帰した鶴舞キャンパス 1945年

1945年(昭和20年)3月12日の空襲で、医学部及び附属医院の木造建物は大部分を焼失し、3月19日の再度の空襲により病院の建物4棟を失い、3月25日の3度目の空襲では残存建物のガラス窓に大被害を受け、戦前の建物の62%以上を焼失しました。図書館は鉄筋コンクリート造りであったため、焼失を免れました。『五十年間の回顧』によると、「本学内においては殆ど死傷者は無かった」とのことです。

教室を焼失した診療各科並びに基礎教室の一部は外来診療所に、また基礎医学教室の大部分は、市内千種区城山町の昭和塾堂や血清製造所を愛知県から借り受けて分散し、かろうじて教育、研究を続行しました。

1枚：モノクロ：  
縦 11.0cm×横 15.6cm

## 病院庶務掛『大東亜戦争戦災記念写真』 1945年

2015年(平成27年)5月8日に、医学部の事務室内で資料を整理中に見つかり、医学部史料室に寄贈されました。

(1) 勝沼精蔵(1886-1963)、山元昌之(1904-1994)『秘 病院防空 -戦跡と戦訓-』(1945年4月3日稿)、(2) 1965年に整理された1945年3月12日、19日、25日の空襲により被災した建物と焼夷弾などの写真、(3) 1959年に集められた南京政府主席の汪兆銘(1883-1944)が1944年3月に名古屋帝国大学医学部附属医院に極秘入院した後に、死亡を知らせる掲示と主治医団(勝沼精蔵、齋藤眞ほか)の写真などが綴られています。

1冊：モノクロ：  
縦 27cm×横 20cm

## アルバム 空襲による被災と応急復旧 1945~1950年頃

鶴舞キャンパスは、1945年(昭和20年)3月、3回にわたる空襲により、基礎医学教室、臨床医学教室、医院など62%以上に及ぶ建物を焼失しました。戦後は、焼け残った基礎教室の一部や外来診療所に集結し、さらに千種区城山町の昭和塾堂(現 愛知学院大学大学院)を借用し、基礎医学系教室を移転し、医学部及び専門部の第1、第2学年の授業を開始しました。

学友会の復興後援会が1947年から50年までに集めた寄附金の内、782万円を費やして木造モルタル塗りの研究室、講義室が建設されました。

1冊：モノクロ：縦 34cm×横 29cm

## 6. 医療器具

## 経絡人形 江戸時代

経絡人形は、経絡(経は動脈、絡は静脈)・経穴(つぼ)を書き込んだ人体模型です。11世紀頃、中国で銅製の模型として鑄造され、日本では、江戸中期から紙や木で作られ、漢方医学に利用されました。銅人形とも呼ばれています。

この人形は、1981年(昭和56年)9月、解剖学教室図書室の整理移転を行った際、発見されました。1982年3月20日に解剖学教授 酒井恒(1928-2008)が、日本医史学会事務局(東京)に持参し、鑑定を受けました。小川鼎三(1901-1984)と酒井シヅ(1935-)によると、由来は不詳であるが江戸時代の作であろうとのことでした。さらに経絡を書き込む以前の人形ですが、経絡が記入されていないことは珍しいとされます。

(台座とも)  
高さ 73cm

## 箱飾 江戸後期

箱形で、専用の飾を用いて、蓋をする事で、中の粉薬が外へ飛び散らないようにしました。この箱飾は薬屋が使用していたものです。

縦 26cm×横 57cm×高さ 26cm

おけ  
桶 江戸後期



薬屋が粉薬を混ぜるときに使っていた桶です。  
ます へら こて さじ はかり  
升、筥、鏝、匙、秤などを使います。

幅 34cm × 高さ 24cm

くすりだんす  
薬箆筥 江戸後期



漢方医や薬屋が、薬種を整理して保管する小さな引き出しがたくさんある箆筥です。

小引き出しが数多くあることから百味箆筥、薬味箆筥などとも呼ばれています。

(大) 大きさ: 奥行 23cm × 幅 88cm × 高さ 78cm  
引き出しの数: 小 54、中 8、大 2

(小) 大きさ: 奥行 20cm × 幅 48cm × 高さ 25cm  
引き出しの数: 小 18

さおばかり  
棹秤 明治初期



専用の瓢箪型の入れ物の中に、棹と皿と錘とが収納されています。

棹秤、皿秤、あるいは元は銀を量るときに使った秤であったことから銀秤とも言われています。少量の物をはかるのに便利なことから漢方医や薬屋が、薬の調合に使用していました。

(入れ物の大きさ) 長さ 26cm × 幅 9cm

やげん  
薬研 明治初期



薬研は、漢方医や薬屋が、生薬を粉末にするのに用いる、木、石、金属などで作られた器具です。

細長い舟形で、中央がV字形にくぼんだ臼と、中央に四角い穴が開いた円盤と、その円盤に通した軸からなります。

臼の中に生薬を入れて、軸を両手でつかみ、円盤を前後に回転させ、押し砕いて粉末にします。

(台座とも) 縦 33cm × 横 37cm × 高さ 25cm

な ら やかげん いちろう  
奈良坂源一郎作成 プレパレート見本 1890年代



2箱: 奥行 11~12cm  
× 幅 19cm × 高さ 16cm

奈良坂源一郎(1854-1934)は、<sup>むつのくにものうぐんたかきむらおおあざやもと</sup>陸奥国桃生郡鷹来村大字矢本(現 宮城県東松島市矢本)に仙台藩士の子として生まれました。子供のころに肩を損傷して右腕がほとんど使えなかったため、臨床ではなく基礎医学の解剖学に専心しました。後藤新平(1857-1929)に招かれ、1881年(明治14年)、愛知医学校の解剖学、生理学、組織学の一等教諭として赴任、40年間、教鞭をとりました。

奈良坂は、全国に先駆けて、1892年に、児童生徒に対する実物教育を主な目的として、愛知教育博物館を開館しました。

しゅとうようぐ いっしき  
種痘用具一式 1900年頃



箱の大きさ: 長さ 10cm × 幅 5cm × 高さ 3cm

明治中期と推定される牛痘接種用具一式です。牛痘は牛がかかる痘瘡で、牛痘ウイルスは人間にも感染しますが、軽症で済み、人間の痘瘡への免疫をも獲得するので種痘に利用されました。

<sup>いどうけいすけ</sup>奥医師見習であった伊藤圭介(1803-1901)は、<sup>ながはら しゅんりゅう</sup>京都の長柄春龍より種痘法を学んだ<sup>すず きようぞう</sup>尾張の鈴木容蔵(1811-1870)とともに、1852年(嘉永5年)に、名古屋城近くの大津町(現中区錦三丁目)に種痘所を設け、種痘の導入・普及に努めました。圭介は、1868年(明治初年)、自らが主宰していたこの種痘所を中心にして洋医学校の設立を名古屋藩に建議し、これにより、1871年(明治4年)、藩の元評定所跡に初めて医学校が創設されました。



やくろう  
**薬籠 明治中期**



薬籠は薬箱です。古来、医家の座右にあって、草根木皮や動物由来の原料、鉱物などを薬研で細かくしたり、煎じて作った薬を数10種類入れて、往診の際に、弟子に持たせて出先で薬を調合しました。

薬袋が付いています。

これは明治中期の比較的新しいものと推定されます。

奥行 18cm × 幅 24cm × 高さ 19cm

でんき しりよく  
**電気視力計 昭和初期**



奥行 23cm × 幅 40cm  
× 高さ 83cm

伊藤信次が考案した電気を利用した視力計で、東京市本郷区(現東京都文京区本郷春木町)の半田屋医療器械部(現 はんだや)が製作し、販売しました。

伊藤信次は、1906年(明治39年)5月に愛知県立医学専門学校を卒業し、『実験的網膜視神経結核』により、1926年(大正15年)3月に、京都帝国大学から博士(医学)が授与されました。

この視力計は、愛知県西春日井郡豊山町で安藤眼科院を開業していた安藤兼市(兼一)が使用していたものです。安藤眼科院は、豊山町で唯一の病院であったため、眼科以外の診療も行っていました。

じんたいはっかんてんびん  
**人体発汗天秤 昭和初期**



奥行 79cm × 幅 85cm  
× 高さ 121cm

く の やす  
久野寧(1882-1977)が発汗を定量的に測定する目的で作製しました。久野は、名古屋の生まれで、1903年(明治36年)12月に愛知県立医学専門学校を卒業、1911年から、南満医学堂(後に満州医科大学)教授として、人体発汗の生理学を体系付け、その後、1935年に京都大学、1937年に官立名古屋医科大学に転じた後も、発汗室、発汗量測定のための人体天秤、換気カプセル法の考案など、世界で初めてヒトの汗の本格的な研究を行いました。

1941年に帝国学士院恩賜賞を受賞、1955年1月に定年退職、1963年に文化勲章を受章しました。

けんびきょう しょうわごう  
**顕微鏡 昭和号GK 1927年**



1927年(昭和2年)に発売されたオリンパス製生物顕微鏡「昭和号GK」です。

当時、ドイツなどの外国製の顕微鏡は、高品質ですが値段が高かったため、一般の研究者や医師が購入できる、実用的で価格が安く、品質の良い顕微鏡として、岩崎顕微鏡の協力のもとに開発されました。倍率1500倍は、当時の国産油浸系顕微鏡としては最高でした。

高さ 30cm  
箱の大きさ：奥行 20cm × 幅 20cm × 高さ 36cm

きりはらしきなんせい い きょう  
**桐原式軟性胃鏡 1937年**



箱：長さ 88cm × 幅 11cm × 高さ 8cm  
胃鏡の長さ：82.2cm

名古屋医科大学の桐原真一教授(1889-1949)は、1932年(昭和7年)にエルスナー式とシンドラー式の硬性胃鏡を購入し、42名の患者の胃内観察をしました。さらに、翌年にはウォルフ(Georg Wolf 1873-1938)とシンドラー(Rudolf Schindler 1888-1968)による軟性胃鏡を改良し、器械技師 武井勝に依頼して、1937年2月に桐原式軟性胃鏡を完成しました。武井は武井医科光器製作所(1917年創業)の創業者です。

先端が手元の操作により前方に屈曲できる胃鏡で、桐原は、この胃鏡を使って600回余りも人体の胃内観察を行い、武井の協力のもとに、胃内の写真撮影を試みました。

ぐん いけいたいのう えいせいざいりょう  
**軍医携帯囊の衛生材料 1940年代前半**



おおもむらあきら  
軍医 大村 明(1911-1990?)が携帯していた衛生材料です。

大村明は、福岡県出身で、1938年に名古屋医科大学を卒業後、勝沼精藏(1886-1963)の内科学教室の副手、陸軍軍医候補生となり、後に、満州の掖河陸軍病院に勤務しました。

軍医携帯囊には、野外で救急処置を施すのに必要な衛生材料が入っています。消毒用アルコール入れ、薬剤(ヨード丁幾、硼酸錠、阿片錠、昇汞錠(塩化水銀 消毒液用)など)、滅菌ガーゼ包、耳鏡などです。ホウ酸錠と滅菌ガーゼ包には、「陸軍衛生材料廠」と書かれています。

Nagoya University Medical Museum Small Exhibit

11723868

たきなみとなん そしきがくだいに かくぶつがく せいやくがくほんべん せいやくがく  
 瀧浪圖南『組織學第二. 格物學. 製藥學本篇. 製藥學』 1878年

瀧浪図南(1852 ?-1902)は、佐渡国相川町(現 新潟県佐渡市)の生れです。

1872年(明治5年)東京へ出て、経史を学び、また司馬<sup>し ばりょうかい</sup>凌海(1839-1879)に入門しドイツ学および英学を修めました。1876年、司馬が愛知県に赴任するのに従って名古屋に移り、公立医学講習場掛に申し付けられ、公務の余暇は、司馬およびローレツ(Albrecht von Roretz 1846-1884)に医学を学びました。その後、公立医学校三等授業生、二等訓導、一等訓導、教諭心得、一等助教諭等を歴任し、1889年12月に教諭となりました。物理学、生理学、断診医学、衛生学等の授業を担当し、また、編輯係、副監事、教務部長等を兼務して、『院校報告』の編集などに尽力しました。在職27年、1902年8月、急性肋膜炎にかかり療養中のところ、同年11月に逝去しました。本書は、瀧浪の口述を筆記したものです。

1冊：挿図：20cm

Nagoya University Medical Museum Small Exhibit

41373617

ベルツ “Vortraege der speciellen Pathologie gehalten in den medicinischen Academie zu Tokio” 1879年

東京大学医学部のドイツ人教師ベルツ(Erwin von Baelz 1849-1913)による病理学各論の教科書です。手書きであり、標題紙には、「陸前奈良阪源式郎図書之印」と、「大正14年1月奈良坂源一郎氏寄贈」の印があります。

ベルツは、1876年(明治9年)、ライプツィヒ大学講師の時に、東京医学校に招かれ、最初、生理学と薬理学を担当し、その後、内科学、病理学などを教えました。

ベルツの主著は、“Lehrbuch der inneren Medicin mit besonderer Rücksicht auf Japan bearbeit” Bd. 1-3(1900-1901)です。日本の医師のために、日本での経験をもとに臨床に必要な知識を書きました。

1冊：縦21cm×横17cm

Nagoya University Medical Museum Small Exhibit

40000558

ベルツ “Vorträge der spec. Pathologie und Therapie” 1880年

東京大学医学部で、川原汎<sup>かわはらひろし</sup>(1858-1918)が受講したドイツ人教師ベルツ(Erwin von Baelz 1849-1913)による内科学各論と治療の教科書です。「川原汎図書印」と、川原自筆の書き込みが随所にあります。

ベルツは、南ドイツのビーティヒハイム(Bietigheim)に生まれ、1866年チュービンゲン大学で医学を修め、ライプツィヒ大学で臨床を学びました。1876年(明治9年)、ライプツィヒ大学講師の時に、東京医学校に招かれ、最初、生理学と薬理学を担当し、その後、内科学、病理学などを教えました。1902年(明治35年)の退官まで、日本の医学、人類学の成立、発展に貢献し、『ベルツの日記』を残しました。

iv, 128, 106, 39 p. :  
縦 24cm × 横 17cm

Nagoya University Medical Museum Small Exhibit

40016715

シュルツェ “Vortraege der allgemeine Chirurgie” 1880年

東京大学医学部で、川原汎<sup>かわはらひろし</sup>(1858-1918)が受講したドイツ人教師シュルツェ(Emil August Wilhelm Schultze 1840-1924)による外科総論の講義録です。「川原汎図書印」と、川原自筆の書き込みが随所にあります。

川原は、肥前国大村木場郷<sup>ひぜんのくにのおむらこば郷</sup>(現 長崎県大村市木場)の生まれで、藩校五教館で初等教育を受けました。1871年(明治4年)に、藩費留学生として長崎医学校(長崎大学医学部の前身)に入学しました。長崎医学校は廃校となり、試験により優秀な学生は東京医学校(東京大学医学部の前身)に転校となりました。川原は、当時予科が併設されていた東京医学校に編入されたようです。

22, 76, 69, 39,  
[64]p. :  
縦 24 cm × 横 17cm

Nagoya University Medical Museum Small Exhibit

40016708

ベルツ “Vortraege der allgemeinen Pathologie” 1881年

東京大学医学部で、川原汎<sup>かわはらひろし</sup>(1858-1918)が受講したドイツ人教師ベルツ(Erwin von Baelz 1849-1913)による病理学総論の講義録です。標題紙には、「川原汎図書印」があります。

ベルツは、南ドイツのビーティヒハイム(Bietigheim)に生まれ、1866年チュービンゲン大学で医学を修め、ライプツィヒ大学で臨床を学びました。1876年(明治9年)、ライプツィヒ大学講師の時に、東京医学校に招かれ、最初、生理学と薬理学を担当し、その後、内科学、病理学などを教えました。1902年(明治35年)の退官まで、日本の医学、人類学の成立、発展に貢献し、『ベルツの日記』を残しました。

80, 24, 29p. :  
縦 23 cm × 横 17cm

Nagoya University Medical Museum Small Exhibit

40000569

シュルツェ “Vortraege der speciell. Chirurgie” 1881年

東京大学医学部で、川原汎<sup>かわはらひろし</sup>(1858-1918)が受講したドイツ人教師シュルツェ(Emil August Wilhelm Schultze 1840-1924)による外科各論の講義録です。「川原汎図書印」と、川原自筆の書き込みが随所にあります。

シュルツェは、ベルリンに生まれ、1863年にベルリンのフリードリッヒ・ヴィルヘルム医学校を卒業し、陸軍軍医となりました。普仏戦争(1870~71)に従軍後、ロンドンへ行き、1872年に帰国すると、リスター(Joseph Lister 1827-1912)から学んだ消毒法をドイツに導入しました。1874年(明治7年)、ミュラー(Benjamin Carl Leopold Müller 1824-1893)の後任として、東京医学校の教師となりました。外科学を主にして、外科臨床講義の他、眼科学も担当し、また、わが国にリスター法を紹介しました。一時帰国をはさみ7年間に在職し、1881年に帰国しました。

389 p. :  
縦 24 cm × 横 16cm





36, 330, 23 p. :  
縦 25 cm × 横 17cm

Nagoya University Medical Museum Small Exhibit

40018847

# シュルツェ“Vortraege der speciellen Chirurgie” 1881年

東京大学医学部で、奈良坂源一郎(1854-1934)が受講したドイツ人教師シュルツェ(Emil August Wilhelm Schultze 1840-1924)による外科各論の講義録です。奈良坂自筆の書き込みがあります。標題紙には手書きで『シルゼ氏外科総論講義』とありますが、『各論』です。「陸前奈良阪源式郎図書之印」と、「明治37年10月29日奈良坂源一郎君寄贈」の印があります。

シュルツェは、1874年(明治7年)年、ミュラー(Benjamin Karl Leopold Müller 1822 ?-1893)の後任として、東京医学校の教師となり、外科学を主にして、外科臨床講義の他、眼科学も担当し、わが国にリスター法を紹介しました。一時帰国をはさみ7年間在職し、1881年帰国しました。



2冊：縦 20 cm × 横 14cm

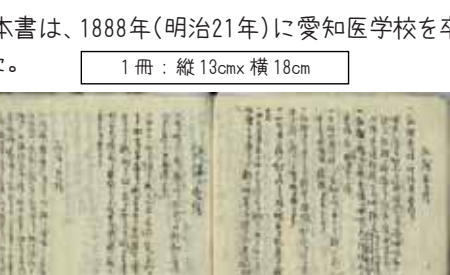
Nagoya University Medical Museum Small Exhibit

11429003-04

# 熊谷幸之輔『外科各論』上・下 1886～1887年

熊谷幸之輔(1857-1923)は、出羽国仙北郡六郷(現 秋田県仙北郡美郷町)出身です。1881年(明治14年)、愛知医学校の後藤新平(1857-1929)校長から同校の将来を担う人材として期待され、一等教諭として名古屋に赴任しました。当時の医学士はきわめて貴重な存在で、その給与は後藤新平校長をはるかに上まわっていました。その後、愛知医学校や愛知県立医学専門学校などの校長を33年間にわたって務めました。

本書は、頭部、顔面、耳科、口科、頸部、胸部、上肢、下肢などの諸病を講述したもので、板倉與五郎(1865-1937)が筆記しました。



1冊：縦 13cmx 横 18cm

Nagoya University Medical Museum Small Exhibit

11429006

# 『初生児感覚機能発育/実験的研究』 1887年頃

講義者は不明です。

本書は、1888年(明治21年)に愛知医学校を卒業した板倉與五郎(1865-1937)が筆記しました。

内容は、光の感覚、瞳孔、色感、咽喉の運動、睨視の方向、遠近を視る、聴感聴覚、触感触覚、味感、嗅感、快の感情、不快の感情、飢餓感情、飽満の感情、疲労の感情、恐怖の感情、驚駭の感情、衝動性運動、反射運動、天性的運動、握握などです。



5枚：縦 25cm × 横 17cm

Nagoya University Medical Museum Small Exhibit

11429007

# 板倉與五郎筆記『虎列刺：亜細亜虎列刺、亜細亜霍乱、印度コレラ』 1887年頃

愛知医学校時代の講義ノートです。講義者は不明です。板倉與五郎(1865-1937)は、三河国西加茂郡挙母村(現 豊田市挙母町)に生まれました。生家は代々挙母藩の要職にありましたが、父の勧めで医者を目指しました。

碧海郡鷺塚村(現 碧南市鷺塚町)には、近藤坦平(1844-1929)が開いた洋々医館に併設した西洋医学校 蜜蜂義塾がありました。板倉は、1879年(明治12年)に数え15歳で入塾し、一般教科と基礎医学を学びました。1884年、県立の甲種医学校で、卒業と同時に医師免許がもらえた愛知医学校に移り、1888年に卒業し、郷里の挙母で開業しました。



1冊：縦 21cm × 横 15cm

Nagoya University Medical Museum Small Exhibit

11429005

# 川原汎『内科学神経篇通論 全』 1887年

川原汎(1858-1918)は、長崎県出身です。鈴木孝之助教諭の後任として、1883年(明治16年)、愛知医学校一等教諭として赴任し、内科医長を兼務しました。

内科学、察病学、衛生学、精神病学等の授業を担当し、愛知病院外科副医長を兼務しました。

英独仏の3か国語に通曉し、『精神病学提綱』、『内科彙講 神経系統篇』、『衛生学綱目』等の著書があります。

本書は、病理各論、神経系諸病篇(第一通説)と附録(唾嚙)から構成され、1887年後学期に、川原の講義を、1888年に愛知医学校を卒業した板倉與五郎(1865-1937)が筆記しました。



4冊：縦 19cm × 横 13cm

Nagoya University Medical Museum Small Exhibit

11089881-84

# 藤本理『里氏化学書』 1890年頃

藤本理は、愛知県出身です。1879年(明治12年)、東京大学を卒業した製薬士です。1885年愛知医学校二等教諭として赴任し、化学、物理学、植物学等の授業を担当し、1886年愛知病院薬局長を命ぜられ、また、薬舗開業試験委員を委嘱されました。1889年に退職しました。

本書は、リヒテル(Victor von Richter 1841-1891)の原著を講義したもので、(第一分冊)無機化学非金属編(甲)、(第二分冊)同(乙)、(第三分冊)無機化学金属編、(第四分冊)有機化学又炭素化合物化学からなります。第一、二分冊は筆記後、謄写、第三、四分冊は、1892年12月に愛知医学校を卒業した大川臺一郎(親直)が筆耕しました。



99丁：縦24cm×横17cm

すずきこうのすけ いんどうげんとく しよほうがく

**鈴木孝之助・印東玄得『處方學』 1890年**

鈴木孝之助(1854-1945)は、愛知県田原の出身です。1880年(明治13年)、東京大学医学部卒業後、公立医学校教師となり、後に愛知県立医学校校長となりました。

東京大学卒業の医学士を採用したのは、この時が最初です。それまでは外国人教師を採用していたのですが、高給のため数名しか採用できず、各専門科目の教授が徹底しないという問題を、後藤新平校長の判断で改善したのです。

印東玄得(1850-1895)は、1881年に、わが国最初の生命保険会社明治生命の設立にかかわり、その保険医となりました。

1892年12月に愛知医学校を卒業した大川臺一郎(親直)が謄写しました。



ほりうちとくぞう ほうい がく

**堀内篤蔵『法医学』 1891年頃**

堀内篤蔵(?-1919)は、京都府出身です。1889年(明治22年)、愛知病院の婦嬰科の新設に伴い、愛知医学校教諭に任命され、愛知病院副医長を兼務しました。婦人科学、産科学、小児病学を担当し、婦嬰科長として、同科の創設に貢献しました。

巻頭に「片山国嘉氏(1855-1931)著述『法医学提綱』に拠る」とあります。

堀内が講述し、1892年12月に愛知医学校を卒業した大川臺一郎(親直)が筆記しました。



42, 74丁：縦24cm×横16cm

ほりうちとくぞう さんかがく

**堀内篤蔵『産科学』 1891年頃**

堀内篤蔵(?-1919)は、京都府出身です。1889年(明治22年)、愛知病院の婦嬰科の新設に伴い、愛知医学校教諭に任命され、愛知病院副医長を兼務しました。婦人科学、産科学、小児病学を担当し、婦嬰科長として、同科の創設に貢献しました。

この講義録は、誘導編、分娩生理編、産褥生理編、妊婦の病理及療法、分娩の病理及療法、産褥の病理及療法の6編で構成されています。



121丁：縦24cm×横16cm

堀内の講述を、1892年12月に愛知医学校を卒業した大川臺一郎(親直)が筆記しました。

くまがいこうのすけ げ か かくろん

**熊谷幸之輔『外科論』 1891年**

熊谷幸之輔(1857-1923)は、出羽国仙北郡六郷(現 秋田県仙北郡美郷町)出身です。1881年(明治14年)、愛知医学校の後藤新平(1857-1929)校長から同校の将来を担う人材として期待され、一等教諭として名古屋に赴任しました。当時の医学士はぎわめて貴重な存在で、その給与は後藤新平校長をはるかに上まわっていました。その後、愛知医学校や愛知県立医学専門学校などの校長を33年間にわたって務めました。

本書は、熊谷の講述を、1892年12月に愛知医学校を卒業した大川臺一郎(親直)が筆記しました。



5冊：縦24cm×横16-17cm

はなふさどうじゆん げ か つうろん

**花房道純『外科通論』 1891年頃**

この講義録の内容は、(第一分冊)巻の一は、総論、炎病、膿腫、触診、波動検査法、防腐繃帯など、巻の二は、外傷論創傷論、刺創、挫創、銃創、毒創、火傷、凍傷、象皮病など、(第二分冊)巻の三は、創傷熱論、蜂窩織炎、丹毒、破傷風、敗血病、膿毒病など、巻の四は、出血論、出血後に発する極度貧血の療法、人工瀉血法、動脈の諸病、静脈の疾患、淋巴處の疾患など、巻の五は、骨の疾患、骨折、骨組織の炎症、腐骨症、佝僂病など、(第三分冊)巻の六は、関節の疾患、関節挫傷、脱臼、関節炎、関節変形症、関節創傷、関節の神経痛、贅骨、腱の外傷及炎症、巻の七は、腫瘍又腫病、真性腫瘍、脂肪病、軟骨病、粘液病、肉腫、筋腫、神経病、癌腫、乳嘴病などです。

愛知医学校第2年後学期生 大川臺一郎(親直)が筆記しました。

3冊：  
縦24cm×横16cm

はなふさどうじゆん ほうたいがく ず ぶ

**花房道純『繃帯学図譜』 1891年頃**

講義者は、花房道純(1860-1895)と思われます。

花房は福井県出身で、1886年(明治19年)9月、東京大学医学部卒業し、同年9月29日に、愛知医学校一等教諭として名古屋に赴任しました。皮膚病、梅毒病論、外科通論、産科学、婦人病論、衛生学、裁判化学等の授業を担当し、愛知病院外科副医長を兼務し、1888年には愛知県監獄医長も兼務しました。1894年、肝臓病にかかり、翌1895年4月26日辞職し、療養中のところ、同年6月8日逝去しました。



図版27丁：縦24cm×横17cm

本書は174の図版があります。1892年12月に愛知医学校を卒業した大川臺一郎(親直)から寄贈されました。



## 花房道純『外科的療材学』 1891年頃



2冊：縦24cm×横16cm

花房道純(1860-1895)は、福井県出身です。1886年(明治19年)、愛知医学校一等教諭として名古屋に赴任しました。

皮膚病、梅毒病論、外科通論、産科学、婦人病論、衛生学、裁化学等の授業を担当し、愛知病院外科副医長を兼務しました。

本書によると、外科的療材学は、器械学、繃帯学、手術学、薬物学の4種に分けられるということです。

本書の器械学の部、繃帯学の部は、1892年12月に愛知医学校を卒業した大川臺一郎(親直)が筆記しました。

## 川原汎『内科各論』 1891年頃

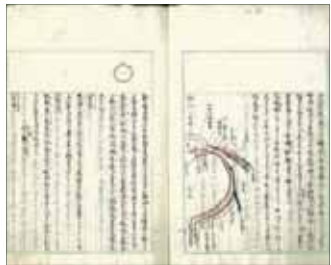


7冊：縦24cm×横16-17cm

川原汎(1858-1918)は、長崎県出身です。鈴木孝之助(1854-1945)教諭の後任として、1883年(明治16年)、愛知医学校一等教諭として赴任し、内科医長を兼務しました。内科学、察病学、衛生学、精神病学等の授業を担当し、愛知病院外科副医長を兼務しました。

本書は、末梢神経病、脊髓病・延髄病、脳病・脳膜病・官能的脳病・交感神経病、呼吸器病、血病・水脈腺病、皮膚病・運動器病などからなります。川原が講述し、1892年12月に愛知医学校を卒業した大川臺一郎(親直)が筆記しました。

## 小倉開治『眼科学』 1891年頃



4冊：縦24cm×横16cm

小倉開治(1855-1908)は、福井県出身です。1882年(明治15年)、愛知医学校一等教諭として名古屋に赴任しました。愛知病院の初代眼科医長として眼科教室の創始に尽力し、また生理学、薬物学、処方学、胎生学等を担当しました。

本書は、(巻之一)虹彩の疾患、毛様体の疾患、検眼鏡、視神経の疾患、網膜の疾患、(巻之二)脈絡膜の疾患、硝子体の疾患、水晶体の疾患、弱視及び黒内障、(巻之三)眼窩、涙器、眼瞼の疾患、屈折機及調節機の異常、(巻之四)眼筋病、結膜病、角膜病、鞏膜病からなります。

小倉の講義を、1892年12月に愛知医学校を卒業した大川臺一郎(親直)が筆記しました。

## 小倉開治『眼科学』 1893年



6冊：縦24cm×横16cm

小倉開治(1855-1908)は、福井県出身です。1882年(明治15年)、東京大学医学部を卒業し、同年6月17日、愛知医学校一等教諭として名古屋に赴任しました。愛知病院の初代眼科医長として眼科教室の創始に尽力し、また生理学、薬物学、処方学、胎生学等を担当しました。熊谷幸之輔(1857-1923)校長が不在中は、院長代理を務めました。

1895年5月31日に退職し、名古屋市内で浪越療病院を經營して眼科の診療にあたり、1908年、食道がんにより逝去しました。本書は、小倉の講義を筆記したものです。筆記者は不明です。

## 花房道純『外科通論』 1893年頃



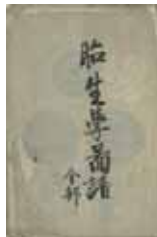
3冊：縦25cm×横16cm

本書の第一分冊の本文には『外科病理学』と書いてありますが、題簽のとおり『外科通論』です。

内容は、(第一分冊)巻一は、総論、炎症、炎症診断法(視診、触診、打診、聴診)、手術前の防腐法など、巻二は、外傷論創傷論、切創療法、刺創、挫創、裂創、銃創、毒創、火傷、凍傷など、(第二分冊)[巻数なし]出血論、人工瀉血法、動脈諸病、静脈疾患、血栓、淋巴處の疾患、骨の外傷、骨折、腐骨症及死骨、佝僂病など、(第三分冊)[巻数なし]腫瘍、脂肪瘤、肉腫、骨肉腫、黒色癌、腺癌、乳嘴痛、創傷熱編、蜂窩織炎、丹毒、破傷風などです。

本書は、花房教諭が口述し、1894年(明治27年)に愛知医学校を卒業した林茂が筆記しました。

## 奈良坂源一郎『胎生學圖譜 全部』 1905年頃



1冊：縦25cm×横17cm

1906年(明治39年)5月に愛知県立医学専門学校を卒業した安藤兼市(兼一)が使用していた講義録で、講義者は、奈良坂源一郎(1854-1934)と思われます。

奈良坂は、1881年(明治14年)10月愛知医学校に赴任し、解剖学、生理学、組織学の教諭として40年間、教鞭をとりました。

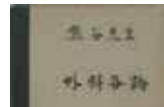


155p : 縦 22cm × 横 15cm

あん ままさとし しゅじゆつがく  
安間賢敏『手術學』 1907年

安間賢敏(1877-?)は、静岡県浜名郡和田村(現 浜松市東区)の出身です。1900年(明治33年)に愛知医学校を卒業し、愛知病院診察医補助、海軍軍医学校、海軍少軍医などを経て、1904年に愛知病院診察医を嘱託されました。1910年に、愛知県立医学専門学校の教諭となり、1911年には外科第三部長となり、1913年まで務めました。

本書は講義録です。



1冊 : 縦 21cm × 横 17cm

くまがいこうのすけ げ かかくろん  
熊谷幸之輔『外科各論』 1916年頃

熊谷幸之輔(1857-1923)は、出羽国仙北郡六郷(現 秋田県仙北郡美郷町)出身です。1881年(明治14年)、愛知医学校の後藤新平校長から同校の将来を担う人材として期待され、一等教諭として名古屋に赴任しました。当時、東京大学を卒業した医学士は貴重な人材で、その給与は後藤新平校長をはるかに上まわっていました。その後、愛知医学校や愛知県立医学専門学校時代の校長を33年間にわたって務めました。

本書は、熊谷の講義を、後の名古屋大学教授 大島福造(1894-1977)が、学生時代(1917年愛知県立医学専門学校卒業)に筆記したものです。



1冊 : 縦 21cm × 横 17cm

すぎかんいちろう げ かかくろん  
杉寛一郎『外科各論』 1916年頃

杉寛一郎(1875-1924)は、愛媛県周桑郡三芳村(現 西条市)出身です。第一高等学校を経て、東京帝国大学医科大学を卒業後、大学に残り、助手、助手などを務めました。清国湖北省陸軍軍医学校教授、オーストリア留学、青森県立青森病院長などの後、1915年(大正4年)、愛知県立医学専門学校教諭として、外科学の授業を担当しました。1922年、県立愛知医科大学教授となり、学生監も兼任しました。山崎正董(1872-1950)大学長の洋行中は学長代理として尽力しました。1924年、48歳で逝去しました。

本書は、杉の講義を、後の名古屋大学教授 大島福造(1894-1977)が、学生時代(1917年愛知県立医学専門学校卒業)に筆記したものです。

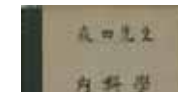


2冊 : 縦 22cm × 横 17cm

たに やくぶつがく  
谷寶抱『薬物學』 1916年頃

谷寶抱(1880-1936)は、福岡県嘉穂郡笠松村(現 飯塚市)出身です。1904年(明治37年)、愛知県立医学専門学校を卒業し、愛知病院介補、次いで診察医補を命ぜられました。法医学精神病学研究のため、東京帝国大学医科大学へ留学し、1908年、法医学の授業担当となり、愛知病院診察医を兼務しました。1913年、薬物学の授業担当となり、1916年、医学専門学校教諭となりました。

本書は、谷の講義を、後の名古屋大学教授 大島福造(1894-1977)が、学生時代(1917年愛知県立医学専門学校卒業)に筆記したものです。



1冊 : 縦 21cm × 横 17cm

もり たすけたか ないかがく  
森田資孝『内科各論』 1916年頃

森田資孝(1873-?)は、秋田県河辺郡石見三内村(現 秋田市河辺三内)出身です。第一高等学校を経て、東京帝国大学医科大学を卒業後、大学に残り、副手を務め、新潟県西蒲原郡の吉田病院長となりました。1906年(明治39年)、愛知県立医学専門学校に赴任し、内科学、臨床実習を担当し、愛知病院内科第二部長を兼務しました。ドイツへの留学後、1916年、内科第一部長となり、医学博士の学位を授与されました。

本書は、森田の講義を、後の名古屋大学教授 大島福造(1894-1977)が、学生時代(1917年愛知県立医学専門学校卒業)に筆記したものです。



1冊 : 縦 21cm × 横 17cm

なかのしずか すうがく  
中野静『数学』 1921年頃

中野静(1880-?)は、長野県長野市の出身です。第一高等学校を経て、東京帝国大学理科大学数学科を卒業し、長野県師範学校教諭、第八高等学校教授を経て、1920年(大正9年)、県立愛知医科大学予科教授、その後、予科主事、1924年に予科講師嘱託となり、1926年に退職しました。

本書は、中野の微分、積分の講義を、1926年に県立愛知医科大学を卒業した飯田諭吉(1900-1994)が筆記したものです。



浅井猛郎『組織学』 1924年頃



1冊：縦21cm×横17cm

浅井猛郎(1880-1942)は、名古屋市の出身、1907年(明治40年)、愛知県立医学専門学校の教諭となり、解剖学および実習を担当しました。1922年(大正11年)、県立愛知医科大学教授となり、1931年まで在職しました。

本書の内容は、一般解剖学であり、浅井の講義を、1926年に県立愛知医科大学を卒業した飯田諭吉(1900-1994)が筆記したものです。

藤井静英『小児科』 1924年頃



1冊：縦21cm×横17cm

藤井静英(1881-1960)は、山口県の出身、1915年(大正4年)、愛知県立医学専門学校教諭として赴任しました。小児科学および小児科臨床実習の授業を担当し、愛知病院小児科部長を命ぜられました。1927年、小口忠太(1875-1945)学長の後を受けて、県立愛知医科大学長となり、附属医院長を兼ね、1931年には官立名古屋医科大学長となりました。

本書は、藤井の講義を、1926年に県立愛知医科大学を卒業した飯田諭吉(1900-1994)が筆記したものです。

## 8. その他

拝領衣類函 1850年



櫃の大きさ：奥行25cm  
×幅33cm×高さ30cm

尾張・三河外科医術の祖とされる三村玄澄(1792-1853)は、諱は百穀、字は茂公、号は蕙斎と称しました。名古屋市鉄砲塚(現 東区相生町)の江戸初期からの薬舗 小西家に生まれ、13歳で尾張本草学の創始者の一人 浅野春道(1769-1840)に入門し、漢方内科を修めました。さらに1826年(文政9年)、華岡青洲(1760-1835)に入門し、1840年に初めて、尾張藩第10代藩主徳川斉朝(1793-1850 法号は天慈院殿恩誉春和源順大居士)を拝診しました。

葵紋入りの唐櫃には、玄澄が斉朝より拝領したの膚着が納めてあります。和紙包紙に、「源順様 御膚着 嘉永三年(1850年)辛亥二月十六日拝領」の墨書があります。

引札と版木 明治初期



引札(印刷面)：縦31cm×横22cm  
版木：縦35cm×横25cm

引札は、江戸から、明治、大正時代にかけて、商品の売り出しや開店の披露などのために配布した広告チラシです。薬の引札では、薬の名前、挨拶文、薬の効能などの説明、商店主名などが書かれています。

これは、名古屋下奥田町(現 中区新栄)の西念寺内の松井氏が売り出した「ちちのくすり」の引札です。

効能として、「乳瘍、乳癌、小児の口熱にて乳房の吹出物、その外、一切の腫物五痔(切れ痔、脱肛など5種類の痔)によし」と書かれています。

ポスター『愛知医大秋季演奏会』 1929年



1枚：カラー：  
縦54×横39cm

鶴天学友会会報 第70号(1929年12月31日発行)に掲載された県立愛知医科大学音楽部の部報によると、マンドリン部は創立第1回演奏会を1929年(昭和4年)6月15日に八重小学校講堂で開催、その後、11月1日には、榎山第一高等女学校講堂における音楽会に出演しました。この時の演奏曲目は、ヴェルキー(Konrad Wölki 1904-1983)作『昔ツウレに王ありき』と、ペール(Henry Bert ?-1914)作『天使と悪魔』です。

名古屋医科大学附属医院の机 1931年



奥行43cm×幅65cm×高さ71cm

名古屋医科大学(1930年～39年)の附属医院で使われていた机です。

真鍮の札に、名古屋医科大学附属医院の備品番号と昭和6年5月1日の日付があります。

経緯は不明ですが、2012年6月、附属図書館中央図書館情報サービス課の片隅で見つかり、譲り受けたものです。



1枚：縦55cm×横40cm

## ポスター『醫學講演會と標本展覽會』 1934年

名古屋医科大学の学生が自治団体として組織した学生会は、1934年(昭和9年)に、次のスケジュールにより大学祭を開催しました。

- 11月3日(土) 鶴天学友会懇親会参加
- 11月4日(日) 医学標本展览会(学生ホール)、講演会(大学講堂)
- 11月10日(土) 大学祭の夕 音楽と映画(市公会堂)

こみやきょうすけ 小宮 喬介(1896-1951)は、日本法医学会会長をつとめ、鑑識科学、とくに指紋の研究で知られ、桐原眞一(1889-1949)は、「桐原式胃鏡」を開発し、胃がんの早期発見を実現し、大庭士郎(1884-1937)は、局所免疫、血液型、濾過性病原体の研究で知られています。

1枚：縦20cm×横37cm



1枚：  
縦18cm  
×横26cm

## 名古屋医科大学運動會プログラム 1934年

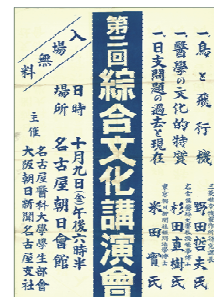
### 大學祭記念醫學大講演會 1934年

### 大學祭醫學標本展覽會 1934年

名古屋医科大学の学生会は、1934年(昭和9年)11月4日(日)に、医学講演会、標本展览会、運動会を開催しました。

運動会のトミク競争や武装競争、標本展览会の出品物などに時代を感じさせます。

1枚：縦19cm×横31cm



1枚：縦79cm×横55cm

## ポスター『第二回綜合文化講演會』 1936年

「私達の純真にして真剣なる名古屋文化向上運動たる綜合文化講演会を開催することになりました。(中略)私達は名古屋の地に育つ学術、芸術、宗教、哲学を深く理解すると同時に更にこれを発展進歩せしめ、これを最高水準に迄到着せしめる様に育て上げなければなりません。」(名古屋医科大学学生会による御案内より)

野田哲夫(1885-1972)は、ドイツに留学し日本人として初めて航空力学を学び、軍の要請を受けて軍用機の開発を始めた三菱航空機で技師となりました。杉田直樹(1887-1949)は名古屋医科大学精神医学教授、米田 実(1878-1948)は新聞記者、外交史家です。



胸像(台座も含む)：縦10.5cm  
×横16.6cm×高さ21.5cm  
箱：縦15.5cm×横19.1cm  
×高さ26.5cm

## 大庭博士胸像 1938年

大庭士郎(1884-1937)は佐賀市水ヶ江町の出身で、1911年(明治44年)に東京帝国大学医科大学を卒業し、駒込病院、伝染病研究所を経て、1916年、愛知県立医学専門学校の教諭となり、衛生細菌学を担当しました。名古屋医科大学の細菌学教授であった1937年6月27日に狭心症により急逝しました。

この胸像は、教室員、学友会員の募金により、慶應義塾大学三田キャンパスにある福沢諭吉像でも知られる彫刻家 柴田 佳石が制作しました。胸像の下部には、「Prof. Dr. Med. S. Oba 1884-1937」、胸像の背には、「昭和13. 6. 佳石」とあります。



1枚：縦14cm×横15cm

## 第五學期時間表 1938年

1938年(昭和13年)9月～12月の名古屋医科大学 第五学期時間表です。1年を4月1日～9月10日、9月11日～12月31日、1月1日～3月31日の3つの学期に分け、第四年第十二学期までありました。第五学期とは、三学期制で言えば、二年生の第二学期に相当します。

「教練」の担当は、配属将校の森脇予備役大佐です。

大島福造、鶴見三三、宇佐見健一、三輪誠、齋藤眞、桐原眞一、木村哲二、小笠原一夫、石川顕正、戸田博の名前があります。

裏面には、共済部指定商人とし、洋服店、時計店、靴店等の案内が書かれています。



1冊：縦11.9cm×横7.5cm

## 名古屋帝國大學 學生證 1939年

1937年(昭和12年)医学部入学学生の学生証で、1939年12月22日に交付されました。修学簿(成績表)が綴じ込まれています。

最初に、次のような注意事項が書かれています。

- 一、学生証ハ登学ノ際必ラス携帯スヘシ
- 一、学生証ヲ以テ本学附属図書館閲覧票ニ充ツ
- 一、学生証再交付ヲ求ムル場合ハ手数料金一円ヲ納ムヘシ

修学簿は、学科目ごとに、学修期間、学修承認、学修証明、合格証明の欄があり、授業開始1週間以内に各担任教官に申請しその承認を請い、学士試験に合格した学科目に対して事務室で合格証明を与えられました。





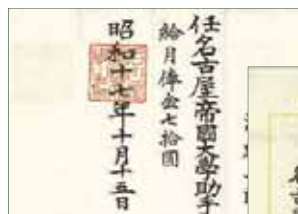
4枚(表裏に貼り付け) :  
縦 29.5cm × 横 22.0cm

## 医薬品のシール 戦前

薬瓶を封印するためのシールです。

東京市(明治22年～昭和18年)、有馬研究所(大正13年設立)、田辺五兵衛商店(昭和16年～18年 後の田辺製薬)、武田長兵衛商店(明治4年～昭和18年 後の武田薬品)、東洋製薬貿易(大正7年～昭和18年 後の東洋製薬化成)、名古屋製薬(～昭和20年 後の中北薬品)などがあり、戦前・戦中のものです。

1931年(昭和6年)の卒業生(名古屋医科大学の勤務医)の親族から寄贈されました。



1枚 : 縦 23cm × 横 31cm



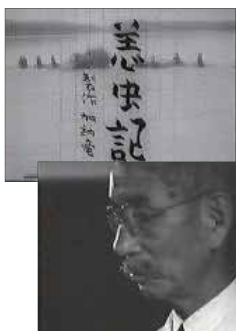
1枚 : 縦 26cm × 横 18cm

## 履歴書と辞令 1942、1944年

履歴書には、勲等、爵位、学位、舊(旧)藩を記入する欄がありました。



1枚 : 縦 28cm × 横 40cm



DVD モノクロ 36分

## DVD『恙虫記』 1943年公開

はやしなやすけ

林 直 助(1871-1953)は、岐阜県恵那郡出身、1906年(明治39年)愛知県立医学専門学校、のち県立愛知医科大学の教授に就任、恙虫病の研究で知られた寄生虫学者、病理学者です。

この記録映画は、恙虫病の発生地であった新潟県長岡市外黒條村附近における農村の生活、および30年前からこの村に設けられた恙虫病研究所における林教授たちの労苦と功績を描いたものです。東宝文化映画部製作。制作 加納竜一(1904-1988)、

脚本 楠田清(1905-1992)、演出 萩原耐(1900?-1946?)、音楽 飯田信男(1903-1991)、解説 徳川夢声(1894-1971)。

20131913



蓋の裏→

直径 9.5cm × 高さ 3.4cm

なごやていこくだいがくかいがくきねんしきてん きねんひん

## 名古屋帝国大学開学記念式典 記念品 1943年

1939年(昭和14年)4月1日、帝国大学令及び名古屋帝国大学官制に基づいて名古屋帝国大学が創設され、名古屋医科大学は同帝大医学部に改組されました。1940年5月1日に創立記念式を行い、その後、1942年に医・工・理の3学部が揃い、医学部学友会の寄附があったことで、1943年5月1日に東山地区で開学式が開催され、続いて2日、3日には鶴舞地区で沿革史展や講演会、映画会などが催されました。

記念品である磁器の蓋の表には、向かい合う鯨が描かれ、裏には「名古屋帝国大学開学記念」と刻印されています。本品は、瀬戸市出身で、愛知県立医学専門学校を卒業した医師であり、後に衆議院議長となる加藤録五郎(1883-1970)の遺品です。



1枚 : 縦 21cm × 横 26cm

## 記名布 1945年

1945年(昭和20年)8月9日に始まったソ連の満州への侵攻時に、軍医 大村 明(1911-1990?)が手にしていた荷物の記名布です。

大村は、福岡県出身で、高知高等学校を経て、1938年に名古屋医科大学を卒業後、勝沼精藏(1886-1963)の内科学教室の副手、陸軍軍医候補生となり、後に、満州の掖河陸軍病院に勤務しました。

「実験的腫瘍に対するHyaluronidaseの影響と制癌剤作用増強に就いて」により、1957年度に名古屋大学から医学博士(旧制)の学位が授与されました。



平塚 忠之助 編『高等物理学 重学 厳密修正第三版』(裳華房 1932年)

## 空襲により被災した図書 1945年

1945年(昭和20年)3月、3度にわたる空襲によって鶴舞キャンパスの医学部、病院は建物の62%以上を焼失しました。基礎教室と附属医院との中央に位置していた図書館は、鉄筋コンクリート造りであったため、蔵書はほとんど無事でしたが、各教室に置かれていた図書は大半が焼失しました。

同年8月10日前後に、図書館は製本雑誌を主体に約2万冊を岐阜県大野郡清見村の神社社務所へ疎開させました。当時の図書館は、1階が広間兼新聞閲覧室、学生閲覧室、雑誌閲覧室など、2階は教授閲覧室、事務室、書庫、3階は講堂、奉安室(天皇と皇后の御真影と教育勅語を納めていた部屋)で、敷地は116.16坪(384㎡)、延べ床面積は451坪でした。



高さ 167cm

Nagoya University Medical Museum Small Exhibit

かつめせいぞう きょうぞう

### 勝沼精藏 胸像 1965年頃

勝沼精藏(1886-1963)は、第三代名古屋大学総長です。

1963年(昭和38年)の第16回日本医学会分科会会長会議で、次期1967年の第17回総会を名古屋で開催することに決定しました。会頭は勝沼名誉教授です。勝沼は、1963年11月9日、愛知県文化講堂における、第15回視聴覚教育全国大会の記念講演中に、突然意識を失い倒れ、翌10日、逝去しました。

豊田講堂正面玄関から入ってすぐのロビーに設置されている勝沼の胸像は、1965年に医学部内科学第一講座同窓会により建立されたものですが、附属図書館医学部分館2階入口に設置されているこの胸像も同じ時期に製作されたものと思われます。



Nagoya University Medical Museum Small Exhibit

あいち い かだいがく よ か か ひ

### 愛知医科大学予科歌碑 1982年

愛知医科大学(1920-1931)は、名古屋大学医学部の前身です。4年間の学部本科とは別に、語学や基礎教養を学ぶ3年間の予科がありました。予科の校歌「源清き」の歌碑は、愛知医科大学予科の同窓会「橘会」の設立5周年を記念して、1982年に鶴舞キャンパスに竣工した香果園に設置されました。

「源清き堀川の 流れ栄ある五十年 久遠の理想仰ぎつつ  
向上の意気凝るところ 紫匂ふ東の 鶴舞が原の黎明に 至  
高の燦として 輝く星を君見ずや 西金城の朝風に 橘泉神  
如の影清く 韻律高く鳴り渡る 嗚呼健男児の胸の裡」



直径 6.0cm  
× 厚さ 0.3cm

Nagoya University Medical Museum Small Exhibit

な ご や だいがく い がく ぶ もんしょう

### 名古屋大学医学部紋章メダル 1984年

医学部ないし学友会に貢献された方への表彰の記念品として紋章メダルの作製が企画され、1983年(昭和58年)11月、『名大医学部学友時報』に、紋章のデザイン募集の記事が掲載されました。採用された図案は、1944年名古屋帝国大学医学部を卒業し、岐阜県恵那郡福岡町で開業した黒岩秀夫によるものです。紋章メダルは後藤銅器店により1984年末に完成しました。

紋章メダルの表面は、鶴舞に因んで3羽の鶴をあしらひ、それぞれに愛(人間愛)、和(協調)、誠(誠実)を象徴しています。これは、医の真髄、医学研鑽の心構えとして医師が継承すべきものという意味が込められています。裏面は、「大學」という字と、名古屋大学の創基の年とされる「1871」と、月桂樹がレイアウトされています。



人名索引

ア

藍川 清成 41  
愛新覚羅 溥儀 78  
青木 浩齋 24  
青木 文次 78  
青山 理三郎 72  
赤川 玄樸 1  
秋本 文吾 43  
浅井 周伯 13  
浅井 猛郎 77, 97  
浅川 範彦 38  
朝倉 文夫 65  
浅沼 佐盈 15  
浅野 春道 1, 97  
朝山 義六 32  
味岡 三伯 13  
芦田 伸介 56  
アシヨフ(Aschoff, Karl Albert Ludwig) 77  
足立 栄庵 18  
阿部 知二 51  
天野 亀彦 71  
安藤 兼市(兼一) 85, 94  
安間 賢敏 72, 95

イ

飯田 信男 101  
飯田 諭吉 96, 97  
伊王野 坦 → 青木 浩齋  
郁 達夫(Yu Dafu) 46  
池田 謙斎 30  
石井 榮三 30, 33, 70  
石井 隆庵 28, 46  
石川 顕正 100  
石川 詢 31, 33, 70  
石川 大浪 22  
石黒 忠恵 32, 34, 71  
石代 十兵衛 30  
石田 元季 79  
石森 國臣 41, 60  
板垣 退助 32, 56  
板倉 與五郎 89, 90  
伊藤 圭介 1, 28, 46, 56, 84  
伊藤 信次 85  
伊藤 武文 72  
伊藤 照 72  
伊藤 博文 56  
伊藤 益雄 66

伊藤 有 50  
稲田 宜四郎 36  
稲葉 克文礼(克, 意仲, 湖南) 20  
稲村 三伯 22  
岩城 貫三郎 71  
岩崎 紀一 41  
鰺屋 松本市左衛門 30  
印東 玄得 91

ウ

ウィリス, ウィリアム(Willis, William) 1  
ヴェサリウス, アンドレアス(Vesalius, Andreas) 14  
ヴエルキー(Wölki, Konrad) 98  
ウォルフ(Wolf, Georg) 10, 86  
宇佐見 鍵一 100  
宇田川 玄真 22  
宇田川 玄随(槐園) 19, 21  
宇田川 榛齋(玄真) 21, 23  
宇津木 昆台 22  
有独 28  
梅原 猛 56

エ

江木 鰐水(繁太郎) 26  
江口 季雄 77  
エスマルク(エスマルヒ Esmarch, Johan Friedrich August von) 32

オ

王 洙 12  
汪 兆銘 53, 55, 81  
大川 臺一郎(親直) 90-93  
大北 武彦 60  
大木 常松 77  
大島 福造 77, 95, 96, 100  
大島 義脩 41, 65  
太田 正雄 → 木下 奎太郎  
太田 元次 53, 55  
大塚 金之助 78  
大槻 玄沢 21  
大野 了佐 14  
大庭 士郎 42, 77, 99, 100  
大村 明 86, 102  
大村 益次郎 24  
岡井 隆 54  
岡崎 俊夫 46  
小笠原 一夫 100  
緒方 郁蔵 23

緒方 洪菴(適々斎, 華陰) 17, 23-25, 71  
緒方 富雄 17, 49  
岡野 保次郎 48  
小川 三之助 72  
小川 善司 62  
小川 鼎三 49, 82  
荻原 耐 101  
小口 忠太 77, 97  
小倉 開治 70, 93, 94  
奥 劣斎 22  
小田野 直武 17  
小野 未鉄太郎 71  
小野 稔 55

カ

貝原 益軒(篤信, 損軒) 15  
貝原 寛斎 15  
賀川 玄悦(子玄) 16-19  
賀川 玄迪(子啓, 有斎) 17, 23  
郭 沫若 46  
賀古 桃次 72  
片倉 元周(深甫, 鶴陵, 静儉堂) 19, 23  
片倉 周意 23  
片山 國嘉 32, 91  
葛 可久(乾孫) 13  
勝沼 精蔵 6, 8-10, 42, 56, 75, 77, 81, 86, 102, 103  
桂 太郎 56  
加藤 一三 44  
加藤 竹男 77  
加藤 虎彦 71  
加藤 鏖五郎 45, 102  
加納 竜一 101  
加山 又造 53  
ガレノス(Γαληνός) 14  
河石 九二夫 44  
河上 肇 78  
川津 祐介 56  
川端 康成 49  
川原 汎 35, 36, 59, 72, 87, 88, 90, 93  
川村 泉 39  
管 茂材 25

キ

岸 丈夫(古澤 行夫) 46  
北川 乙治郎 36, 63, 72  
北村 一郎 77  
北里 柴三郎 35, 36, 38, 40, 72  
北島 多一 61  
北林 貞道 72, 77

木下 順庵 15  
木村 哲二 100  
木下 奎太郎 43, 47, 49, 50  
木村 資生 55  
ギュンテル(ギュンター Günther, Friedrich August) 35  
龔 廷賢(雲林) 14  
清川 正二 55  
桐原 眞一 10, 44, 77, 86, 99, 100  
金原 庄治郎 56

ク

日下部 眞一 55  
草薙 良一 56  
楠田 清 101  
楠 太 72  
葛谷 貞之 42  
葛谷 貞二 72  
國貞 廉平 31, 56  
久野 玄二 71  
久野 寧 45, 47, 85  
熊谷 九壽 49  
熊谷 幸之輔(羽仙) 8, 36, 41, 50, 59, 60, 64, 70, 72, 74, 75, 89, 92, 94, 95  
熊谷 元章(儀克) 17  
熊澤 釭七郎(古蓬) 34  
栗林 傳吉 38  
クルムス, ヨハン・アダム(Kulmus, Johann Adam) 17  
グレッフ(Gräff, Siegfried) 77  
黒岩 秀夫 103  
黒田 清 49  
黒田 三樹三 72  
クンツェ(Kunze, Karl Ferdinand) 30

コ

河野 義克 52  
小島 浦三郎 36  
小島 喜代次 6  
小谷 剛 49  
コッホ, ローベルト(Koch, Heinrich Hermann Robert) 35, 38, 40, 72  
小寺 武久 69  
後藤 和子 56  
後藤 良山 15, 18  
後藤 実崇 46, 67  
後藤 新平 3, 4, 31-37, 40, 42, 43, 46, 51, 53, 56-61, 64, 66, 67, 69-71, 84, 89, 91, 92, 95  
後藤 利恵 46, 67  
近衛 文麿 8  
小林 多喜二 78

小林 義直 26  
小林 與三次 52  
小宮 喬介 99  
呉 有性 18  
ゴルテル → ホルテル  
近藤 坦平 90  
近藤 真彦 56

## サ

齋藤 桑次郎 36  
齋藤 眞 10, 44, 45, 53, 54, 61, 74, 77, 81, 100  
齋藤 道四郎 3, 70  
酒井 繁 77  
酒井 シヅ 82  
酒井 恒 82  
坂本 朝一 52  
相良 知安 30  
佐々井 茂庵(玄敬) 18  
佐々木 中 72  
サージェント(Sargent, Fitzwilliam W) 26  
佐藤 亀一 77  
佐藤 勤也 63  
佐藤 泰然 31  
佐藤 尚中 28, 31

## シ

椎名 悦三郎 52  
ジェンナー, エドワード(Jenner, Edward) 1  
志賀 潔 72  
志賀 直哉 51  
司馬 亨太郎 44  
司馬 凌海(盈之, 島倉 伊之助) 25, 27, 30-32, 34, 44, 51, 53, 56, 58, 69, 87  
司馬 遼太郎 53  
柴田 佳石 100  
柴田 芳洲 29, 58  
渋沢 栄一 50  
澁澤 元治 8-10, 47, 48, 50, 74  
シーボルト(Siebold, Philipp Franz Jonkheer Balthasar von) 16, 22, 28  
清水 元彌 71  
甚目 心融 36  
シモンズ, D.B. 41  
朱 震亨(彦修, 丹溪) 13  
シュルツェ(Schultze, Emil August Wilhelm) 88, 89  
蔣 介石 55  
正力 享 52  
正力 松太郎 46  
昭和天皇 43

白井 松之助 30  
新海 竹太郎 59  
進藤 玄敬 71  
シンドラー(Schindler, Rudolf) 10, 86

## ス

須賀 不二男 56  
杉浦 倉二 71  
杉 寛一郎 95  
杉田 玄白 17, 21, 22  
杉田 成卿 24  
杉田 直樹 77, 99  
杉田 立卿(予, 錦腸) 22  
杉森 久英 51, 56  
鈴木 甲蔵 2, 62  
鈴木 孝之助 40, 59, 70, 90, 91, 93  
鈴木 大地 55  
鈴木 禎次 59  
鈴木 保奈美 56  
鈴木 宗泰 62  
鈴木 容蔵 1, 84  
諏訪 俊 21

## ソ

祖父江 逸郎 54  
孫 允賢 13  
孫 文 55

## タ

大正天皇 66  
高塚 二男三郎 37, 73  
高橋 傳吾 72  
多紀 莚庭(元堅) 23  
多紀 元簡 19  
多紀 藍溪 19, 23  
瀧井 孝作 49  
瀧浪 圖南 31, 33, 58, 70, 87  
武井 勝 10, 86  
竹内 栖鳳 60  
多田 學三郎 72  
田中 正幅 29  
田中 友治 50  
田中 義雄 42  
田中 隆三 78  
谷 寶抱 72, 96  
種村 弼 42  
田野 俊貞 30, 33, 58, 70  
田淵 寿郎 68  
田村 春吉 5, 8, 10, 50, 74, 77  
丹涅爾 27

丹波 哲郎 56  
丹波 康頼 12

## チ

張 三石 2, 62  
張 仲景(張 機) 11, 12, 15, 16, 18-20

## ツ

塚本 邦雄 54  
柘植 宗一 70  
坪井 信道 23  
坪井 為春 27  
坪田 忠兵衛 53  
鶴 泰栄 20  
鶴見 三三 100

## テ

寺倉 文之助 72  
寺地 舟里 26  
寺山 修司 54  
デンマン, トーマス(Denman, Thomas) 21

## ト

土井 助三郎 41  
東條 英機 48  
戸苅 近太郎 10, 76  
徳川 斉昭 22  
徳川 斉朝 57, 97  
徳川 夢声 101  
徳川 義直 56  
所 輝夫 54, 61  
戸田 博 61, 100  
戸谷 章 77  
土肥 慶蔵 50

## ナ

内藤 魯一 56  
中 天游 23  
永井 松右衛門 2  
中江 藤樹 14  
中川 淳庵 17  
中川 淡齋(哲, 明甫) 25  
中島 三伯 28, 46  
中嶋 潮造 72  
中島 実 77  
中島 茂吉 2  
長束 宗元 57  
中野 静 96  
永野 武 66  
中村 溪男 12

中邨 貞治 16  
中村 牧陽 72  
中村 豊 72  
長與 專齋 4, 35, 43, 69, 71  
長柄 春龍 1, 84  
奈良坂 源一郎(松洲) 33, 37, 57, 59, 60, 63, 64, 70, 72, 84, 87, 89, 94  
奈良坂 宏 57  
櫛林 栄建 1, 25

## ノ

野田 哲夫 99

## ハ

芳賀 榮次郎 36  
橋本 左内 24  
長谷川 兼太郎 50  
服部 敏良 12  
パッペンハイム(Pappenheim, Louis) 36  
鳩山 一郎 7  
華岡 青洲 1, 19, 20, 22, 57, 97  
華岡 直道 20  
花房 道純 36, 92-94,  
ハーヘマン(Hageman Jr, H. H.) 23, 24  
濱見 津 72  
早川 養順 58  
林 玄之助 77  
林 茂 94  
林 紀 31  
林 亨 77  
林 直助 39, 41, 42, 77, 101  
原 南陽 22  
ハラタマ(Gratama, Koenraad Wolter) 25  
ハーン(Hahn, Friedrich Karl Arnold) 73  
伴野 新左衛門 3  
伴野 新蔵 3

## ヒ

飛驒屋 茂吉 → 中島 茂吉  
ヒポクラテス(ヒッポクラテス) 72  
扶歌蘭度 → フーフェラント  
平塚 忠之助 102  
平野 謙 51

## フ

福澤 桃介 41  
福澤 諭吉 24, 41, 71, 100  
藤井 静英 73, 77, 97  
藤井 方亭 → 諏訪 俊  
藤井 麗輔 32



藤枝 静男 51  
藤田 嗣章 30  
藤田 嗣治 30  
藤野 厳九郎 53  
藤本 理 90  
藤源 真亮 73  
藤原 銀次郎 46  
布施 博一 56  
舟木 重次郎 72  
舟橋 聖一 49  
フーフェラント(Hufeland, Christoph Wilhelm) 23,24  
ブランカールト(Blankaart, Steven) 21  
フリント(普林篤 Flint, Austin) 26  
布律外(Flügge, Karl Georg Friedrich Wilhelm) 35  
プレンク(不冷吉 Plenck, Joseph Jacob Ritter von) 22  
プロイス(不路乙斯 Pruy, Martin) 22  
不破 万作 56

ヘ  
ヘーブラ(Hebra, Ferdinand Ritter von) 30  
ベール(Bert, Henry) 98  
ベルツ(Baelz, Erwin von) 35, 87, 88

ホ  
勃古 34  
堀田 一雄 62  
ボードウイン(Bauduin, Anthonius Franciscus) 25  
合信 25  
ホームズ, シャーロック 51  
堀内 篤蔵 91  
ホルテル, ヨハネス・デ(Gorter, Johannes de) 19  
ポンペ(Pompe van Meerdervoort, Johannes Lijdius Catharinus) 25, 27, 31, 69, 71  
本間 玄調(資章, 和卿, 棗軒, 救) 22

マ  
米田 実 99  
前野 良沢 17  
馬島 六之丞 71  
松永 尺五 15  
松本 市左衛門 30  
松本 順(順之助, 良順) 25, 27, 28, 31, 53, 69  
松本 良甫 31  
松山 棟菴 26  
マンسفエルト(Mansveldt, Constant George van) 40

ミ  
ミハエリス(ミカエリス, ミヒャエーリス), レオノール  
(Michaelis, Leonor) 77  
水谷 豊文 28, 56

水原 濟卿(義博, 濟卿, 三折) 22  
溝口 正人 69  
箕作 阮甫 24  
嶺 春泰 19  
美濃部 亮吉 52  
三原 吉裕 72, 77  
三村 玄澄(百穀, 茂公, 蕙斎) 1, 57, 97  
宮口 二郎 56  
三宅 良斎(子厚) 25  
三宅 康昌 31  
宮永 岳彦 51  
ミュラー(Müller, Benjamin Carl Leopold) 88, 89  
三輪 誠 8, 78, 100

ム  
向井 元升 15  
向井 輝美 55  
陸田 志ヨウ 68

メ  
明治天皇 72  
メルヴィル 51  
メンテン, モード(Menten, Maud Leonora) 77

モ  
モーニケ, オットー(Mohnike, Otto Gottlieb Johann) 1  
森繁 久彌 56  
モリソー, フランソワ(Mauriceau, François) 15  
森田 資孝 72, 96  
森脇予備役大佐 100  
森 林太郎(鷗外) 34, 38

ヤ  
八神 幸助 30, 40  
八木沢 文吾 77  
柳下 士興 36  
安場 和子 56  
安場 保和 40, 56  
八千草 薫 56  
柳沢 秀吉 77  
谷萩 那華雄 48  
山崎 闇斎 15  
山崎 佐 49  
山脇 東洋 15, 18  
山崎 正董 5, 52, 74, 75, 77, 95  
大和 見立 20  
山中 四郎 66  
山本 五十六 80  
山本 権兵衛 42  
山本 豊市 56

山元 昌之 8, 9, 81  
山本 致美 24

ユ  
由起 シゲ子 49

ヨ  
横井 信之 26, 28, 32, 63, 69, 70  
吉田 茂 45  
吉田 生 46  
吉田 光邦 52  
吉益 東洞(為則, 周助) 16, 18, 19  
吉益 南涯(猷, 修夫, 謙斎) 19, 20  
玉函涅槃我爾徳児 19  
ヨングハンス(雍翰斯 Junghans, T.H.) 2, 3, 29, 32, 33, 41

リ  
リスター(Lister, Joseph) 32, 88, 89  
リヒテル(Richter, Victor von) 90  
劉 敞 18  
林 億 12

レ  
レーデラー(Roederer, Johann Georg) 16

ロ  
魯迅(周 樹人) 53  
六角 重任 18  
ローレツ(老烈 Roretz, Albrecht von) 3, 25, 27, 29-34, 36, 44, 51, 58, 62, 69, 70, 87

ワ  
脇屋 義純 52  
渡辺 長男 65

A-Z  
Aschoff, Karl Albert Ludwig → アショフ  
Baelz, Erwin von → ベルツ  
Bauduin, Anthonius Franciscus → ボードウイン  
Bert, Henry → ベール  
Blankaart, Steven → ブランカールト  
Bock, Carl Ernst → 勃古  
Denman, Thomas → デンマン, トーマス  
Disbrow, William S. 21  
Esmarch, Johan Friedrich August von → エスマルク  
Flint, Austin → フリント  
Flügge, Karl Georg Friedrich Wilhelm → 布律外  
Fontanus, Nicolaus 14  
Γαληνός → ガレノス

Georg Wolf → ウォルフ  
Gorter, Johannes de → ホルテル, ヨハネス・デ  
Gratama, Koenraad Wolter → ハラタマ  
Gräff, Siegfried → グレッフ  
Günther, Friedrich August → ギュンテル  
Hageman Jr, H. H. → ハーヘマン  
Hahn, Friedrich Karl Arnold → ハーン  
Hebra, Ferdinand Ritter von → ヘーブラ  
Hobson, Benjamin 25  
Hufeland, Christoph Wilhelm → フーフェラント  
Jenner, Edward → ジェンナー, エドワード  
Junghans, T.H. → ヨングハンス  
Koch, Heinrich Hermann Robert → コツホ, ローベルト  
Kulmus, Johann Adam → クルムス, ヨハン・アダム  
Kunze, Karl Ferdinand → クンツェ  
Lister, Joseph → リスター  
Mansveldt, Constant George van → マンスフェルト  
Mauriceau, François → モリソー, フランソワ  
Menten, Maud Leonora → メンテン, モード  
Michaelis, Leonor → ミハエリス, レオノール  
Mohnike, Otto Gottlieb Johann → モーニケ, オットー  
Mühleus 教授 42  
Müller, Benjamin Carl Leopold → ミュラー  
Ostermann, Christian 27  
Pappenheim, Louis → パッペンハイム  
Plenck, Joseph Jacob Ritter von → プレンク  
Pompe van Meerdervoort, Johannes Lijdius Catharinus → ポンペ  
Pruys, Martin → プロイス  
Richter, Victor von → リヒテル  
Riley, John Campbell 26  
Roederer, Johann Georg → レーデラー  
Roretz, Albrecht von → ローレツ  
Sargent, Fitzwilliam W → サージェント  
Schindler, Rudolf → シンドラー  
Schultze, Emil August Wilhelm → シュルツェ  
Siebold, Philipp Franz Jonkheer Balthasar von → シーボルト  
Tanner, Thomas Hawkes 27  
Vesalius, Andreas → ヴェサリウス, アンドレアス  
Willis, William → ウィリス, ウィリアム  
Wolf, Georg → ウォルフ  
Wölki, Konrad → ヴエルキー  
Wood, George Bacon 28

ア	
愛國報國機「大學高専號」献納會	7
愛衆社	31, 33
『愛衆社規則』	33
『愛衆社典型彙編』	31
愛知医学専門学校校友会	50
愛知醫學専門學校全景〔繪葉書〕	63
『愛知醫學専門學校第三十六回卒業生 紀念寫真帖』	73
愛知医科大学	5-7, 10, 39, 42, 43, 45, 49, 52, 61, 64-66, 73, 75-79, 95-98, 101, 103
愛知医科大学学長	52, 74, 77, 95, 97
愛知医科大学学長・同附属医院長	73
愛知医科大学鶴天学友会	50
愛知医科大学(私立)	53
愛知医科大学病院	64
『愛知醫科大學病院 内科病症日誌』	5
愛知医科大学附属医院	67
愛知医科大学附属医院長	97
愛知医科大学予科	37, 96, 103
愛知医科大学予科歌碑	103
愛知医学会	36
『愛知醫學會雜誌』	36, 39
愛知医学校	3, 4, 32-37, 40, 43, 53, 57, 59, 63, 64, 71, 84, 89-95
愛知医学校校長	50, 51, 59, 60, 70, 71, 89, 92, 95
愛知醫學校前面ノ圖〔写真〕	71
愛知医学校同窓会	50
『愛知醫學校同窓會雜誌』	4, 50
『愛知医大秋季演奏會』〔ポスター〕	98
愛知学院大学	6, 82
愛知教育博物館	59, 64, 84
愛知県医師会	67
愛知県会	5, 6, 7, 41, 45, 66, 72
『愛知縣管下永井松右衛門合衆國醫士ヨンクハンス氏ト取結條約文』	2
愛知県監獄	92
愛知県警察部衛生課	37
愛知県公立医学校	→ 公立医学校
愛知県公立病院	3, 25-28, 31-35, 44, 51, 53, 58, 63, 64, 69-71
『愛知縣公立病院及醫學校第一報告』	3, 31
愛知縣公立病院及醫學校之平面圖	62
愛知県公立病院長	26, 63, 70
『愛知県公立病院癲狂室 復原図』	69
愛知県昭和塾堂	6, 81, 82
『愛知縣昭和塾堂概要』	6
愛知県文化講堂	103
愛知県立医学校	4, 60
愛知県立医学校校長	91
愛知県立医学専門学校	4, 5, 7, 11, 37, 39, 41, 42, 45, 47, 50, 59, 60, 62-66, 72-76, 85, 89, 92, 94-97, 100, 102
『愛知縣立醫學専門學校及愛知病院一覽』	4
愛知県立医学専門学校 県立愛知病院 新築落成紀念〔繪葉書〕	65
『愛知縣立醫學専門學校 縣立愛知病院 新築落成式紀念』	41
愛知県立医学専門学校校長	59, 60, 74, 89, 92, 95
『愛知縣立醫學専門學校卒業紀念帖』第三十七回	73
愛知縣立醫學専門學校同窓會春季運動會〔繪葉書〕	64
愛知県立第一中学校	68
愛知県令	31, 40, 69
「愛知實驗醫學」	42
『愛知週報』	28
愛知病院	3, 11, 32, 34, 35, 41, 43, 59, 63-66, 71-75, 90-96
『愛知病院及愛知醫學校第二報告』	3
愛知病院全景〔繪葉書〕	64
愛知病院長	51, 71, 74
芥川賞	49
安政名古屋圖	62
イ	
『医戒』	24
『醫科器械目錄』	40, 44
医学講習場	2, 29, 46, 71
『醫學講演會と標本展覽會』〔ポスター〕	99
『医学選粹』	15
『醫學卒業候事』	3
医学部学友会	102
医学部長	8, 10, 74, 76
『医事新聞』	30
『醫事新報』	29, 33
『醫心方』	12
伊藤圭介翁顕彰事業	56
『医範』	19
『醫範提綱』	→ 『西說醫範提綱釋義』
『醫範提綱内象銅版圖』	21
『イペリット眼』	51
『医方大成』	13
『醫方大成論』	13

医薬品のシール	101
『醫療器械圖譜』	30
『醫療大成 藥劑編』	27
岩倉遣欧使節団	71
『岩手水澤名所美観』	67
『院校報告』	3, 31, 58, 87
インパクトファクター	42

ウ	
『産家やしなひ草』	18
雲林暇筆	14

エ	
『衛生学綱目』	59, 90
『衛生學大意』	38
『衛生警察学』	53
『衛生警察原理』	36
エスマルヒ開口器	32
エスマルヒ バンデージ	32
『エビトメー』	14

オ	
於西本願寺別院 校長後藤新平氏送別記念撮影〔写真〕	70
『往診予定之書』	1
汪兆銘の梅	55
『大阪錦画新聞』	3
大島義脩先生壽像〔繪葉書〕	65
『太田元次軍医の汪兆銘看護日誌抄』	55
『大野海水浴法一斑』	4
大庭博士胸像	100
『大風呂呂敷』	51, 56
『大風呂呂敷ー時代をクリエートした男 後藤新平ー』	56
奥医師	1, 57
桶	83
オースチンフリント雑音	26
『踊る骸骨』	60
お雇い外国人教師	2, 3
『和蘭眼科新書』	22
『和蘭内景醫範提綱』	21
尾張医学館薬品会	56
尾張藩	34, 46
『尾張風土歌』	29
尾張本草学	1
尾張名所図会	4, 43
『尾張名陽圖會』	46
『温疫論』	18
音楽部	98
温病派	18

カ	
開学式	102
海軍省	48
『骸骨二体』	60
海水功用論	4, 43
『海水浴案内:新舞子:大野:新須磨』	43
『解剖簡陋』	33, 63
解剖祭	78
『解剖図表』	17
『解剖大全』	33, 60
『解體新書』	17
『解體約圖』	17
価格等統制令	7
覚王山日泰寺	73, 78
『確證』	49
『格致餘論』	13
鶴天学友会	99
鶴天学友会報(鶴天学友会会報)	4, 98
学徒勤労令	47
『秘』病院防空一戦跡と戦訓一』	9, 81
学友会	4, 47, 50, 82, 98-100, 102, 103
カスパル流外科	20
脚気	45, 62
勝沼精藏 胸像	103
仮医学校	2, 28, 46, 62, 76, 84
仮病院	2, 28, 46, 62, 76
仮病院(西本願寺別院)	29, 41
花柳病	45, 67, 72, 74
川地産婆学校	67
『眼科學』	93, 94
『眼科新書』	22
『眼科要略』	25
換気カプセル法	45, 85
『関西醫界時報』	39
関西医界時報社	39
関西府県連合共進会	64, 72
感染症法	10
關東都府府臨時防疫部	39
漢方	1, 11, 16, 19, 21-23, 71, 82-84, 97
『簡明組織學』	33
『簡明胎生學』	33
官立移管	6, 7, 40, 73, 76, 78, 79
官立高等学校	66
官立名古屋医科大学	→ 名古屋医科大学
キ	
技術院	48
『紀念』	75
『記念寫真帖:創立五拾週年昇格祝賀』	76



『木下圭太郎全集』 49  
『岐阜凶報板垣君遭難顛末』 32  
記名布 102  
宮城前奉祝緑門と少年団奉祝薪火〔絵葉書〕 66  
牛痘 84  
久念会 76  
共済団 52  
共済部 100  
『郷土の藤野厳九郎先生』 53  
『局處解剖學講本』 33  
『局處解剖學圖譜』 33, 37, 63  
桐原式軟性胃鏡 10, 86, 99  
『金匱玉函要略方』 12  
『禁忌と好色』 54  
『金匱要略』・『金匱要略方論』 11, 12, 15, 16, 18, 20  
銀秤 83  
『禁方録』 20

ク

『空気頭』 51  
空襲 6, 8, 9, 50, 68, 74, 81, 82, 102  
空襲で灰塵に帰した鶴舞キャンパス 81  
空襲により被災した図書 102  
『空襲二因ル外傷患者ノ治療成績:昭和20年3月19日以降終戦まで』 9  
空襲による被災と応急復旧〔アルバム〕 82  
『空襲被害箇所所要図』 9  
『區劃整理と建築』 42  
薬筆筭 83  
クロロホルム(コロールホウム, 格魯魯保児母)1, 32  
軍医 1, 21, 25, 27, 28, 30, 32, 34, 38, 40, 53-55, 70, 71, 80, 86, 88, 95, 102  
『軍医が見た戦艦大和』 54  
軍医携帯囊の衛生材料 86  
軍事教練(教練) 65, 80, 81, 100  
『軍陣外科手術』 32

ケ

『啓蒙尾参風土歌』 29  
経絡人形 82  
『外科各論』 89, 92, 95  
『外科通論』 92, 94  
『外科的療材学』 93  
『外科病理学』 94  
結核 72  
『血管撮影法』 45  
血清製造所 81  
血清療法 38, 40, 61  
『原生要論』 29

『献納據金締切延期ノ件』 7  
顕微鏡 昭和号GK 86  
県立愛知医科大学 → 愛知医科大学  
県立工業学校 66  
県立名古屋診療所 67

コ

『光榮録』 43  
香果園 103  
甲申会 81  
硬性胃鏡(エルスナー式) 86  
硬性胃鏡(シンドラー式) 86  
好生館側面遠望〔絵葉書〕 63  
好生館病院 67  
好生舎・好生館 26, 63  
『高等物理学 重學 嚴密修正第三版』 102  
『口腹の小説』 43  
公立医学講習場 3, 27, 32, 33, 44, 58, 69, 87  
公立医学所 63, 71  
公立医学校 6, 24, 28, 29, 31, 33, 34, 40, 58, 62, 71, 87, 91  
公立医学校長 63  
公立私立専門学校規程 63  
公立病院 62, 69  
公立病院長兼公立医学校長 69  
『故桐原教授告別式順序』 10  
『國民學校自由講座』 41  
国民職業能力申告令 7, 8  
国民徴用令 7  
国民労務手帳法 8  
克有会 79  
国立豊橋病院 54  
『五十年間の回顧』 50, 81  
『胡蝶の夢』 53  
『國家衛生原理』 36  
国家総動員法 7, 8  
コッホ博士来名記念〔写真〕 72  
後藤新平記念館 52  
後藤新平顕彰記念事業会 52  
『後藤新平追想録』 52  
後藤銅器店 103  
古方(古医方) 15, 16, 18, 20  
『古方便覧』 18  
コレラ(コロリ, 虎列刺, 虎狼痢, 虎狼狸) 24, 25, 35, 36, 72, 90  
『虎列刺:亜細亜虎列刺, 亜細亜霍乱, 印度コレラ』90  
『虎列刺赤痢豫防消毒實施手扣』 36  
『虎列刺病拔失爾々斯論』 35  
『虎狼痢治準』 24

サ

最近名古屋明細地圖 64  
最初 → 初めて  
『最新種痘學』 38  
『財団法人 共済団五十年誌』 52  
『齋藤教授 脳手術の図』 54, 61  
『裁判医学』 53  
棹秤 83  
『作家』 49  
『察病龜鑑:遠西名醫扶歇蘭度』 24  
血秤 83  
『撒善篤繻帶式』 26  
『産科学』 91  
『産科瑣言』 20  
『産科探頷圖訣』 22  
『産科發蒙 醫學實驗義集』 19  
『産論』 16  
『産論翼』 17

シ

椎の葉会 75  
『子宮病論』 30  
『子玄子産論』 17  
閑谷学校 25  
自治三訣 66  
『七新藥』 25  
『七葉新書』 28  
『実験的網膜視神経結核』 85  
『実地内科綱要』 30  
『支那南北記』 43  
『寫眞週報』 47  
十八会 11, 80  
『十藥神書』 13  
十四年会 80  
『手術學』 95  
『主知的文学論』 51  
種痘 1, 25, 38, 46, 84  
種痘用具一式 84  
春光同門会 50  
春風社 27  
『春林軒禁方録拔萃』 20  
昇格期成同盟會『記録』 5  
『傷寒雜病論』 11, 12  
傷寒派 18  
『傷寒論』 11, 12, 15, 16, 18-20  
『捷徑医筌』 14  
昭十会 79  
『小兒科』 97  
少年団(ボーイスカウト)日本連盟 66

昭八会 78  
情報局 47  
昭和十三年会 79  
昭和塾堂 → 愛知県昭和塾堂  
『職業能力申告手帳』 8  
『初生児感覺機能發育ノ実験的研究』 89  
初代 10, 16, 29, 30, 47, 48, 50, 56, 65, 67, 71, 80, 93, 94  
『諸病源候論』 12  
『處方學』 91  
白樺派 51  
『シルゼ氏外科総論講義』 89  
『新岩手人』 46  
『新改訂解剖学』 21  
『新撰中庸組織學』 33  
人体天秤 45, 85  
『人体の構造についての七つの書』 14  
人体発汗天秤 85  
新聞紙等掲載制限令 7  
『新編萬病回春』 14

ス

睡眠物質 60  
『数学』 96  
相山第一高等女学校 98  
『砂の十字路』 52

セ

『西醫略論』 25  
生活必需物資統制令 7  
『精神病学提綱』 59, 90  
菁々寮 48  
『西説醫範提綱釋義』 21  
『西説内科撰要』 19  
西南戦争 34, 70  
『世界への船出:新地図の作成』 52  
惜別の辞 “Quidquid agis prudenter agas et respice finem.” 58  
『千金方』 12  
『戦時研究員制度二就テ』 48  
『戦前派病院長の回顧録』 53  
専門学校令 4, 63

ソ

『綜合大學設置二關スル縣會意見書』 7  
綜合文化講演會 99  
『蔵志』・『蔵志図』 15  
挿図帖とその使用例『解剖簡圖』 63  
総長懇談会 48  
相馬事件 35, 36

創立記念式　102  
『創立二十週年　記念繪葉書』　66  
『蘇香圓煉藥』　2  
『組織学』　77, 97  
『組織學第二. 格物学. 製薬學本篇. 製薬學』　87  
『組織標本製作技術』　77  
卒業アルバム(愛知県立医学専門学校)　72, 75, 76  
『卒業記念 名古屋醫科大學』　78, 79

## タ

大學祭醫學標本展覽會　99  
大學祭記念醫學大講演會　99  
『大学生活(昭和 15-18 年)を顧みる十八会 50 周年記念誌』　11  
大学令　5, 7, 65, 66, 79  
第五學期時間表　100  
第五中学校　66  
大三会　73  
大七会　75  
『胎生學圖譜　全部』　94  
『泰西眼科全書』　22  
大東亜戦争　48, 81  
『大東亜戦争戦災記念写真』　81  
『第二回綜合文化講演會』[ポスター]　99  
第二次世界大戦　54  
大日本國民教育會　61  
大日本私立衛生会　33  
大日本施薬院　67  
第八高等学校　41, 43, 46, 51, 52, 54-56, 65, 66, 68, 73, 96  
第八高等学校初代校長　65  
太平洋戦争　47, 50, 63, 67, 80  
『太陽』　52  
ダーウィン・メダル　55  
滝川事件　78  
橘会　103  
谷崎潤一郎賞　51  
『田村春吉』　50  
『斷訟醫學』　29, 33

## チ

『窒扶斯新論』　26  
腸チフス　11, 18, 26, 40  
『膈窒扶斯とパラチフス』　40  
『中央医学会雑誌』　36, 39  
『中央医事新誌』　39  
『蟲魚圖譜』　57  
『中部日本紳士録』　77  
迢空賞　54

ちるな会　73

## ツ

『通俗衛生新書』　34  
『通俗衛生圖解』　61  
『通俗肺病患者攝生法: 附肺病豫防法』　40  
『恙虫記』[DVD]　101  
恙虫病　39, 101

## テ

帝国学士院恩賜賞　45, 47, 85  
帝国学士院賞　42, 75  
帝国大学令　81, 102  
帝大仮校舎　68  
『帝都復興とは何ぞや』　42  
電気視力計　85  
癲狂院(癲狂室)　69  
『天使と悪魔』　98  
『田紳有楽』　51  
『傳染病患者届出票』　10  
伝染病予防規則　36  
伝染病予防法　10  
『傳染病豫防撲滅法　通俗傳染病叢書第壹編』　38  
天王崎町　4, 11, 62-66, 71, 73  
デンマン自回娩出　21

## ト

『獨逸語三ヶ月自修書』　37  
東京市長　39, 42, 51, 69  
東京連合少年団　66  
「同心会」　57  
銅人形　82  
独立美術協会　54, 61  
『所輝夫画集』　54  
図書館　8, 12, 54, 56, 73, 81, 98, 100, 102, 103  
『戸田教授　手術の図』　54, 61  
豊田講堂　103

## ナ

『内科彙講　神経系統篇』　35, 59, 90  
『内科学』　96  
『内科学神経篇通論　全』　90  
『名古屋医学』　36, 39  
『名古屋医学会雑誌』　36, 39  
名古屋医科大学　6-8, 44, 45, 47, 50, 53, 54, 61, 62, 68, 76-79, 85, 86, 98-102  
名古屋醫科大學運動會プログラム　99  
名古屋医科大学学生会　99  
名古屋医科大学学長　50, 74, 97  
名古屋医科大学学長・同附属医院長　73

『名古屋醫科大學第二期卒業記念アルバム』　78  
『名古屋醫科大學第六期卒業生アルバム』　79  
『名古屋医科大學第八回卒業記念』　80  
名古屋醫科大學配屬將校　7  
名古屋医科大学附属医院　98  
名古屋医科大学附属医院の机　98  
『名古屋醫科大學附屬醫院　内科病症日誌』　6, 8  
名古屋医科大学(予科)の歌　79, 103  
『名古屋醫科大學例規集　謄寫代用』　5  
名古屋掖济会病院　53  
名古屋県　1, 40, 46, 62, 76  
『名古屋縣病院規則』　2  
名古屋高等工業学校　41, 43, 59, 65, 66  
名古屋高等商業学校　43, 55, 65, 66, 68  
名古屋市医師会　34  
名古屋市衛生施設一覽圖　67  
名古屋市街圖　65  
名古屋市街全圖　66  
名古屋市街地図　68  
名古屋市総連合衛生会　67  
名古屋市復興都市計畫圖　68  
名古屋製薬　101  
名古屋大学　39, 42, 50, 51, 62, 95, 96  
名古屋大学医学部　11, 41, 43, 45, 46, 52, 54, 57, 71, 73, 95, 103  
名古屋大学医学部学友会　50  
『名古屋大学医学部学友会沿革』　50  
名古屋大学医学部附属医院　11  
名古屋大学医学部附属医院分院　68  
名古屋大学医学部保健学科　68  
名古屋大学医学部紋章メダル　103  
名古屋大学経済学部　55  
名古屋大学総長　42, 74, 75, 103  
名古屋大学大幸医療センター　68  
『名古屋知名人士肖像一覽: 明治四十三年大共進會　紀念』　72

名古屋鎮谷病院　28, 32, 70  
名古屋鶴舞女子機械工補導所　47  
名古屋帝国大学　6, 8, 10, 45, 47, 48, 62, 68, 74, 79, 81, 102  
名古屋帝国大学総長　8-10, 47, 48, 50, 74  
名古屋帝国大学医学部　6, 8-11, 66, 68, 76, 79, 80-82, 100, 102, 103  
名古屋帝国大学医学部長　8, 10, 74, 76  
名古屋帝国大学医学部附属医院　8, 9, 53, 55, 81, 82, 102  
名古屋帝国大学医学部附属医院分院　68  
名古屋帝国大学医学部附属医院分室　68  
名古屋帝国大学医学部附属医院長　8-10

『名古屋帝国大学医学部アルバム』　81  
名古屋帝国大学開学記念式典　記念品　102  
名古屋帝國大學　學生證　100  
名古屋帝国大学官制　102  
名古屋帝国大学工学部　102  
『名古屋帝国大学　昭和 18 年卒業アルバム』　80  
『名古屋帝國大學附屬醫院勝沼内科　病症日誌』 10  
名古屋帝国大学理学部　102  
名古屋帝国大学理工学部　10, 68, 81, 102  
名古屋帝国大学臨時附属医学専門部　6, 10, 49, 66, 68, 80, 82  
名古屋鉄道病院　67  
名古屋藩　2, 62, 76, 84  
名古屋病院附属看護婦学校　67  
名古屋名所: 東新町附近[繪葉書]　68  
軟性胃鏡　→　桐原式軟性胃鏡

## ニ

西本願寺別院　2, 70  
『日常衛生と傳染病豫防心得』　61  
日露戦争　38, 67  
日清戦争　38  
日赤名古屋診療所　67  
日中戦争　7, 8, 55, 79, 80  
二・二六事件　79  
日本医学会總會　12, 69, 75, 103  
日本医学会(第 16 回)分科会会長會議　103  
日本医史学会　82  
『日本科学史』　52  
『日本外科学会雑誌』　45  
『日本植物圖説　草部　イ: 初編』　28  
『日本の醫學』　49  
日本美術院　54, 61  
『日本文明の未来』　43  
『入學生徒寫眞』　80  
『乳癌摘出之図』　57

## ネ

『熱帯生活問題』　47

## ノ

脳血管撮影法　45  
『脳死は、死でない。』　56  
『脳と神経』　74  
ノンレストレイント・システム　69

## ハ

『微菌圖譜』　35  
肺結核(結核)　13, 35, 38, 45, 59, 72, 85  
『微毒學』　32



拝領衣類函 97  
『白鯨』 51  
伯爵後藤新平鑄像・後藤新平氏生家〔絵葉書〕 67  
箱飾 82  
初めて(最初, 初の, 本邦初) 1-4, 9, 15, 16, 19-21, 23, 25, 29, 30, 32, 35, 39, 40, 43, 45, 46, 49, 51, 53, 55, 57, 60, 61, 65, 74, 84, 85, 87, 88, 91, 97, 99, 100  
破傷風 38, 40, 92, 94  
八高校友會 66  
発汗室 45, 85  
発疹チフス 26  
初の → 初めて  
パラチフス 40

**ヒ**  
東山脳病院 67  
引札・報帖 2, 17  
引札と版木 98  
『尾州徳川藩種痘所記録』 1  
『日月の窓』 51  
皮膚移植手術 2, 3  
『皮膚病論一斑』 30  
百味筆筭 83  
『病院防空』 8  
『病院防空 一戦跡と戦訓一』 9, 81  
『病學通論』 23  
標本 59, 99

**フ**  
『ファブリカ』 14  
『風雪』 51  
『福如海』 60  
『腹證奇覽』 20  
『扶氏醫戒之畧』 24  
『扶氏經驗遺訓』 23, 24  
『扶氏診断』 24  
『藤野先生』 53  
『普通生理衛生学』 34  
『冬の宿』 51  
飾 82  
プレパアート見本 84  
文化勲章 45, 47, 55, 75, 85  
『分子進化の中立説』 55

**へ**  
『兵器を造る我等の覺悟』 48  
ベスト 37-40  
『ペスト豫防要録』 37  
『ベルツの日記』 87, 88

**ホ**  
ボーイスカウト 67  
『法医学』 91  
『法医学提綱』 91  
『報國會會報』 47  
『奉祝東京市之光景』 66  
『繙帯学図譜』 92  
『保嬰須知』 23  
『北越医学会報』 39  
『北越従軍銃創図録』 1  
『ポケット工場衛生』 45  
星ヶ浦の丘上に立つ後藤新平伯の銅像〔絵葉書〕 67  
戊辰戦争 1  
本邦初 → 初めて

**マ**  
『舞姫』 38  
満州事変 80  
マンドリン部 98  
『万病回春』 14

**ミ**  
ミカエリス・メンテン式 77  
『参河(三河)風土歌』 29  
三菱重工株式會社名古屋航空機製作所 48  
蜜蜂義塾 90  
『民間諸病療治法』 31

**ム**  
『昔ツウレに王ありき』 98  
無拘束治療法 69  
ムラージュ 50

**メ**  
『名医大第七回卒業記念』 79  
『明光の大連』 67  
名三会 78  
『明治初年愛知県公立病院外科手術の図』 29, 58  
明治 21 年の学生(愛知医学校)〔写真〕 71  
『明治四十三, 四年「ペスト」流行誌』 39  
名大(雑誌) 4  
名大醫學部學友會雜報 4  
『名大醫學部學友會報』 4, 50  
『名大醫學部學友時報』 4, 11, 103  
名大学友會報 4  
名帝大医学部学友會報 4

**モ**  
『桃介は斯くの如し』 41  
『文部省雑誌』 28

**ヤ**  
八重小学校 98  
『やきもの一技術・生活・美学』 52  
『薬物學』 96  
薬味筆筭 83  
薬籠 85  
薬研 84, 85  
八事少年寮 77  
『病草紙』 12

**ユ**  
輸血法 44, 45  
『輸血法講習録』 44

**ヨ**  
養陰派(滋陰派) 13  
『瘍科秘録』 22  
養志堂 13  
『養生訓』 15  
『養生新法』 28  
洋々医館 90  
予科 37, 46, 79, 88, 96, 103  
『よみがえる尾張医学館薬品会: 再現江戸時代の博覧会』 56

**ラ**  
『落第免状』 51

**リ**  
『陸軍衛生教程』 34  
陸軍現役将校学校配属令 81  
陸軍省 48  
『里氏化学書』 90  
リスター法 32, 88, 89  
『凌海詩集』 44  
『良心的兵役拒否の思想』 51  
『理禮氏薬物學』 26  
履歴書と辞令 101  
臨時脳死及び臓器移植調査会 56

**ル**  
『類聚方』 16

**レ**  
歴史の門を保存 11  
『鍊金術』 52

**ロ**  
『ローマ人行状記』 58  
『ローレツ自筆のドイツ語格言』 3

**ワ**  
『私のスポーツの記録: オリンピックと共に半世紀』55  
『和譯獨逸辭典』 27  
『我等の學園』 48

**A-Z**  
“Aichi Journal of Experimantal Medicine” 42  
“Anatomische Tabellen” 17  
“Aphorisms on the application and use of the forceps and vectis” 21  
“Compend of Materia Medica and Therapeutics” 26  
“De humani corporis fabrica epitome” 14  
Denman's spontaneous evolution 21  
“Doctrina de morbis oculorum” 22  
“Éléments de l'art des accouchemens” 16  
“Enchiridion medicum oder Anleitung zur medicinischen Praxis” 23, 24  
“Gesta Romanorum” 58  
“Gezuiverde geneeskunst, of kort onderwys der meeste inwendige ziekten” 19  
“Handbuch der Sanitätspolizei” 36  
“Handwörterbuch der deutschen Sprache für Japaner” 27  
“Intrazelluläre Oxydation und Indophenolblausynthese : histochemische Studie über die “Oxydasereaktion” im tierischen Gewebe” 42  
“Lateinisches Uebungsbuch im Anschluß an ein grammatikalisch geordnetes Vokabularium” 27  
“Lehrbuch der inneren Medicin mit besonderer Rücksicht auf Japan bearbeit” 87  
『Lesen, Denken und Arbeiten : 祖父江逸郎教授退官記念』 54  
『MARUKO PRICE LIST』 6  
Mouflage → ムラーージュ  
“Nagoya Journal of Medical Science” 42  
non-restraint system 69  
“On bandaging, and other operations of minor surgery” 26  
“Ontleedkundige Tafelen” 17  
“Oxydasereaktion” im tierischen Gewebe” 42  
“The physiology of human perspiration” 45  
“The neutral theory of molecular evolution” 55  
“Traité des maladies des femmes grosses” 15  
“Vergleichende Darstellung der Medizinalpolizei und Medizinalverwaltung in Japan und anderen Staaten” 35  
“Vortraege der speciellen Pathologie gehalten in den medicinischen Academie zu Tokio” 87  
“Vortraege der allgemeine Chirurgie” 88  
“Vortraege der allgemeinen Pathologie” 88  
“Vortraege der speciell. Chirurgie” 88  
“Vortraege der speciellen Chirurgie” 89  
“Vorträge der spec. Pathologie und Therapie” 87

本刊行物は、平成27年度第2回 名古屋大学全学同窓会大学支援事業  
の助成を受けたものです。

事業の名称：「名古屋大学メモリー」創基から新制名古屋大学へと至る  
歴史資料解説図録の発行と、インターネットによる公開

申請者：蒲生英博（名古屋大学附属図書館医学部分館 特任専門員）

なごやだいがく  
**名古屋大学メモリー**  
そうき しんせい なごやだいがく いた れきし しりょうかいせつ ずらく  
創基から新制名古屋大学へと至る歴史資料解説図録

---

2017年1月10日発行  
非売品(限定1,000部)

編 著 がも う ひで ひろ  
蒲 生 英 博  
監 修 たか はし あきら  
高 橋 昭

発 行 名古屋大学附属図書館医学部分館  
〒466-8550 名古屋市昭和区鶴舞町 65  
TEL 052-744-2505  
FAX 052-744-2511  
<http://www.med.nagoya-u.ac.jp/medlib/index.html>

印刷・製本 株式会社 荒川印刷  
〒460-0012 名古屋市中区千代田 2-16-38  
<http://www.arkw.co.jp/>

---

© GAMOH Hidehiro & TAKAHASHI Akira, 2017  
ISBN 978-4-900986-13-8